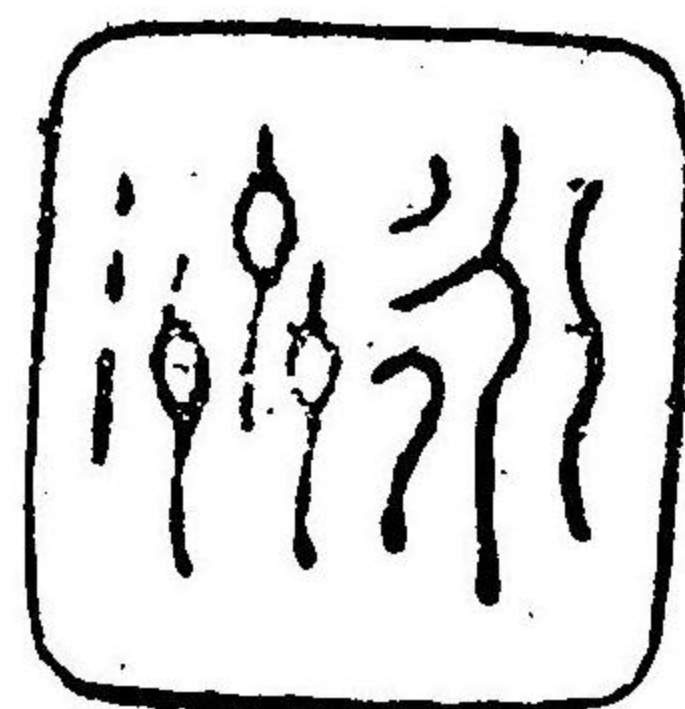
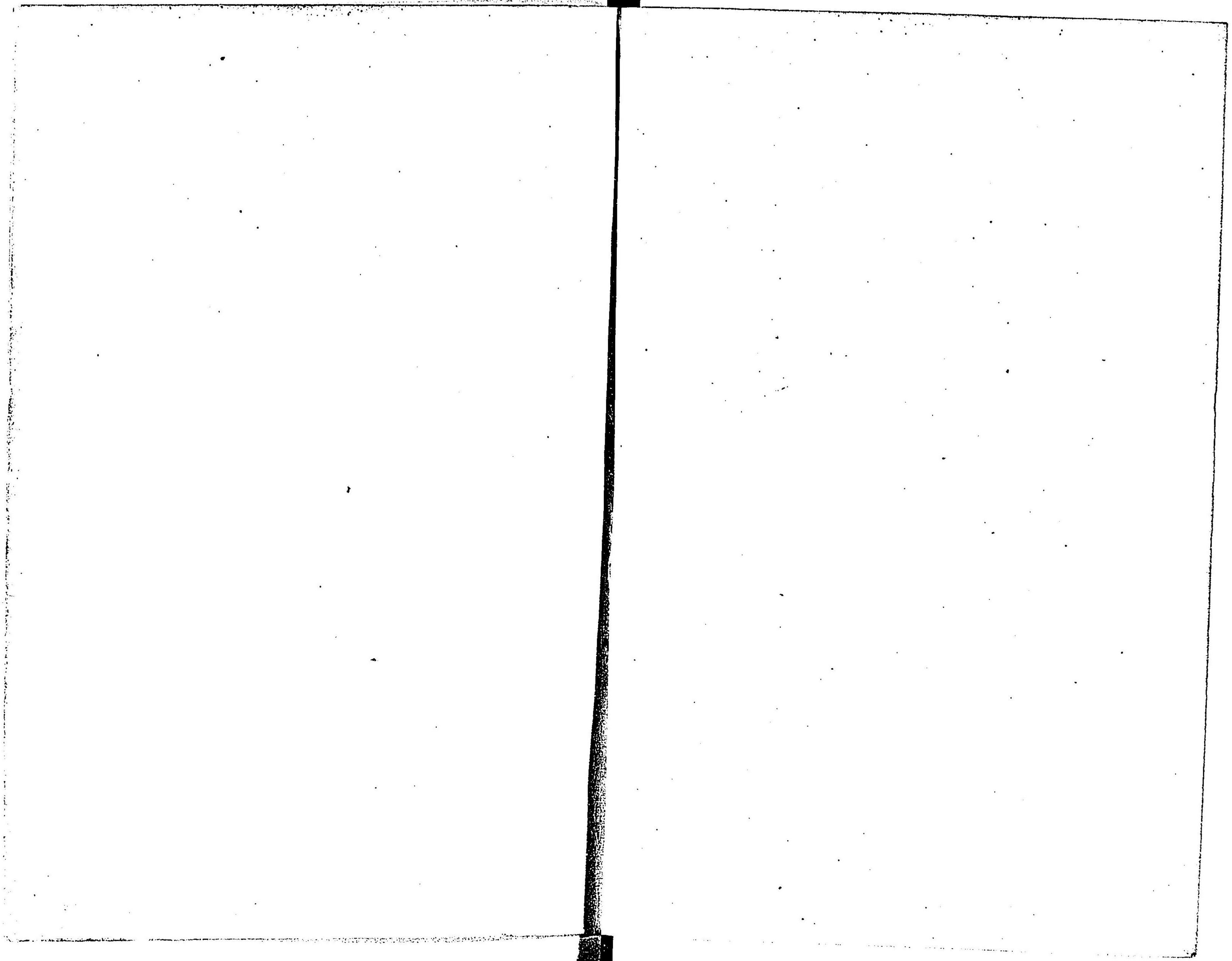


9



この図書は本館調査員松岡主査、松尾勇實氏の
の提供によるものである。(1957年12月)



比較文學史



447526

901.9
CL83h
丁

序

一時代の文學はやがてその時代の精華である。その文明の凡てである。この意味に於て比較文學史は世界の文明史である。その精華の發展並に變遷の歴史である。従つて斯くの如き學問研究は最も困難なる事業である。今日まで何人も之に手を着けたものゝなかつたのも道理である。然るに今この難事業がフレデリック・ロリエ氏に依つて試みられた。ロリエ氏はまだ無名の一學者である。その深大なる學識と高遠なる洞察とを有するに拘はらず、未だ以て盛名を博するに至らない。併しながらこの學海に破天荒なる比較文學史の一大著作は、優にその名を不朽ならしむるに足るであらう。

本書論述する處之を時間にすれば、上は有史以前より下は現代の自然主義象徵主義に至り、之を空間にすれば、西歐諸國は素より、東洋は日本支那印度は言ふに及ばず、シム、カムボジア等にまで及び、更にコロムブス發見前の米大陸に於ける文學にまで及んで居る。或は西歐經典の源に溯り、或は印度文學の盛時を説き、荷

も洩らさざらん事を力めて居る爲めに往、語つて精しからず、説いて明晰を缺く嫌なきにも限らぬが文學即ち文化が甲の時代から乙の時代に推し移り、その順を逐ふて文化に影響する處、若くは一民族が他の民族と交渉し、或は戦ひ或は合同する間に於て互に相及ぼす感化を説明し、更に大局よりこれが如何に世界の文化を發展せしめて行くかを會得せしむる處の如きは、頗る整然としてこの世界の文學を掌に指すかのやうである。思ふにこれこそ世界文學の鳥瞰景である。よしや此書幾多の缺點ありとするも、なほ現時に於ける唯一の書物として之を江湖に推薦する價値はある。なほ斯くの如き廣大なる題目を僅々數百頁の内に取り扱つたのであるから、原書の内容は極めて緊縮したものである。斯くの如き翻譯の困難な事はいふまでもない。この至難の事に當られた譯者戸川秋骨氏の勞を茲に謹謝する次第である。

明治四十三年二月

大日本文明協會識

目次

第一章

有史以前の狀態——思想最古の痕跡——上古の劈頭に於けるエヂプト文化の萌芽カルデアの塵中に顯はる——ユーフラテス、チグリス兩河畔に住せし民族及び人種の文明——小亞細亞より遙かの地——支那帝國の住民——中央アメリカの高原——ウエダの印度。

第二章

印度思想最古の證據——亞細亞と歐羅巴との比較——サンスクリット文學に於ける宗教的並に抒情的詩歌の發達——ウエダ文學——歴史の時日——アリアン人種の横行濶歩——歐羅巴——ギリシア人の成立。

第三章

三三—四二

(1)

次 目

ギリシア人在住以前のギリシア——ヘルネス文化の小説的起源——行吟詩人の時代——ホーマー時代——イリヤッド及び行吟詩人。

第四章

ギリシア以外——故意に周囲の諸國を無視す——印度、ペルシア、ユダヤ、エトルリア等智識的中點の順次の發展——ヘルネスの思想と「野蠻思想」——獨特なる文學の發達とその衰亡——ギリシア思想の變化——ヘルガモスとアレキサンダリア——紀元前五四〇年に至る。

第五章

ギリシア拉丁の混交以前——兩文學協会の初——古き拉丁詩歌——ビュリニク文化の廢墟——シラノ時代——「オーガスタス時代」——文化の全事業——偉大と衰亡——哲學的研究の復興。

第六章

一〇四——一三六

拉丁文學の白銀時代——トラージャン帝の風貌——權力の頂點に達せるローマ——トラージャン帝時代に知られたる世界の概況——急速なる衰頹——ギリシア及びローマ文學の末期——東方の首都なるアレキサンドリア——アレキサンドリアの哲學者——アレキサンドリア學派と基督教の併行並に競争——更新せる異教の努力——ジュリアン帝第四世紀。

第七章

一三七——一六〇

藝術の衰運表面上停止の姿をなす——野蠻人の侵入により藝術の衰運急進す——多少の殘破——第五世紀より第八世紀に亙る歐洲人の道德的及び社交的狀態——ドイツ人並にスカンデナヴィア人の傳説及び俗語——エッダの起源——古典的舊思想の殘壘——東帝國に於ける文學的努力の實際の休止。

第八章

一六一——一七五

シャルレマン帝の文紀再興——文化に向ふ努力——シャルレマン、アルキエイン、ラバナスマウラス——第九世紀の終り第十世紀の初めに於ける亂脈——封建の世界——無智文盲再び歐洲を蔽ふ。

第九章

西歐に於ける文化の全滅と亞細亞に於ける學問の隆盛との對照——極東にてすら然り——第十世紀に於ける支那、日本及びクメルの地並にベルシア——第八世紀以後に於けるアラビアの學問——その文明に就ての見解——西歐に於けるアラビア文書の紹介。

第十章

歐洲各國の國風並に國語成る——信條の獨裁世界を左右す——信條の獨裁を免れんとする平民的國民的詩歌の當初の力爭——武勇を賞讃する歌謠の起り——武士道の歌(Chansons de Geste)——此種の歌謠自ら冒險及び武士道に關する哀傷的物語に變ず——圓卓の一團——その起源——圓卓の物語は今や隆起せんとせる歐洲文學の審美的觀念並に一般の豫望に異常なる影響を與ふ。

士道に關する哀傷的物語に變ず——圓卓の一團——その起源——圓卓の物語は今や隆起せんとせる歐洲文學の審美的觀念並に一般の豫望に異常なる影響を與ふ。

第十一章

第十三世紀の概況——其初期に於ける各國文學の根本的一致——イギリス、フランス、ドイツ並に南歐の民族間に於ける文學及び藝術の一樣なる發達——ツルヴェール及びツルバドール——アングロサクソンの行吟樂人——ドイツのミンネジングル——民族間の詩歌、宗教萬能主義並に封建的弊風の勢力を一掃す。

第十二章

新時代の生るゝ苦悶——第十四世紀の沈淪せる光景——各種の人民及び各種思想の激烈なる變化——宗教改革の前驅者——ウイクリフ——ジョンハッ

ス——ブラーグのシエローム——文藝の漠然たる運動に對する政治的社交的事實の優勢——東ローマ帝國の没落——没落の爲めギリシア文學は、
ンスタンチノーブルよりイタリアに來たる——スペインに於けるアラビ
ア文化の没落——フランス思想の比較的貧弱——文化の燈光イタリアの
手に移る——文藝復興の曙光。

第十三章

二六一——二八一

社會の紛擾蔓延す——イタリアに於ける文學及び藝術の驚くべき展開——
古學の復活——二大史實——文藝の復興と宗教改革——兩者の連鎖——
兩者の併進——ルター、エラスマス、カランクトン——文學に於ける宗教
改革の遠き反響。

第十四章

二八二——三三三

急激派及び教義上の論争——ジュネウアに於けるカルヴァン——ジョン・ノックス及

ピスコットランドに於ける長老派——社會的宗教的革命的道行——イグナ
シウス、ロヨラ——トレントの會議——歐洲其他の諸國民を碎滅したる無
数の害悪と竝立したる偉大なる思想上の活動——局外に存立せし二種の
文化の滅落に就いての一考、ロペハート、メキシコ——社會の災厄はタッシ
とアリオストロを有したるイタリアに於ける文學の進歩を阻害せず——
シエイクスピアを有するイギリスに於ても同様なり——セルヴァンテスを有
せるスペインに於ても然り——カモイエンを生みしポルトガルに於ても
同じ——荷トルコに於ても同様にして當時は此國の黄金時代なり——フ
ランス文學發達に復歸す。

第十五章

三三三——三八五

壯麗なる古典時代の曙光——荷提亂の時代——イタリア及びスペインの
奴隸的模倣——文學に於ける目的の不確定——コンセツティズム、カルティズム
術學——マリニズム、コンゴリズム及びエスティロ、カルト——良趣味及び

常識の反動——フランス及びイギリスに於ける社會の狀態——王政復古時代の放肆を招ける完全なる反動著しき滑稽的調子の發動——イタリヤ文化の狀態——スペイン、オランダ、ドイツ——三十年戦争の後——森嚴なる道德上の苦惱——佛獨時代——多數の歐洲國民等しく模倣を愛好す。

第十六章……………三八六—四一六

哲學時代の實際の起點は稍不明なり——當の特色とすべき文學の獨立なるもの見らる——フランスの百科字典諸家——ヴォルテア、ジャン・ジャック・ルソー——ドイツ——各國民間に於ける思想の交換特に英佛間に於ける——大約一七八九年に至るまでのフランスの文學上に於ける主上權。

第十七章……………

智的運動やがてフランスに社會的革命を招く——擾亂の十箇年——同時代のイギリス、ドイツ——ドイツは智力的事物に關し頭角を顯はす——ド

イツに於ける驚くべき思想の發達——詩人及び哲學者——この偉大なる智的活動に次ぐに衰弱銷沈の時期來たる——ヴェルテルの憂愁——世界的苦悶即ち世紀病。

第十八章……………

ローマンチックの運動始まる——其結果全歐に及ぶ——思想界の各部に於ける眼界擴大せらる——研究の革新——純然たる想像的側面の修養——純粹なる哲學——ローマンチックの詩——イギリス、フランス、イタリヤ、スペイン、ロシア、ポロランド及びスカンディナヴィアに於ける其變態及び各種の表白。

第十九章……………

ロマンチズムは凡ての想像並に空想の源を消盡す——現實に歸らんとする反動——社會的政治的生活並に道德的典範の狀態——第二帝國——

文學に於ける現實主義——歐洲に於て現實主義が取れる各種の形式——
フランスに於ける自然主義、其他の諸國に於ける其模倣——新派の建立。
第二十章……………五三五—五九四

文學界に於ける大分派——フランス其他に於ける新ギリシア主義——新
キリスト教及び神祕的翻弄詩——象徴派——一般文學の世界共通の性質
——フランス、イギリス、北米合衆國、スペイン及びイタリアに於ける最近の
表白——新しき文化の中心——二十世紀の曙光。

結 論

……………五九五—六七四
一、各種の文學史の考量より起る第一の觀念——或種の著作及びその著者
の不確實——文學の破船——廣漠たる著作界を評論して得られたる最も
明白なる結果——二、偉大なる智力的運動の共通性——文學上に於ける特
殊の時代間に存立する類似——三、感興の共通的本源並に各時代の人心

目 次 終

が期せずして得たる普遍的第一の觀念——四、各國いづれも絶對的特長を
有せずして各全體の上に寄與する處あり——五六、古代及び近代の各文明
の間に争はれたる優勝權多くは永續すべき絶對の特權を有せず——或時
代に於て盛ん——りし文學の消長——其各の功績、其特長並に缺點——ギリ
シア思想並に其弱點——フランス思想——イタリア、スペイン思想——ド
イツ思想——アングロサクソンの力量——ロシアの文學的氣質——七八、
各文學の相互の影響——九十、起原及び性質を異にするものゝ互に合一す
る事——現時に於ける集中力並に範圍の縮少——言論及び文學の將來。

比較文學史

第一章

有史以前の狀態——思想最古の痕跡——上古の劈頭に於けるエヂプト——
文化の萌芽ガルドヤの塵中に顯はる——ユーフラテス、チグリス兩河畔に
住せし民族及び人種の文明——小亞細亞より遙の地——支那帝國の住民
——中央アメリカの高原——ヴェダの印度。

世界の文明なるものは駭々として進み、各種の學問は著しく發達して來たので、
今日では有史以前の上古の事物に關しても充分科學的に學說を建立し得る時
代となつた。上古の事に關して云へば、實に十八世紀の初めに當つて比較建築學
と云ふやうな學問の基礎を立てた人もある。此人の名はジュシユ(Jussieu)といふ
が、それより以後人種學上の種々な發見があつて、考古の學は多大の利益を得、又
發達を見たのである。併し未だ言語に關する考古學即ち比較言語學若くは比較

文學と云ふやうなものに至つては其基礎が据えられて居ないやうである。現著者は今此方面に手を着け、先人未知の天地に這入らんとして居る次第である。偕て翻つて一般人類學の進歩なるものを視るに、現代の進歩したる科學は探險開鑿即ち古墳を掘返し、また土地を掘開きなどして人類最古の状態を探究した。その結果は如何にと云ふに、それに據つて次のやうな事が解つたのである。即ち殆ど計算することも出来ない程の太古の状態を吾人の眼前に示し、二十世紀の人類なる吾人と同じやうな人間らしい者が、その時代には大きな山猫の如き獸類と一緒に住んで居り、或は峻しい山を攀ち、或は深林の中を彷徨ひ、また深き洞穴の中に隠れ、又互に意志を通ずるには單純な唸るやうな聲を出したりした。こゝや、更に腹が空ると一つの餌食を大勢が一緒に追廻したりしたこと、更にまた進んではこれ等人間のやうな動物は他の動物と異つて、自ら此自然の獸性的状態を段々に脱却し、或は燧石を用ひ、石を切り、動物の骨を用ひて道具を造り、遂には不器用ながらも大きな斧まで拵へたのみならず、總ては進歩の上に最も有力なる火と云ふ要素を發見するやうになつた。これ等の事はみな科學に依り

また探險開鑿に依つて分明になつたのである。猶またこの半獸的状态は幾世紀も續いたので、この状態を通過して人間は始めて有史以前の最も進歩した時代である銅器時代若しくは鐵器時代に到達したのである。

併し科學はこれ程人類進歩の跡を尋ね、その結果を明かにして居るにも拘はらず、人間の所謂智識なるものは實際何れの時代から働き始めたかと云ふことに至つてはこれを明白にすることが出来ない。謂はゞ何處までが獸類で何處から人間の智識の働きであるかと云ふ事は解らないのである。更に言葉をかへて云へば、抑人間がその考を發表し始めたその最も古い形跡は如何なるものであつたかと云ふ事は、茫として捕捉し難いのである。

この外科學はそれ程の探險と研究とを積んでも、未だ今日吾人が見る人類の祖先は何處に居たか、即ち夥多の人間らしい動物が居たその中から撰ばれて今日の人間の元となつたその種族の中心點に至つては、誰もこれを明かにすることは出来ない。従つて唯吾人は想像を以て古代の暗黒なる夜を僅に手探り歩行くのみであつて、未だ古代の言語とか思想とかの起原は何處にあるか一向に手懸

さへも得られないのである。抑、この動物の域を脱して人間となつた初めの生物が、或は戀の情を舒べんと努めたり、或は高尚なる人生を慕ふ漠然たる感を言ひ表はさんとしたり、抑、また超自然の事物に對し苦痛の叫びを出し、不可思議に對して恐怖の念を起したことを杯に就いては一向に知ることは出来ぬ。これ等の感は即ち人類自然の初めて發した歌である。又初めて述べた哀しみで、その聲は恐らくは動物の發する叫聲を去ること遠からざるものであつたであらうが、其起原に至つては今日解らぬのみならず、或は今後と雖それを明かにすることは出来ぬかも知れぬ。

セミチック人種と印度歐羅巴人種とが歴史の舞臺に現はれたのは古いことであるが、その以前人類は既に文化に進んで居り、人間の生活に關しての道德的問題とか、または實際問題とかに逢着して居たことは明らかである。勿論その明瞭な智識は得られないのであるが、推察だけは稍附けられるのである。それで其處に一時代が劃される。極めて精細な歴史家はその時期を以て紀元前六千年と四千年との間にあるとするが、兎に角この時期の間に人類の最初の團結が出来たや

うである。少くともさう假定して居るのである。さうして此時期に於て人間は無意識な眠つたやうな蟲であるか人間であるか解からない状態から少しづつ覺醒して來たやうに考へられる。またこの時代から世界は三大人種によつて占領せられて居たらしい。そして今もさうである通り白哲人種の住する地——歐羅巴、亞非利加の北海岸、小亞細亞等——に於ては二個の進歩的運動が起つたやうに察せられて居る。即ちその第一は大西洋沿岸の地に起つたもので、その特色はアイリヤ人 (Iberian) の歐羅巴に這入り、またベルベル人 (Berber) の亞非利加に來た事である。第二は東方から起つた者で、その運動は幾多民族の變動を伴ふと共に、殖産並に信仰の念を伴つて來たのである。これ等東西兩部に起つた文化に進む運動は相互に交錯し混合したものであるが、その痕跡は希臘や伊太利の極く古い傳説の中に貽つて居ると云はれて居る。

されば西の埃及と東のカルデヤとは實際孤立して兩立し、古代史の劈頭に判然と際立つて居る。その姿は恰も暗夜に光る二個の寂びしき惑星の趣である。この東西の兩文化兩人種を除けば、爾餘の人種は吾人には殆ど不必要のものである。

それ等は實際影の如くに過ぎ去つて、何等の痕も残して行かないのである。さうして吾人の想像又は假定の説は、随分古代にまで遡り得るのであるが、この兩人種以前には及び難きやうに見える。尤もツラニアン族(Turanian)とかクレーシャイト族(Kouschite)とか、早く有史以前の亞細亞に居たと云ふ説もありはするが、上記の兩人種に就いての説は、この亞細亞に於ける兩人種に關する假説とは全く別途のものである事を一寸こゝに辨つて置く。

吾人の祖先が暗黒な森の中に住んで居たその時代を先づ想像して次に埃及時代の考へて見ると、其飛躍の著しい事は實に駭かれる計りである。我々は我々の祖先が深森の中に彷徨して居た事を想像するが、その以後の事に就いては明瞭な考はない。その以後の事に就ての明瞭な考と云へば即ちこの埃及の文化でこの時代には業に人類が立派な宗教を有し、壯大な文明を有つて居たのであるから吾人の想像はその一足飛に驚かれる次第である。

埃及に於て詩人がトスメス三世若しくはラメセス二世西教經典出埃及記の

ファオ王の父の宮殿に聚まり、詩歌を以てその徳を頌したと云ふのは史上の事實であるが、それより遙か以前に藝術家や文人が埃及に居たと云ふのも事實である。メムフィス宮廷の時代からして形象文字は澤山に存在して居た。さうしてそれ等は民族の迷信とか又は宗教上單純なる不可思議と考へたことを示すに止まらず、純粹な哲學的思想を既に示して居る。又それに依つて國王ファオの時代に置ける人民の生活状態、その公私の状態の極めて精しい事までも後世に貽されて居るのである。

埃及王系の第六代頃に、或る官人が將に死なんとする時に自分の墓碑に斯う云ふ事を鐫りつけて貰ひ度いと云つた事があつた。即ち書物の家の主宰者として貰ひ度いと云つたのである。之を以て觀れば當時書物の存在した事は確實であるのみならず、書物の家と云ふからには文庫を滿たす程澤山な文書があつたと察せられる。更にまた主宰者と云ふのであるから、それがこれを管理する程な高官を必要とした程澤山にあつたと想像しなければならぬ。即ち埃及文化の初めは餘程古いものであると断定し得るのである。その時代の書物は多くは湮滅し

て居るが、それ等は察するところメンフィスの王城を建立したメネスの時代よりも古いものであらう。また當時死者の書と云ふのがあつた(そのパピラスに寫した儀式を書いた者であるが、この外古の諸王の言語行跡を頌した詩もある。學術上の論文もある。小説、物語、戀愛詩、杯もある。これ等は更に後代のもので今日まで傳へられて居るのと同種類である。それから當時の文書の多分を占めて居たのは宗教上のものであると思はれる。埃及の宗教上の書物は遙かに支那の經典やブラマ教のヴェダまたはバルシイのゼンダヴェスタ(Zend-Avesta)よりも古いものである[戀愛詩に就て一言するが、紀元前十三世紀頃編纂された三種の詩集の短篇が残つて居る、これが埃及人の戀愛の秘密を語る者だと云ふさうである。それからまた同様な舒辭詩が古墳の中から段々發見されたと云ふことである。これ等は皆人情の同じ源から出たのであれば、後代に蒐められたアラビアの詩と大に似た處があるのみならず埃及學者のマスpero(Maspero)氏の説に據れば、その詩形とか作法に於てもそれが伊太利の一種の歌を想はせると云ふ。]

二

埃及の事は暫く措て更に北東の方を見るに地中海、紅海、裏海並に加哥察山脈コウカサスの間にある廣漠たる地に各種の國民の移動があつた。その中には祖先の定めた地を動かぬものもあつたが、中には北方亞細亞の廣野から南方溫暖な地方に移動して來たのもあつた。そしてこれ等の人種は皆カルデアの廣い地を占領したが、それ等の人種の中にはそれから後國民の形を具へるやうになつたものもある。例之ばアッカード人(Akkads)——これは近頃發見された人種で、その言語から云つても宗教から云つても他の人種との關係を見付けることが出來ない人種であるが——それから又スメリアン(Sumerian)人の如きは著しく高度な進歩を示して居た。これ等の人種がユーフラテスの下流の地方に來た時には既に文書を有つて居た(形象文字を簡略にしたものらしい符號を並べた者)又立法の法則や、餘程進んだ宗教も有つて居たのみならず、また殖産上の事に就ても當時それと比肩する者は他になかつた。彼等はまた都を建立し、要塞を築き、銅を作り、また鐵をさへ鑄たらしい形跡がある。それからまた車を作り、毛布を織り、立像を拵へ、浮彫杯

を以て壁を飾ることさへ知つて居た。近頃になつてこの浮彫の意味を闡明することが出来るやうになつたが、これは學術上の一大奇蹟とせられて居る。この浮彫はド・サルゼク(De Sarzeck)氏の發見したもので今佛蘭西のルーヴルに保存されて居る。この浮彫の意義を明かにした結果はこの人種の首長の人相をも明かにすることを得たのみならず、進んで四千年若しくは四千年以前のその言語をも明かにすることを得たのである。即ちこの言語は四千年若しくは五千年以前に於てカルデア地方のウル(Ur)若しくはシルプラ(Sipula)の住民が互にその思想を換はし、その壁に歴史の第一頁を記入するの用に立てたものである(なほアッシリアの記録でニューヨーク・クローブレット(New York 書版)と云ふものがある。これは後段に述べるがそれにはセミチックの言語が記されてあつて、紀元前四五千年にシムの人種がアメリカ人の上に勢力を及ぼして居たことを示して居る。シムの王が權力を振つて居たことは明瞭なことで、これによつてもシム人のバビロンに移住したことは五十世紀前でなければならぬことを證明する。それで博士ラッリ・シッレヴェーユ(Latouche-Tréville)の言ふところに従ふと、シム人種は少くとも一千

年間その地方の主権者であつたに相違ない。従つてアメリカ人の歴史とその文華は紀元前六千年に始まつたとしなければならぬ事になる。紀元前四千五百年以來(それより更に古いと云ふ説もあるが)このアッカド人とアメリカ人とは紀元前二千年に至つてシム人種の侵入により攪亂され散亂して消滅するまでの間ユーフラテスとチグリス河との會合する處に生活し、全然他の人種とは別居して居た。かれ等は風貌に於ても言語に於てもその周圍の人種即ち曲つた齋鼻と房々とした髭の生へて居たチグリス河畔のコシヤ人(Cossians)、シシヤ人(Cissian)、ターシャイト人(Kouschite)、ユーフラテス河畔のアラメア人(Arameans)その外廣野の中に住して居た遊牧の民とは異つて居た。斯くてかれ等は消滅したが、かれ等はその後に来た人種は即ちアッシリア人、フェニシア人、猶太人等に多大の記録傳説を残して居たのである。殊に最も後に来た猶太人の如きはかれ等兩人種に負ふ所多いのである。猶太人の書いた聖書中に見る特殊な思想の言ひ表はし方や詩的譬喩杯で、長い間聖書獨特の文辭であるとされて、ヘブライ即ち猶太の神聖なる天帝から告げられた文句だと考へられて居たものは

みなこの人種から出たものであることが解つた。實にその文體やまた聖書中によくある文の中に同じ觀念を繰り返す云ひ廻しなどは最近の碑銘學の研究によつて全然アッカド人種から出たものであると云ふことが解つた。ダビデ王が書いたと云ふ舊約書中の詩篇の中にもアッカド人の用ひた言語の様式がある。その中に吾人はアッカド人の祈禱の反響を聴くやうな心持がするのである。(Die Hoellenfahrt der Istar, nebet Proben Assyrischen Lyrick 参照)

三

上記の人種と共になほ一種その起原も性質も特色も異にして居る別の人種が存立して居た。その言語はセミチツク一派であつたが、極く古い時代からチグリッス、ユーフラテス河並にベルシア灣の陸に移住して居た。この人種がまた將來カルデア人の大事な要素となつたので、かれ等は自分達の信仰とか宗教上の儀式とか典禮とか云ふ者をこのカルデアに紹介したのである。最もその宗教と云ふのは禁厭、人寄せと云ふやうな者を主として又その歌杯も不思議なものであつた。彼等はまた悪靈の書 (Book of Evil Spirits) と云ふのを有つて居た。これ等は今日

でも尙だ遺つて居て學問上の研究の價値ある者である。

この人種は實に猶太人の祖先として居るアブラハム(アブラハムは其父テラーと俱にカルデアのウルに生れて後俱にカナンの地に移つた者である)に先立つと三千年前既に書版アインシュをもつて居た。それに楔狀文字の記録が一杯に記されてあるが、近頃の學問は遂にこれ等の記録を説明し得るやうになつた。それに據つて見れば澤山な形象文字は七千年間のパピロニア王の系圖であつて、同時にそれは耶蘇紀元に先立つこと五千年の古に於て世界の文化は其地に於て高度に達して居たことを證明して居る。この書版アインシュと云ふ煉瓦のやうな物は一千九百年に紐育の神學校の校長イ・エ・ホフマン氏 (E. A. Hoffman) によつて發見され、教師ユーゴ・アダム氏 (Rev. Hugo Adam) によつて判讀されたものである。

併しこれ等チグリッス、ユーフラテス河畔に住して居た幾多の人種は互に交錯し同化した。そして永き年代の過ぎると共に彼等は其の故郷を忘れて、初めからこの兩河の地方即ちカルデアを以て本國とするやうになつた。そこで彼等は不思議な自國の歴史を編出し、その物語のやうなものを書物にして人民に教へ込ん

みなこの人種から出たものであることが解つた。實にその文體やまた聖書中によくある文の中に同じ觀念を繰り返す云ひ廻しなどは最近の碑銘學の研究によつて全然アッカド人種から出たものであると云ふことが解つた。ダビデ王が書いたと云ふ舊約書中の詩篇の中にもアッカド人の用ひた言語の様式がある。その中に吾人はアッカド人の祈禱の反響を聴くやうな心持がするのである (Die Hoellenfahrt der Israr, nebet Proben Assyrischen Lyrick 参照)。

三

上記の人種と共になほ一種その起原も性質も特色も異にして居る別の人種が存立して居た。その言語はセミチツク一派であつたが、極く古い時代からチグリス、ユーフラテス河並にヘルシア灣の陸に移住して居た。この人種がまた將來カルデア人の大事な要素となつたので、かれ等は自分達の信仰とか宗教上の儀式とか典禮とか云ふ者をこのカルデアに紹介したのである。最もその宗教と云ふのは禁厭、人寄せと云ふやうな者を主として又その歌杯も不思議なものであつた。彼等はまた惡靈の書 (Book of Evil Spirit) と云ふのを有つて居た。これ等は今日

でも尙だ遺つて居て學問上の研究の價值ある者である。

この人種は實に猶太人の祖先として居るアブラハム(アブラハムは其父テラーと俱にカルデアのウルに生れて後俱にカナンカナンのの地に移つた者である)に先立つと三千年前既に書版テラレットをもつて居た。それに楔狀文字の記録が一杯に記されてあるが、近頃の學問は遂にこれ等の記録を説明し得るやうになつた。それに據つて見れば澤山な形象文字は七千年間のバビロニア王の系圖であつて、同時にそれは耶蘇紀元に先立つこと五千年の古に於て世界の文化は其地に於て高度に達して居たことを證明して居る(この書版テラレットと云ふ煉瓦のやうな物は一千九百年に紐育の神學校の校長イ・エ・ホフマン氏(E. A. Hoffman)によつて發見され、教師ユーゴ・アダム氏(Rev. Hugo Adam)によつて判讀されたものである)。

併しこれ等チグリス、ユーフラテス河畔に住して居た幾多の人種は互に交錯し同化した。そして永き年代の過ぎると共に彼等は其の故郷を忘れて、初めからこの兩河の地方即ちカルデアを以て本國とするやうになつた。そこで彼等は不思議な自國の歴史を編出し、その物語のやうなものを書物にして人民に教へ込ん

だ。これを教へる者は原より僧侶であつて、その僧侶の最も學問のあるまた極めて想像力に富んだ者は、其中に天地創造の不思議な話から人間の先祖の起原、それから段々人間の墮落して神恩を忘れて行くことや、全能の神バールが怒つてその創造した物を盡く亡ぼさうとしたことから、洪水の譚並に再び洪水を起さぬと云ふ約束の紅霓の出る譚、人々の言語の不通になつた話、神々や偉人の治世に次で第一のカルデアの王統の建立の話など、さう云ふものを織り込んで話したものである(このハビロニアの神話と聖書中の創世紀の記事との比較研究は極めて興味ありまた緊要なる問題となつたが、これは英吉利のジョージ・スミスと云ふ人がニネベのアッスルバニバル(Asurbanipal)と云ふ圖書館にあるアッシリアの書版に天地創造の歴史が細く刻みつけられてあるのを發見してから起つたことである)。

カルデアの王の中にシャルギナ(Shargina)と云ふのがあつた。これは四方を征伐し文化を進めることに與つて功績のある人であつた。自分の權威を擴げるとともに都府を建て全カルデアに渡つてシム族の力を優勢ならしめた人であるが、そ

れと共にこの王はまた學問を保護したと云ふのがその特異の一であつた。ウルク(Uruk)と云ふところ(古のオルチャム(Orcham)聖書中のオレク(Orelk)近頃ではワルカー(Warikh)と云ふ處である)に立派な圖書館を建て、それが爲め其處が『書物の都』と號された位であつた。この王の奨勵によつて當時の學者は諸方から古い書物を此處に持ち寄つて、それを翻譯したり、シムの言葉でそれに註釋を加へ、または争つて宗教や天文や文典や立法等に關する書物を書いてこの圖書館の書物を殖やしたが、實にこれは非常に困難な大業であつたに違ひない。その後一千五百年過ぎてアッシリアの王の命令によりこれ等の文書は再び整理され、それを焼泥の書版に書き寫したことがあつたが、それが爲めこのハビロニア文學(即ちカルデアの文學)は断片的ではあるが今日まで傳はり、現に大英博物館(British Museum)の最も貴重な所有物の一になつて居る。またそれと均しく大事な煉瓦の片がある。これも古いものと遺物で、最近に於て南部ハビロニアのテルセフン(Tel-seh)と云ふ處(聖書の中にあるエラサー(Ellasar)といふ處に當る)に發見されたのであるが、これに據つてもハビロニアの智力上の勢力が遙かに東方諸國の上に

あつたと云ふことが解かる(大英博物館所持の焼泥の書版に就ては G. Smith の History of Babylonia 1877: Tiele: De Visicht der Assyriologie Door de Vergelykende Geschiedenisder Goldsteinen, 1877: 並に Rawinson, Oppert, J. Halevy, Hommel, Norris, Guyard, Loisy, Reissner, Koldewey, 等の著書参照)はこの煉瓦の上に見える記録のことに就いて云へばこれは主として王様の書翰であつてこれに據つて紀元前二千四百五十年頃すでに文學を書くことが普通に行はれて居たことが證明される。またそれは單に王が臣下に訓令を下す場合のみでなく、位の貴いものは王族でなくとも文字を用ひたのであることを示す。この発見は大英博物館の埃及、アッシリア古物學の主事ハッチ博士(Dr. Wallis Budge)によつたのである。

この外小亞細亞の各處には幾多の文化の中心となるべき人種が存立して居た。この邊は恰も世界人種の競進會のやうである。此處に種々な傳説や信仰杯が發芽したと云ふても可い位である。さうして其極有力にして且つ文化に進んで居た人民の指導者たるアブラハムがヘブライの遊牧の民を率ゐて來り、此處にその祖國を建立するやうになつたのである。

それから又チグリス河の東方に當りスマイト人や、アッシリア人、チエラニア人、クイシイト人とに圍まれながらエラム(Elam)と云ふ一帝國が發達した。この國には幾多の大都會があつたが別けて首府の Susa はコアスヘス(Khoaspe)河の兩流交又の處に巍然と建立された。偕てこのエラムの王が嘗つて紀元前二三〇〇年頃ユーフラテスの平原に攻め下つて行き、かのウルク(Uruk)からバビロンに至るまでの幾多の都府を占領し、凱歌を擧げてカルデアの神像をスザの神殿に持歸つた。このエラムは即ち聖書の中のエラムのことで、此處にシム人種とは別種で、しかもカルデアの文化と關係のない一種の文化が成立したのである(スザの歴史は後にはペルシアの歴史と同じものになつたのである)更にヨルダン河の岸邊へブロン地方を取り纏ひて此處にキツス(Kites)と云ふ不思議な人種が居た(この人種の名を或は Hittites, Heseans, Khetsis と云ふ)これはコーカサス地方に居た人種の一であらうが、この人種も殖産の道に於ては優れて居り、一種の殖民地を有し、その文學さへもまた發達して居た。最もその象形文字は埃及のとは異つて居て、今はまだそれを讀むことは出來ないのである。かれ等はこの地方に民族

を集めたので屢、埃及人やアッシリア人と戦を交へたが、かれ等の王の中には戰場に歴史家を伴つて戦史を編纂した者もあつた位である。

以上各種の人種の記事は即ちユーフラテス、チグリス、兩河の近傍に建國した諸民族の状態で、また以上の記事によつて彼等が如何程文化に進み、また如何に世界文學の上に貢献する處があつたか、略、了解されることであらうと信ずる。此處に於て吾人は更に東の方の文化とその變化に注意しなければならぬ。即ち支那の如きはその一である。

四

以上記述したのは即ち東方の文化で、しかも諸民族のヘルシアに統一される前の有様である。然るにこれ等の種族とは遙かに離れ、又何等の交渉もなき住民があつた。即ち支那帝國の民並にガンデス河畔の住民がそれであるが、この兩人種はまた異常な進歩をなして居たのである。これに加ふるに全く方面を異にした中央亞弗利加の高原に住んで、一種の文化を形造つて居た人種の一も考の中に置かねばなるまい(この事に就ては Leclounean, Psychologie Ethniqua, Bibliothèque des

Sciences Contemporaines に收めてある——参照。

先づ支那の状態を鳥渡説明して置かう。西の方では埃及とカルデアとが、一方はデルタの一端に、一方はヘルシア海の奥の方に割據して世界の文明を一手に引受けて居た。その間に更に東の方に於ては今の支那人の祖先が、黄河及び揚子江の邊で、殆ど埃及やカルデアがやつたと同じ仕事をやつて居たのである。かのイスラエル民族を率ひて、民族の大移動をやつたモーゼスの生れた前二千年頃に當りて、支那は彼のユーフラテスやチグリス河畔の人民がやつた事を同じく演じて居たのである(André Lefevre, L'Évolution Historique 参照)。

支那文學の始は極めて古い者である。その祖先が崑崙山の搖籃を出て今日の帝國の中原に顯はれ、西藏住民を追捲くつた頃は、即ち既にかの蒼嶺が支那の文字を創作した時代なのである。而もこの偉大なる國民の基を開いた支那の祖先の始めて中原に顯はれた時は、一方から云へば随分野蠻な状態でもあつた。彼等は漸くその燭火を用ひる事を知つた位なものであつた。さうしてオーストラリア人のやうに、食物としては木の實や昆蟲を食ひ、それによつて生命を繼いで居た。

併し彼等は忽ちにして土地の耕作に従事し、懸て秩序ある生活に慣れ、社會の秩序を立て、遂に國民たる形を具へるやうになつた。かく出來上つた國民の形は支那人の第二の天性となり、幾世紀を経ても變化せず、今日に至るまで支那人種の特色となつて了つた。斯の如くにして極めて注目し價する文化が、この蒙古地方に出來上つたのである。

支那人の歴史の劈頭に於ては所期さるゝ處は極めて多かつたが、残念ながらそれは成就されたとしても、其の一時のことで忽ち停止して了つた。併しそれにも拘はらず、支那人は秩序的で創造的の才があつて、何事にも容易に其大體に通ずる智力を有し、生活上に必要なもののみならず、奢侈に渡るものさへも造り出すとに於て、決して他に遅れては居なかつたのである。即ち彼等支那人は藝術を有し、文學を有し、且つ商業に勵んで居つたのである。處が彼等は自らそれ程に進歩したと覺り、且つ人民等に必要なる者は充實されたと考へたのみならず、末代の爲めにも十分準備が出來、子孫も困る事はないと覺つた。茲に於て彼等は最早變化を要さなくなつた。それ以上進歩發達する必要はないと考へ、茲に神聖なる

儀式典禮を作り、從來定めたる事物以上にこれに改善を加ふることを禁じて了つた。斯くの如くにして彼等は幾千年前他の人種に對し、優勝の位置に居つた。其過去の状態の儘で今日に迄及んで來たのである。支那に於ては周圍の人民がその法律や傳説をたゞ記憶にのみ保つて居つた間に於て、既にこれを記録に止め、書物に記載する事を得て居たのである。即ち支那の文學は夙くから立派な形を有つて居たのである。譯者曰く支那の事に就ては、なほ詳しく記すべきかと考へらるゝが、他との釣合上太古の事はこれだけに止めて置く。

支那は斯くの如き發達をなしたのであるが、東方の文明として光彩陸離最も偉大なる者は印度の文明である。即ちそれは古代の印度人種の文明で、その太古の歴史はヅラヴェヂアン人(Davidians)と云ふ人民の建國を以て創まる。ヅラヴェヂアン人と云ふのは、主として印度南方の人種を指した者で、印度のアリアン人種以外の者を云ふのである。それで印度の事に就ては、又章を改めて説くことにする。

第二章

印度思想最古の證據——亞細亞と歐羅巴との比較——サンスクリット文學に於ける宗教的并に抒情的詩歌の發達——ツング文學——歴史の時日——アリアン人種の横行濶歩——歐羅巴——ギリシア人の成立。

凡そ今日の科學藝術若くは宗教の起原に就て考察を廻らす者は、最早何人もアゼンス若くはエルサレムにこれを求むる者はあらず。吾人は總て埃及若くは印度に遡らざるを得ず、とは某氏の言であるが、これは至當の言葉である。吾人は今日の文明が何時何處から起つて來たものか、明確の答は出來ないのであるが、兎に角アリアン人種の文明が、今日の狀態に迄進歩發達して來たのは、少くとも三千五百年はかゝつて居る。然かもそれが少しも障礙を受けず、一貫して發展して來たとしなければならぬのである。さう考へると今日の文明を考へるには、どうしても吾人は文明の源を探るに、印度をその第一の考察の中に入れては、譯には行かないのである。今の印度人はアリアン人種であるが、そのアリアン人種の印

度に這入る前にはドラヴィディヤン人が居た。これはアルタイ山脈から來た屈強の人種で、印度半島の南方に覇權を有し、その殖産上の勢力に於ても、その用語の性質に於ても、近隣の諸國民に優つて居た者であつた。即ち彼等は後にサンスクリットと云ふ立派な言語の影響を受けたのであるが、その影響を受けるすつと以前から彼等は優美な言語を有つて居たのである。それはテルグ(Telugu)語と云ふ印度の伊太利語と云はれる位な言語である。このテルグ語は、これによつて事物の觀念や情操を示すことは困難であるが、有形の事物であるならば、その微細な意義をさへ與ふる事が出来る言語である。さうして今でもマイソルや、コロマンデル(Mysore, Coromandel)の海岸に居るドラヴィディヤンの子孫は、南印度の歌や物語や格言杯の美しい文學を有つて居るのである。これを以て觀ると亞細亞の兩端に(一)方西端のカルデアとこの東端の印度と、同様の考や感情があつたことを知る。然かもこの兩人種の間には何等の關係もないのであるから、これは人情と云ふ萬古不易な同一の一點から出た者と云つて然るべきであらう。偕てこれ等東方の人種の事に就て考へて見るに、此人種は遙に歐洲人よりも古

く發達して居た事は勿論である。即ち一方に於ては石器時代と言つて民族が大石を樹立して、その上にまた莫迦に偉大な石を載せたかの不思議な働をして居る間に、埃及や亞細亞人種は既に有要な立派な金屬の道具を有つて居た。さうして物質上には已に有益なる幾多の事物を享有して居たのである。即ち印度の如き國が歐洲より遙かに進んで居たと云ふ事は今更云ふも愚かな事である。併し爰に注意すべき事がある。歐洲人や又東方の人種即ち印度人杯と同時に生活して居た人種が外にも澤山ある。さうしてそれ等の人種は互に離隔して住つて居たものが、長い幾世紀の間全く無智蒙昧に過して來た。今日迄なほ前の儘に文字一つ有つて居ないものもある。これに較べると一方は撰ばれたる民と云ふべきか、幸なる宗教の下に生れたと云ふべきか、歐洲人が遅れながらも文化の進歩した地に居るのは幸なことである。我々は印度の早き發達を思ふと共に、我等の遅れて居たことを感ずる。併しこれと共に又今日なほ古の儘の野蠻な人種があることを思ふと、異様の感に打たれない譯にはゆかない。文化の比較は徐々にやるとして今翻つて印度の事に就て話さう。

一

凡そ人間に先づ至大なる感銘を與へる者は自然であるとすれば、印度からその感興湧くが如き詩の生れ出た事は偶然でないと思へらる。實に壯大深遠にして燃えるやうな印度の自然は、此地に住むて居た吾人の祖先に多大なる感銘を與へたに相違ない。否かれ等を驚かし恐れさせたに相違ない。印度に於ける事は總て猛烈であり、深刻であり、豊麗である。其處には善も盛んなれば惡も著しい。破潰力も恐ろしければ建設力も偉大である。美しい者もあれば嫌惡すべき者もある。植物は驚くべきと云ふよりは恐るべき程に繁茂し、暴風は強烈である。愛すべき慕はしき河流があると共に御し難き急流もある。焦げるやうに熱い砂路がある。蠻煙硝雨の濕地があると共に荒蕪にして荒蕪なる廣野、平衡を失した山脈、光輝眼を眩せしむる遠景、慘澹たる大風、何れも生死の大問題に關係ある平凡ならざる者のみである。暴風は海を荒し、地を震動し、家を破壊し、收穫を皆無にし、全森林の樹木を盡く根こぎにする惡鬼の息のやうに吹いて來る。此地に住むて居た古のアリアン人の平伏して居るその頭上を吹拂つた時、彼等は果して一種不可思

議なる恐怖を感せず居られやうか。それから再び眼を擧ぐれば天は靜かに落付いて居る。更に下を見れば谷間には豊かに永久の春が含笑んで居るのを見た時果して宗教的感想を起さず居ることは出来やうか。印度は實に斯の如き處である。

印度は各種の人種を育だてた處である。宗教を生み出した處である。さうしてその自然は斯の如き薄弱な人間に打撃を與へて、全くその下に人間を服従させたのである。故にまた人間は自然を敬ひ且つ恐れて居た。即ち自然の影響を享けること斯くの如くであるから、人間はこの自然の力を理想化し、爰に彼等の詩と云ふ者が出来上つたのである。朝暾を受けた山の頂には一種の象徴がある。祈禱がある。斯の如くにして知らず知らずの間にアリアン人はこの自然の現象に感情と意思とを與へ、それが再び反對に人の心に影響して、常に恐怖と驚愕と感謝と讚美の念とを彼等に起さした。かれ等は星を瞻ても、光を睇ても、山を視ても、雲を見ても、雨を見ても、雷を聽いても、みな靈の發現であると考へた。即ちこの自然力は皆人格あるものとせられ、例へば勇士の如き者を以て代表されるやうになつ

た。それが段々發達し、その最後の者は神様となつた。斯くて讚美の歌が出来上つたのである。

偕てアリアン人は通例プラークリット(Palikan)と云ふ言語を用ひて居た者である。

これは彼等各人種の間に通の者であつた。然るに先づ神威を感じたる學者や高等の人民等は此通俗な言語を棄て、彼等の思想を表白するに適した高尙な又神聖なる言語を用ひるやうになつた。それが即ちサンスクリットである。それから後このサンスクリットが文學上の言語となり、これから立派な文學が起つた。一體印度の文學の起原と云ふ者は暗黒の裡に葬られて居るが、第一吾人が追跡する事の出来ない位な太古に於て、三百人以上の詩人が一緒になつて一箇の大きな深遠なる審美的な詩を作つて居る。かの有名なヴェダと云ふのがそれである。彼等は其中のリグ・ヴェダ(Rig-Veda)と云ふ詩の中に、これがアリアン人の思想や金言を收めた最も古いものである(傳説や象徴を蒐めて之を永久不滅の物となし、代これを口碑に依りて傳へしめ、繼て遠き末代に至りてそれが棕櫚の葉に記載される迄になつた。彼等は知らず、無限の値あり、また無窮の邦語である大業

を成したのである。このヴェダは或は藝術的見地からはその値を減ずることがあるかも知れぬが、近代の國民の上には貢獻する處頗る多大なのである。即ちこの中には印度宗教の完全なる發達を成したその種子が見出される。比較宗教學の鎖鑰がある。豊富なる文學の基礎がある。詩の本源とも見るべき者もある。一言にして蔽へば印度、歐羅巴各人種の文化の大部分の基礎が、この一巻の中に見出されると言つても良いのである。序に云ふが、ヴェダの言語、ケルト語、ゲルマン語、スラブ語等みな同じ母語から生れたので、それが各方面に向つて發達し、今日の狀態になつたのである。元よりヴェダの言語が最もこの母語に近いことは争はれないことだ。従つてアリアン即ち印度、歐羅巴と稱する一團の最も古いものと云へば、此ヴェダを指さなければならぬと勿論である。ヴェダの詩歌の値と云ふ者は實に上記の如き確乎たる智識を與ふるにあるので、その値や偉大なりと謂ふべきである。アドロン・ニエ (Adolphe Regnier) の説に「ギリシヤ、羅馬の文學的功績を Agastya, Vasishtha, Vidyadhira, 等の抒情詩と較べるとそれ等は宮殿に對する小屋の様な物である」と猶 Bopp, Benbeny, Barthelény, Saint-Hilaire, Decegranges, Adolphe Regnier,

Ber-gaigne 等の著書参照] 偕てこのヴェダ時代以來五大河の地方「パンジヤン (Punjab) の事」並に「カブール (Kabul) の山脈に限られた地方の印度人は、家畜を護り地を耕作するより外何事も知らなかつた。それで莊重高潔なる純宗教詩は斯くの如き牧畜耕作時代の風と一致して居るのである。即ち質素にして平和を好む人智の熱望を示したものである」と云つて差支ない。畢竟その宗教詩はさう云ふ程度の最も立派な考を表白したものである。

二

斯かる間に印度に來た此アリアン人種は段々その數を増して來た。人間の浪は段々高くなつて、遂には溢れ出すと云ふことになつた。當初彼等が占領して居た處では、彼等の民族を容るゝに狹隘を感じて來たのである。茲に於て彼等住民はその領土を擴げる必要に逼られた。即ち彼等は牧者であり耕者であつたのが、斯くなつてから戰士となつたのである。彼等印度のアリアン人種は進んでインダス河と、ガンヂス河との間に膏腴の地を占領しやうと欲して其方に出掛け、遂

にそれに成功したのであるが、随分その爲めには手強い抵抗を受けたことは云ふまでもないことである。その抵抗したと云ふのは印度土着の民であつて、か前章に擧げた南方に住つて居た人種杯もその一であつたらう。

偕て此戦争は勇士を生んだ。勇士と其功績とは詩人の感興を惹く者である。さうしてこれが古代印度の舒辭詩に華を咲かせることとなつたのである。それではこの舒辭詩は如何なる者であるかと云ふに、あらゆる裝飾と功名とを盡してブラーマの宗教並にその思想の異教國の間に濶歩する様を描き、また各人種互にその過大なる人民を處理するに熱中し、同時に政治上並に宗教上の最高の權威を得やうと熱中せるその戦闘を此處に記述したものである。

更にアリアン人並にエラニアン (Iranian) 人は之より先き、また西方に向つて大移動を始めて居た。その大移動は彼等をして古の歐洲の端にかれ等を接觸させることになつた。この歐洲の一端に各種の人種が各、その處を得た。かのギリイック、ラテン人種、ケルト人種、チートン人種、スラヴ人種などはそれより後から來たものである。近頃になつて學者はこの民俗の移動を追跡し、無數の小民族が彼方此

方に彷徨つたその道筋を辿り、且つ彼等がその初こそ一緒に居たに拘はらず、遂には全く相知らぬ者になつて了つたことを説明して居る。

元より今この民族移動の事を精叙することは不可能である。たゞ吾人の歴史的な思想を以て僅にその一二の道を觀察するに過ぎぬ。第一に最も古く初めに東方に居たアリアン人は、インダス河の東の地方に住んで居て、後のヒンドー (Hindoo) 人となり、バクツリア (Bactria) アフガニスタン (Afghanistan) ヘルシア (Persia) アルメニア (Armenia) 及びメディア (Media) に居た者はアラビア人となつた。尙また西方に居たアリアン人は準備を整へ、武裝してその旅程の危険を冒し、歐洲諸國を占領する爲めに各方面に動いて居た。ヘレネス人 (ギリシア人) となるべき人種 (イタリヤ人) (Italics) 人は相駢んでダニューブ河の方に進み、ジュリアン・アルプス (Julian Alps) の處で分離し、前者はビンダス山に沿ふて、後者はアペニン山に沿ふて行つた。このヘレネス人よりも北の方に行きダニューブ河からライン河に出たのがケルト人であり、カルパシア (Carpathians) 山脈とバルチック海との間に出たのがチエートン人で、更に奥の方裏海とヴィスチラ (Vistula) との間に行つたのがスラヴ人で、

あつた。さうしてその端の處ツヰナ(Dyina)の方にリメアニアン(Lithuanian)人が居た。

これ等の人種は極めて遅々たる且つ漠然たる發展の道に居たのであるが、何れも近代の國民たる要素を具備して居たのである。併しながら此中第一の人種は撰ばれて特別の目的に使はれた。即ち其人種は天の攝理に因るとでも云ふべきか、ヘレネス(ギリシア)の海岸に導かれて來たのみならず、又ヘンヅー(Hentoo)の文化と言語と神話と信仰とをさへ有つて來たのである。ヘンヅーと云ふのはヘルシア人がアリアン人種の中のアリヤヴター(Aryavuta)を號んだ名稱である。即ちヘンヅーと云ふのはこのヘレネス人を含んで居た印度の人種のことと見て然るべきである。Minus Fontane, Histoire Universelle, の第一卷参照。

第三章

希臘人在住以前の希臘——ヘルネス文化の小説的起原——行吟詩人の時代

——ホーマー時代——イリヤッド及び行吟詩人。

かの文學藝術を以て不朽の名を貽した所謂希臘人なる者は、初めから希臘の地に居た人種ではなくして、彼等がまだ野蠻な状態に居た時分に東の方と北の方から此希臘の地に聚つて來た人種で、彼等は、その時まだ武器としては僅に槍と銅の劍とを有つて居たのみであつたが、併しその言語と智識とに於ては、これら彼等が征服せんとして居た人種よりも勝つて居た。最もこの新來の希臘人と雖、未だ藝術杯の考は少しもなかつたのである。彼等の思想は極めて幼稚なもので、彼等は僅に石を細工し、木片を截つて、それを立派な神様と考へて居た程であつた。然るに彼等が斯く移動して小亞細亞から希臘の地に來て見ると、その住民

は自分達より遙に文化の道に於て進んで居ることを認めた。このギリシア人來住以前のギリシアの住民とはどう云ふ者かと云ふに、それはフリヂアン(Phrygians)人、リヂアン(Lydians)人等であつて、これ等の人は疾よりアッシリアの宗教並に藝術の影響を受けて居た。また希臘半島の東方にペラスギイ(Pelasgians)と云ふ人種が居て、西の方アイベリア(Iberians)人と相對立して居つた。此中アイベリア人は歐羅巴で最も古い文明に進んだ人種で、前者即ちペラスギイ人の方は更に後に顯はれた人種である。希臘の歴史家ストラブの說に據ると、このアイベリア人とスペインの南部に居たツルヅリ(Turuli)と云ふ人種とは早く既に美文を愛好し、極めて古い歴史の書物を有つて居り、かれ等自らこれを六千年前の詩と云つて居たさうである。プレトーはまたペラスギイ人が都府や宮殿や要塞を建立し、言語や記録を制定し、且つ初めてかの隆盛であつたアイベリアの勢力を制限した者であることを云つて居る。なほ希臘のアデンスはこのペラスギイ帝國の中心であつたのださうである。

倍て斯かる人種の居た處へかの希臘人は遣つて來たのであるが、かれ等はそ

アルファベットをフェニシア人から藉りてこれを用ひ、また商業上の智識をも先づこのフェニシア人から學んだのである。更に彼等はまた徐に埃及の哲學、醫學、繪畫及び建築を學んだ。またアッシリア式の重々しい製作物によつてその立像をつくる事を學び、斯の如くにして段々に彼等は是等の藝術を完成した。彼等はたゞ僅かばかりの昔から繼承した傳説以外、何等の智識をも藉らず、全く自力に依つて國民の誇りとなすべく、又其個人の光榮となる萬古不易なる藝術上の作品を作出したのである。これこそ實に驚くべき民族と謂はなければなるまい。

これ等は印度の方面からスレンシア(Thracians)小亞細亞を通つて來たのであるが、歐羅巴の東の極端、狹隘なる希臘半島の南部に來て止つて了つた。それは農業上の必要があつて、彼等は此處で其進路を止めなければならなくなつたのださうである。さて其地は極めて小さな地で、山脈に據つて輪の様に取圍まれ、出入の劇しい海岸線で境を限られて居る。内地の方は乾燥した石の多い平地で、産物としては少許の小麥と大麥とを出すに過ぎないが、併し山腹には橄欖や無花果や葡萄が枝を交へて茂つて居り、又其上には大理石坑や銀山があつたと察せられる。

この狭い地に於ける産出物も極めて單純で且つ少量であるがこの民族は此處に大發展をなした。さうして思想により藝術によつて天下萬世を支配する運命を有つて居たのである。譬へて云へば此處に落ちた種子は誠に少々であつた。然かも地は瘠地であつた。併しながらそれにも拘はらず、古今未曾有の大收穫が其處から得られたのである。先づ最初には宇宙普遍の勢力の發揮とも見るべき全能なるパン(Pan)の神がその意識に入つた。即ち若い男女の神々の姿は近傍の山から掘出された。大理石に若い美しい夫婦として彫刻され、續いて同じく山から出された銀は、藝術家の大作の爲めに用ひられ、それが末代までも藝術の模範となり、最後に至つてはこの人種の都府が地中海の海岸に夥多出來、その思想が文學となつて世に貽り、天下の寶ともなつた次第である (Alfred Maury: Histoire des Religions de la Grèce, Max Müller: Science of Language, p. 146 参照)。

二

希臘人の祖先なるガンヂス河畔の印度人の詩的思想は、宗教から起つたものであるが、それと等しく希臘人の思想も宗教から出て居る。凡そ印度から分れて歐

羅巴に來た人種は、みな自分達が印度と關係のあつた者であることを忘れて了つて居るが、希臘人もその通り印度との關係は忘れて了つて居りはしたが、その祖先の信仰の對象となつた者即ち宗教上禮拜の目的物となつた者を美化することは、殆ど印度人と等しかつた。彼等希臘人は東方から一種の象徴と星の禮拜とを學んで居たが——この二つは即ち印度の多神教とケルト人の魔法とを混せたものであるが——これ等から自ら其快活な神話が出て來た。その神話の神々は即ち自然の現象を表はした者であつた。斯くの如くにしてその神話の中からまた自ら神々の系統と云ふ者が出來て、恰も思想の共和國に於けるが如く、各神々がそれらの任務を有し、また複雑の中に秩序を保つて居たのである。斯かる状態から希臘人の詩が出來た。神々に對する恐れが詩を喚起す。例へば太陽がそれである。其地上に生命を興へるやうな愉快な光が顯はれて來る時には、其處に喜悅がある。同時にそれが消えて行くと悲痛がある。これは人間の精神が超自然に向ふ高尚な心とも謂ふべき者であるが、さう云ふ心の状態が初めて詩の題目となるのである。併し斯かる考の出るのは殆ど茫漠として所謂荒唐無稽

なる時代のことで、文學にこれを著はした時代よりは遙かに古いことである。太古に於ける詩はマクス・ミラー氏の説に據れば、たゞ口碑によりて傳はつたもので、これが文字になつて著はれたのは餘程後のことであるさうだ。而してそれは樂人即ち詩人が樂を奏しながら詩を歌つて四方を遍歴した時代で、それ等の樂人が當時の教育者とも見るべき者であつた。かの有名なオルフェウス (Orpheus) やリヌス (Linus) や、ユーモルピダス (Eumolpidus) の如き、みなこの樂人の名で後代に貽つた者である。彼等は實に人民の間に信仰を保存し、教義を維持することを努めたもので、神靈の存在とかその性質杯を人々に明かに示したのみならず、樂器によつてまた國法を人々に教へ、式典の折には讚美の歌を誦し、また自ら神事や神秘に關する頌歌を作つた者であつた。

この樂人は今云ふ通り當時の詩人でもあつたので、その名は種々あつた。最も人口に膾炙して居たのが、オルフェウスであるが、フィラモン (Phaenon) リヌス (Linus) ミューゼウス (Museus) 等その名稱は十を以て數へる程である。このオルフェウスがパッカスの祭の基となつたのであるさうだ。且つオルフェウスと云ふのが一箇の詩

派となつて、さう云ふ名の附いた詩が世間に散在するやうにもなつた。偕て此樂人の多くはピエリア (Pieria) セッサリー (Thessaly) ボエチア (Boetia) 及びアッチカ (Attica) から來たものであるが、何時の間にか其跡は絶えて了つた。その中に新時代が出來て各邦國が割據するやうになり、其間に競争が起り互に戰をなして居る中に、希臘が總てを征服した。其時勇士が顯はれた。即ち此邦國の勇士と共に其勇士を歌つた詩 Heroic Poetry が興ることになつた。

血氣に富む勇壯な希臘人は、かの堅牢なるトロイの城砦に對して、その武力を試みたくてたまらなくなつた。それで其望みの心が叙事詩となつたものであるが、それはホーマーの詩に先立つて、スレスシア人の Thamyris, Phoenius 又は Phocasian 人の Demodocus 等が同様の歌を作つて居る。茲に於てかオルフェウス一流の歌は變つてこれ等勇士の戰の叙事詩となつた。詩人は其壘所を立出で、普通の生活をなし、神々の讚美を止めて神々に比すべき人間の戀や、勇士の事績やまた精神上の大事件を歌ふやうになつた。これ迄各州に分裂して居た希臘は、爰に初めて一致協力して事に當る必要を感じ、爾來各州としてではなく希臘一國としての生命

と運命を自覺するやうになつた。その一致協同の第一の結果がホーマーのイリヤッドである。

三

イリヤッド即ちホーマーは叙事詩の開祖である。全篇詩的行動を以て溢れたる古今無双の叙事詩である。過去三千年間詩歌の世界を支配した大作である。惜てその作者は何者であるか。ホーマーとは如何なる人であるか。ホーマーの祖國を知らんと欲して各邦國の王達は天上よりの神託を求めたこともある。その出生地たるの名譽を得んと欲して、幾多の都府は競争をしたこともある。又此人に關しては諸説紛々として居る。これ等に關しては幾多の研究もあつた。註釋もあつた。説明もあつた。併しその生れた場所は何處であるか。解らぬ。また何年頃に居た人か。その明確なることも解らない。無論その如何なる生活をしたか。如何なる府でこの大作が出来たか。また如何にしてこれが後代にまで傳へられたか。更に解つて居ない。たゞ吾人の云ひ得る處は次のやうな事のみである。即ち三千年の間このホーマーの大作は、諸の文學を支配して居たこと、希臘のソフォクレースもエス

キラスもユーリビデスもそも／＼又ラテンのヴァーヅルも、伊太利のタッソーも、佛蘭西のラシーンヌもみなこの大作からその感銘を享けて各の製作を得たと云ふことだけを知り得るのである。斯かる限りなき詩歌の流の本源となつたその大流の源に至つては遂に發見されずに居るのである。

このイリヤッドとオデッシーとは一個の仕事であるか、そも／＼またヴィオ(Vio)やフレデリック・ウルフ(Fredrick Wolf)の云ひ出したやうに、幾多の人が幾世紀もかゝつて作り出した物であるか。總てそれ等ホーマーに關するとは漠として捕捉することは出来ない。たゞ其詩は人間の想像を以て作り得た最も立派な製作で、或る文化を示す絶好の紀念物である。叙事詩の最好の模範であること云ふこと、並にイリヤッドよりはオデッシーの方が叙事的の處は少ないが、學識に富み精巧であり、自然に觸れる處多くして、然かも簡潔であること云ふこと、並に此二篇はあらゆる美を精選した物であること云ふだけは確實である。

斯かる立派な大作であると云ふことは昔から知れ渡つて居た。また人々の認定する處であつたから、疾くにはそれはアイオニアの全州に擴がり、詩曲を奏して行

く、奏曲家はこのホーマーの詩中の一節を暗誦し、樂器に合せて町々を歌ひ歩いた。その歌ふ處は例へばオデッシーなるユーリシスが宮殿の闘を跨いで歩行く處や、ペテロープが愛人に身を顯はす處や、ディオメデス(Dionedes)の戦勝やら、ヘクトルに對するアキレスの猛烈なる攻勢や、ヘキュバ及びプリアムの不幸杯であるが、人民はそれに傾聴し魅せられて了つた。なほこの奏曲は其詩に伴ふに堂々たる衣裳を以てするので、彼等聴者は非常なる感銘を受け、同時にそれが彼等の自負の念を高くした。即ち彼等はそれを聴くや自分達も王の如き高き位の者であるを考へたのである。

第四章

希臘以外——故意に周圍の諸國を無視す——印度、ベルシア、エダア、エトルリア等智識的中點の順次の發展——ヘンネスの思想と『野蠻思想』——獨特なる文學の發達とその衰亡——希臘思想の變化——ベルガモスとアレキサン
ドリア——紀元前五四〇年に至る。

この時代の智的進歩は單に希臘にのみ限られて居たのではない。吾人はまた東洋の状態を見なければならぬ。第一には支那の事を考へなければならぬ。支那には孔子が居た。道德政治の學問が發達した。何等外部からの助力もなくして百科宇典的の著作が出來た。併しそれ等の事は暫く後に廻して吾人は再び印度の状態を觀なければならぬ。前段に述べた時代から降つてこの頃になつて印度には既に六種の哲學が發達して居た。その發達なるものは實に偉大な文學を包藏して居るのである。ヴェダの古い抒情詩であることは既に述べたと思ふが、更に教

育詩にはムナヴァスツラ(Munavastra)云ふのがある。これは立派な上古の詩であるが、更に二種の紀念すべき叙事詩がある。即ちマハバラタ(Mahabharata)にラマヤナ(Ramayana)である。此中前者は餘程古代に於てガンヂス河畔の地を得んとして争つた二種の人種の戦をヒロイック(Heroic)の調子を以て記した物である。後者は宗教上の所説や讚美やまた國民の傳説等を情緒的に稱讃した物である。マハバラタは二十一萬四千七百四十八句からなり、その終りの形はヴァサ(Vyas)と云ふ者の作となされて居る。またラマヤナの方はヴァルミキ(Valmiki)の作つた物であると云はれて居る。印度にはアリアン人の基礎が定まると共にプラーマの天下となり、宗教科學並に教訓的作物が澤山に出た。

これ等の製作の中には詩的な又勇壯な當時の生命と生活とが顯はれて居る。幾年かの間幾多の詩人が段々に斯くの如き人間と神事とに關する大きな叙事詩を作り上げたので、恰もこれはサンスクリット語のピラミッドのやうな物である。そしてそれが近代に至るまで猶人の心を惹く大作物となつて居るのである。併し其偉大な處は最切から充分に了解された譯ではなかつたが、年代を経ると共に

徐々として其光彩が認められるやうになり、後には全部から離して其一部分として、もなほ充分の價值あるナラ(Nala)とダマヤンチ(Damayanti)の如き美しき話が特に人々によく知れ渡つて來た。そして獨逸の作家の中思ひ切つた勇氣のある人々、例へばコーゼガルテン(Koesegarten)ホルツマン(Holzmann)特にアラビヤの詩人ハリリ(Hariri)の翻譯者であるフレデリック・リッケル(Frederick Ruckert)の如きはみなこれ等の詩を立派に摸擬して自分の文學を飾つた程である。

二

次にヘルシヤはどうかと云ふに、既に幾世紀も以前から善惡兩神の戦(オルムッド(Ormuzd)とアーリマン(Ahriman)並にアーリマンの改心と其最後の協和に關するヤスア(Yasna)の歌などは繰返し繰返し歌はれて居たことである。併し又或る傳説に由て見ると、ヘルシヤの王ザラットストラ(Zarathoustra)が偶像の禮拜を打破して拜火教を再び用ひたのは極めて古く吾人の記憶に達せざる時代にあると云ふ。この拜火教と云ふのはゼムシド(Djemschid)と云ふ者が制定したので、これによつて人間に眞正の信仰を與へ、法律を訓へた者ださうである。[ヴァルネイ(Vahney)]

と云ふ人の説に據ると、ザラットストラ即ちゾロアスター(Zoroaster)は紀元前二千年にニナム(Ninus)とセミラミス(Semiramis)の時代に居たのだらうである。併し又一説に據るとそれよりは後であつた。ヒスタスベス(Hystaspes)即ちダリアス(Darius)の時代であると云ふ。然るにペルシアの詩人のフィルドーン(Firdousi)の云ふ處に従ふとダリアスの父の時代であると云ふ——次に本文中に法律を教へたと云ふことがあるが、これに就て印度の事を考ふるに、印度で釋迦が出て眞正の信仰を傳へたのは紀元前五世紀六世紀のことである。尤もシャムの人説によると、釋迦は紀元前六〇〇年にカピラ城に生れたと云ふ。カシミル地方の傳説によれば、紀元前一三三二年に釋迦は生れたと云ふ。然るに支那、蒙古、日本では釋迦の誕生を紀元前一千年として居る。

ペルシア人は印度人より想像の力は少なく、従つてまた種々な複雑な神話をも有して居なかつたが、その宗教的觀念は極めて向上の域に達し、また其詩は同じく高尚なる智力を示して居る。

三

更にイスラエルの人民はどうかと云ふに、かれ等はアラビア人(Arabies)モアブ人(Moabites)イヅミヤ人(Idumeans)及びフェニシア人(Phoenicians)に圍まれて居たが、希臘でホーマーの詩の出來た頃には、其國民獨特の一神教を作りあげて居たのである。最も獨特と云ふものゝ近代の研究に依て見るに、それには埃及やアッシリア、波斯の影響が少からず加つて居ると云ふ。併し兎に角紀元前十世紀頃にはモーゼ若くは其他同様の豫言者の出で、かの創世紀なる物を書いて居たのである。只必ずしもこれがヘブロー獨特の者でない其證據にはかの創世紀のアダム、イヴの話の如きも一種の象徴で、希臘神話にあるプロメシースとパンドラの話と一致して居る。此創世紀を書いた人は又ペンタテューク(Pentateuch)即ち通例云はれて居る聖書中舊約書の初の五卷創世紀も其中にあるが(をも書いたのである。そしてそれに據るとエホバと云ふ神様は無から宇宙を創造したのである。其五卷はヘブロー人の思想を遺憾なく發揮したもので、それが又バイブルとなりヘブロー人の文學を其中に盡く收め、同時にヘブロー文學の基礎を定めたのである。斯くて殆ど希臘文學は其假空なる物語時代から事實の眞理に至る橋を渡つて居た

時に、ヘブライも傳說的曖昧の境遇から脱却しかけて居たのである。

四

さて又翻つてギリシアの事を説くが、ホーマーに依つて代表さるゝ希臘文學は其第一期である。そしてホーマーとモーゼとワルミキ(Vahmici)とは實に同時代の人である(若し三者何れも假空的ならずして實際にあつた人物とすれば)。併し希臘人は自國のホーマーの外何人も眼中に置かぬ。またホーマーも其詩中に人種の種類に就いては言及んで居ない。然るに他の國に於ては多少自國以外の人種の事に就て留意して居たらしい。例へば埃及王家の墳墓の中にある古代の繪畫は當時即ちフヲオ王の時代の人々に知られて居た人類の種類を示して居る。かれ等は諸の人種がその色により或は顔容により各、その特色を有つて居ることを知る。また自分等自ら第一等の人種と考へて居る埃及人を亞細亞や歐羅巴の人種と比較することを知つて居た。かかるに希臘人は智識の優れて居るにも拘はらず、其處まで考を以て行くことは出来なかつたのである。勿論希臘人と雖幾多の外國の民族で、自分等より遙かに古く文化の域に進んで居るものがある。

と云ふ事を知らないのではなかつた。併し彼等は精神上からも物質上からもそれ等外國の事を探究することを輕蔑して居たのである(但しヘロドタスの如き旅行家歴史家は例外である)。

故に希臘人はヘルシアの文化を視てもこれを以てカルデアの文化の遺物であり學藝の光榮ある系統を傳へては居るが、衰微し腐敗して居るものと考へて居た。かれ等は祈禱集であるアヴェスタ(Avesta)を調べて、大破船の中から救ひ出された一小破片であると思ふた。その神話の複雑なる中に隠れて居る内部の原因、起原等には考へ及ばず、人種上の類似、傳説、作物の他の民族と近似して居る事などは思ひ廻らさなかつた。即ちかれ等は自分等ギリシア人もアリアン人種の一であるといふ事は忘却して居たのである。

ホーマーには埃及のトヌメス(Tholmes)とかラメネス(Ramenes)とか云ふ王家の都城であつた首府なるセベス(Thebes)のことも書いてあるが、希臘人はそれを了解しなかつた。ホーマーのオデッシーの中にはその主人公たるべきメネラウス(Menelaus)やユリセス(Ulysses)が埃及ナイル河口のデルタの所へ行く事が示してある。

が爾後埃及と云ふものは希臘人の考の中に這入つて來ない。彼等は自國以外の他國を以て有れども無きに均じきものと考へて居た。そして彼等を以てたゞ一言に野蠻人と云ひ放つて了つた。このバリアンといふのは自國以外の天地に住する者の總稱であつた。かれ等希臘人の眼中には古代歴史に大活動をなし、自からもアルファベットや其他文字を藉りたフェネシア人、而かも自分達の初の哲學の先生であり、自分達に宗教を教へ、殖産の道を教へ、抑、また藝術の初歩を教へ、斯くて歐羅巴の文化の基を立てたそのフェネシア人をさへバリアンと呼び去つたのである。古からアルファベットを拵へたのはフェネシア人としてある。併しタシタスの説に據ると矢張埃及人がその發明者であるさうで、近代の科學の教ふるところが依るも埃及人にその名譽を歸さなければならぬさうである。

アリアン人は彼等希臘人の祖先である。人類の方向を定めた各人種の祖先である。而かも希臘人はこれをさへバリアンと呼び棄てた。エトラスカン人 (Etrusci) は紀元前十世紀に伊太利にその基礎を定めた。その時は希臘人の別名である。ヘレネス人の伊太利に這入つたと同じで、彼等の方が遙かに舊いに拘はらず、

希臘人はこれをも野蠻人と呼んだ。エトルツア (Etruria) の民は藝術を好み、其言語は今日に傳はらず、其文學は絶えて居るが、地下の墳墓や都會の没落した跡杯にはその著しき偉大なる點を見ることが出来る。その民族は實に宗教上、殖産上、ホトマーの保護者であつた。また全くその基礎を作つたのであるが、之も希臘人に云はせると野蠻人である。但し之だけのことは注意して置かなければならぬ。バリアンと云ふ言葉は希臘では必ずしも殖産上、智識上の修養若くは社會の組織上に於て劣等と云ふ意味には用ひられなかつたので、彼等の意はこれ等のギリシア以前の外國人が政治上又は社交上の生活に關して劣等の考を抱いて居ると云ふことを表白する積りであると云ふ。即ち具體的に謂へばバリアンとは土隸の事で、希臘の人民のみが自由な人民であると云ふ積りであると云ふ。またエトラスカン人のとに就て云ふに、文字が果して此人種により、拉丁人に傳へられたものか、それは疑問である。タシタスの説に據れば、拉丁人は直接それを希臘人から得たと云ふ。そしてこの説はキルヒホフ (Kirchhoff) モムゼン (Mommsen) 等の近代の歴史家の同意する處である。最もこれはなほ學者間の爭論になつて居

る處であるが一寸記して置くのみである。兎に角希臘人は斯くの如く凡て他國の人を野蠻人と呼んだ。彼等の考へる處によると他國人は彼等に取つて何の要があるか、彼等は藝術に於ても思想に於ても他國人に依る必要がない。特にホーマー時代を離れた新時代が來て民主主義や自由の世となり、其威力や才力等を増大したのであるから愈々外國に依頼する必要を感じなかつたのである。それ故希臘人の最も名譽とし、又其立派な行動の動機となつた者は希臘自國の國民中に名聲を博すと云ふことである。斯くて彼等は自らの力に信頼した。その結果古の王侯が作りその誇とした殿堂を破壊し去つて茲に希臘は共和國となつた。これより希臘は人民の精神を重んずることになり、その國民は初めて主要なる人民として歴史の上に顯はるゝことになつた。これが即ちその歴史の第二期であると共にホーマーの叙事詩時代に對して各種の文藝の起つた時代である。凡そ政治上の組織が其形を變へたならば、文學の形式も變化せざるを得ない。即ち希臘に於ても叙事詩の時代が去つて新時代が來たのである。人民は必ずしも

ホーキュレスの盾や各種の斷片的叙述を忘れたのではないが、徐々として古の傳説から脱して居たのである。それと共に人民は益々その自由の價値を感ずること切になり、また國民的精神は遠方の敵、近傍の民族と戦をするやうになつた。それで斯かる感情を叙するには詩歌を以てし、古の樂器はこれを放棄するやうになつた。即ちカリマカス(Callimachus)チレーウス(Tyrcus)ラルバンテス(Terpander)ニレタス(Phileas)ソロン(Solon)ミンネルヌス(Mimmernus)フミリヂス(Phacylides)その他の詩人が出て戦争や道徳やその他放奔な詩を咏じ、それが更にマルキロカス(Archilochus)マルセウス(Alceus)シモニヂス(Simonides)及びサッフオ(Sappho)等によつて完成された。

これ等の詩人の中サッフオに就いては一言しなければならぬ。サッフオは最も熱烈な戀愛詩を以て世に顯はれた閨秀詩人である。この女詩人の詩は一五五四年アンリ・エヌチアンヌ(Henri Estienne)と云ふ人がアナクレオンの詩集—サッフオより數百年後の詩人—を出すとき初めてその中に少しばかり一緒に收めたことがあるが、この女詩人はたゞに戀愛のみならず、各種の詩形并に抒情詩の各種に於て

希臘人の稱讃を博して居る。そして二種の詩形即ちサフィク(Saphic)エオリク(Aeolic)を創始して希臘詩の節奏に新機軸を出した。その詩は節奏毎に微動し、また一句毎に振動するやうである。その熱烈な情を述ぶるにそれに相應した力を以てした者と云ふべきである。サッフォに次いではその弟子でエリンナのテオス(Theos of Erina)と云ふのがある(この詩人に就ては餘り知られて居ない。纔に咏人知らずとしてアンソロジの中)に其作が二三遺つて居るのみであるが、其詩の中に纏糸棹と云ふ四個の歌并に三個の墓誌といふのがある。このエビタフは娘の友達と爲めに作つたらしい。そして此詩人も十九歳にしてその跡を遂つたと云ふことである。テオスはサッフォより劣ること勿論であるが、また詩人の中有數の者である。次には諸の詩人の中、最も高尚でまた最も達辯なピンダー(Pindar)が顯はれて居る。ホーマーの外古の詩人でピンダー程の稱讃を博して居る詩人は居ない。ピンダーは王侯にも人民にも殆ど神聖視されて居る。彼等はまた長生した詩人であるがその一生は絶えず凱歌を伴つた一生であつた。

當時のギリシアに於ては是等詩人の夥多生れ出たと共に、哲學者や歴史家もま

た立派な散文によりその思想を發表した。即ち學識の發表やその話説の機關として美しい散文を用ひたのである。其人々の名を一二擧ぐればミレタスのカドマス(Cadmus of Miletus)ヘラニカス(Hellanicus)ラムサカスのチャロム(Charom of Lamp-sacus)の如きである。

希臘の文學はその初めイオニカ(Ionia)に榮えたのであるが、爾後アゼンスが文化の中心となつて、全希臘の名譽並に諸の學派なるものはみなアゼンスに集つた。外國人は諸方から此處に來り、その文學の跡を尋ね、其趣味と教化の不朽の華を世に弘めやうとした。それで此時代に次いで來たる者は例の名高いペリクレスの時代で、それは既にこの第二期の後ろに窺つて居たのである。

併し吾人はなほこゝに戯曲の事を考へなければならぬ。戯曲は希臘人の特に意を用ひた處である。その幾多戯曲家の先頭に立つて居るのは悲劇家エスキラス(Eschylus)である。エスキラスは嚴肅壯重な天才で、古代詩人の中にあつても特に古代的の趣を有し、古の神々や勇士の系統を其力ある筆を以て詩に作つた。そして人々の心に宗教上の恐怖すべき感情や高尚なる愛國の念慮を劇しく感銘さ

した。その題目は叙事詩のやうで、それが極めて優美にまた優しく取扱はれて居る。エスキラス以前にあつては悲劇はたゞディオニソスの神に捧ぐる動物の犠牲と共に歌ふ唱歌に過ぎなかつたのであるが、一度びこれがこの詩人の手に扱はれるや、それが舞臺に上ばさるゝ作品となつたのである。

エスキラスの戯曲はなほ多少叙事的熱情を伴つて居る(英吉利の批評家の中には文藝の歴史を追つてその才能や活力の點に於てシェイクスピアに比すべき詩人を求め、遂にエスキラスを擧げて居る人がある。如何にも此二人は詩體も非常に離れ、文體も大に相違して居るが、その比較は頗る興味あるのみならず、また吾人に教ふる處も甚だ少くない)。其作中の動作と云ふ者は必ず簡單であることや、抒情的部分の比較的長いことや、吟誦が多いこと、文體の粗樸なこと等はエスキラスに於てなほ古代の作風の遺つて居ることを示して居るが、これは單にエスキラスのみならず、其後の戯曲家にも免がれぬところである(エスキラス以來人々は戯曲の種類を分つやうになつた。例へばアガメンノンの様な内部生命的の運命を叙した情熱の戯曲チエポライ(Chœphorai)のやうな冒險的若くは外界の

運命に左右せらるゝ戯曲、それからユーメニデス(Eumenides)のやうな哲學的戯曲と云ふやうな區別である)。

更にソフォクレス(Sophocles)はその駭くべき藝術上の力を以て自然に伴つた事物を取扱つて居る。そしてその人物に明かなる人格を與へ、實際の人物らしくそれを示して居る。ソフォクレスの觀客の情を左右する力は偉大な者で、その長き年代の隔つて居るに拘はらず、其力はなほ衰へない。彼は其華々しき作品を以てエスキラスの位置を奪はんとして居るが、一方に於てはまた猛然として後に起つて來るユーリピデス(Euripides)を睥睨して居る。彼は實際その兩人の間にある詩人であるが、エスキラスの如く古代の信仰を包む影の如き恐怖の爲めに左右せらるゝこともなく、さりとしてユーリピデスよりは更に宗教的である。斯かる態度を以てソフォクレスは悲劇を道徳上完全な位置に進め、其完成したものを直にユーリピデスの手に渡したと云ふ趣がある。彼は情熱を微かに解剖して近代的作品の先驅をなし、優しき情緒と憐愍の情を人の心に起さして居る。彼はまた勇士や王侯を普通の人間の位置に引卸し、またその用語を單純にし、下品な言葉と道徳

的高尙な調子との間を巧みに調和し、また神々を自由に人間化し、人性の迷信や
ら弱點やらを明かにして心理的戯曲の先驅をなして居る。眞理的戯曲と云へば
近代の人の自ら誇として居る處であるが、實は既に幾千年の前にソフォクレスが
試みて居るのである。

ソフォクレスの悲劇に於けると等しく、アリストフネス(Aristophanes)は喜劇に於て
一時代を劃した。アリストフネスはその異常なる天才を以て美しきものと醜き
ものとの一つにし、崇高なるものと平凡なるものを混淆し、品位あるものと下
劣なるものとを等しくして取扱つた。喜劇にはなほ幾多の人があつたのである
が、かれは古代希臘の喜劇の作者としては、唯一の高名を博する天才を有したの
である。當時の作は多くは殆ど断片として遺つて居るのみで、この作者の名はク
ラテス(Crates)クラチノス(Cratinos)ユーポリス(Eupolis)フリニカス(Phrynichus)等であつたが、これ等に對しアリストフネスは其名と共に又作物も今日にまで傳へ
られて居るのである。

五

希臘文學の第一期はホーマーを以て代表される。第二期はサッフオピンダー等の
名を以て代表される。偕て上來の記述に依つて吾人は今や其第三期に入らんと
して居るのである。希臘の思想は諸方面に活動し、また活動する時には必ず秩序
あり、平衡あり、規律あり、調和あると云ふ有様である。併し歴史家の鼻祖としてま
た希臘の文人として名高きヘロドタスの世に出た時には、また一般希臘の文學
も文の調和、言句の排列等に關しては充分發達をして居なかつた。それ等の點に
於てはリシアス(Lysias)の時分から漸く注意され、進んでかの名高いペリクレス
(Pericles)の時代やアレキサンダーの時に至つて發達したものと云はなければ
ならぬ。さりとてヘロドタスが立派な文人でないこと云ふのではない。彼は快き徹
底するやうな文體を以て吾人を魅し、吾人を樂しましめるのである。これは一つ
はギリシア語といふ言語の賜物であつたと言はれるかも知れぬ。と云ふのは當
時はかのアッチクとアイオニックの言語が旨く包合した時であつたからである。猶
ヘロドタスの話方は面白く、その方法には少しの修飾もなく、觀察は明敏に、判斷
は精確で、然かも總てが詩的である。従つてヘロドタスの作は吾人の教訓とする

處多きと共にまた吾人を樂しましむるのである。例へば一事件を記述するも決して單調ではない。また決して讀者を樂ましむることを忘れない。彼は先づ歴史家の道を拓いた者で、その鼻祖と云ふべき人である。ヘロドタスの跡について起つた者がシムシデイデス (Thucydides) ケソフォン (Xenophon) 等これ等の歴史家により後代の模範とすべき不朽の作物が出来たのである。この兩史家の中前者は人物並に事蹟の描寫に長じ、其筆は品位と力とに富み、莊重で恰も悲劇を讀むやうな趣がある。後者は作風が頗る簡潔で人の心を惹くのである。且つ極めて明快な筆を以て居る。

歴史家は此三人に限るとして、倍て希臘には婦人の勢力の當るべからざるものがある。凡そ希臘の婦人と云ふ者はアゼンスの法律並に習慣により長い間家庭の勞役に服さなければならぬ様になつて居る。其勞役は一種奴隸のやうなものであるが、併し婦人の中には其勞役に服する使命を免れて居るものもある。これ等は自由な婦人として男子と共に藝術上の修養や思想の修練をなした者である。即ちテアノ (Theano) と云ふピタゴラスの娘が父の教によりて訓練されて學問を

したことは古い歴史にも見えて居るが、それはこの種の婦人である。ミロスのアスパシア (Aspasia of Miletos) はその内最も有名で、其名はかの希臘の有名な政治家ペリクレスと並んで居る程である。この婦人はマナクラゴラスの哲學を論じ、ソフォクレリス、ユーリピデスの詩を愛誦し、また有名な彫刻家なるフィデス (Phidias) の審美的議論に耳を傾けたが、此婦人の如きは其見識に於ても立派な品位を有して居た。蓋しアスパシアはこの種の婦人の最も好き適例と云はれるべきものである。即ち希臘に於ては婦人もまた詩神に縁のないものでなかつた事を證明して居るのである。

次に更に高遠なる智力の範圍に就て謂へば、プレトールとアリストールとが控へて居る。併し此兩者の出る少し以前の事情を窺つて見るに、其時には例の詭辯學派 (ソフィスト) が哲學を罵り之を輕蔑して居た。抑當時は哲學上各種の系統が入り亂れ、學說の統一が缺けて居たので、ソフィストは凡てそれ等に就て疑義を挾み、美術上の學問もまた精神上の學問、例へば倫理の如きも一括してこれを疑ひ去つて了つた。此一派の名を擧げればサモスのメリッサス (Melissus of Samos) エニア

のゼノ(Zeno of Elea) アンピクラのプロタゴラス(Protagoras of Abdera) ヲオンチニの
 ゴルジヤム(Gorgias of Leontini)等である。斯かる一派の全盛な時にソクラテスが顯
 嚴を恢復した。ソクラテスの師は則ちアナクサゴラスで彼は其精神的な氣品の
 ある教を享けたのである。アナクサゴラスがアゴラ(Agora)の中央にある門の下
 に立つて天の星を指し、諸の天體を以て最高なる智識の下に隸屬するものであ
 ることを教へたときに、この青年のソクラテスはそれを傾聴し、またこれを默想
 して居つたのである。斯くて彼は全世界のことを了解した。即ち世界の本源は物
 質的の者でなくして智識的の者であることを悟つた。彼は之に據り、全哲學の原
 則を得、その考へ得たものを直に言葉に現はさんと試みた。これを一言にして謂
 へば「善」と云ふ概念を立て、これを智の究極の大目的としたのである。
 ソクラテスに次いで出たのが則ちプレトローとアリストートルの兩哲學者であ
 る。この兩哲學者は全然自己の天才に依頼する外、何等の助力を與へてくれる者
 のないに拘はらず、道理の光に照されて最も高尚な概念を得た。彼等は共に人類

の自然、神の觀念等を了解した。そして猶太的基督教の一神教の問題が起るすつ
 と以前に於て、哲學上から神と云ふ觀念に達し、また凡ての智識と良心の深度と
 を考慮した。かれ等兩哲學者が世界の教師であると呼ばれたのは至當な事であ
 る。此兩哲學者と同時にデモステネス(Demosthenes)が顯はれて辯士としてこれ迄
 知られて居たエスキネス(Eschines)と云ふ人と競争して辯士たる其位置を奪つ
 た。彼はイシッス(Isosus) アルキダマス(Alcibiades)を師としたが、またソクラテスを
 も師とした。併しその特色とも謂ふべき性急な劇烈な性質は全く自己から出た
 ものであると云ふ。

六

希臘文學の第三期には斯くの如き大才が輩出して居る。併し或る人の指示した
 處であるが、この全盛期は非常に短い。何れも同時代に居た人で互に其顔を視知
 つて居なかつた程時代の隔離して居たのは二人に過ぎぬ。その外の大家は皆互
 に知り合つて居る同時代の人であつた程相接したと云ふのである。凡そ物の完
 成即ち時代で云へば全盛期なるものは時代の頂點になるのであるから長い筈

はないのである。例へば山の頂のやうなもので、頂は決して潤くはない、それ故一度びこの頂點に達した時には直ぐに降り坂とならなければならぬ。此道理により希臘文學の衰頹は忽ちに來た。其中に稍長く續いたのは喜劇である。クラチノス、アリストファネス、ユーポリス等は喜劇の古い時代に屬するが、これに次いでは中期の新喜劇家メナンドロス (Menandros) フィレモン (Philemon) ディッロス (Diphilos) 等が居て百年程はその命脈を繼いで居たが、其他の文學に至つては更に速く衰頹して了つた。

七

希臘の思想は斯くの如くなつたが、一方から云へばそれは深さに於て失はれ、廣さに於て得たとも謂はれる。アゼンセスとスパルタとは從來主權を争ひ合つて居たのであるが、今や一致して外敵に當らなければならなくなつた。殆ど半野蠻とも謂ふべき北方の王國がアゼンセスの上にまたヘロボネソスの上に襲つて來た。北方の國と云ふのは希臘と言語を同じくして居るマセドニアである。斯くてアゼンセスの全盛な時代は消滅してヘラスの精神は分散し、今やそれがペルガモス (Pergamos)

gamos) とアレキサンドリアとに徙つて了つた。マセドニアの勢力は更に東の方に進んで、ヘレニズムの精神(希臘思想)を印度の邊にまで傳へた。それから半世紀間遠征混亂の後、アレキザンダー王の後繼者が古代の諸府や、また新しい都を開いて諸方を支配することになつた。即ち小亞細亞の諸國エフェサス (Ephesus) ヘルガモス (Pergamos) ラオヂケア (Laodicea) アンチオク (Antioch) セザレア (Caesarea) ヌロポリス (Hieropolis) 等の都に新しい祭殿や新しい興行が行はれることになつた。銅の製作者はその堅い金屬を細工して、アンチオクの都でセリューシデス (Seleucides) の運命を公衆に示し、ヘルガモスの平家根や軒はアテーネの美しき姿や大男と闘ふジュウスや、獸力と闘ふ神々と人々の戦とを示して居た (Alfred and Maurice Croiset, Histoire de la Littérature Grecque の第五卷参照)。

これと共に埃及が立派な希臘の代表者となつた。即ち斯くの如くにして吾人は今アレキサンドリアの全盛期に到達して居るのである。

アレキサンドリア派と云へば寧ろ善くない流派のやうに考へられて居るが、必ずしも悪い學派とは云へない。成程希臘本元の要素は缺けて居るかも知れない。

併しそれがアレキサンドリアの學派に全くないと云ふことは云はれぬアレキサンダー大王の死後、亞弗利加の守將であつた人々は、埃及に夥多の都を建立した。そして文學はこゝに歓迎された。それ故に文學は本國に於ける禍を免れて此處に移つて來た。其都の代々の主領者は詩人を歓迎し、圖書館を建て、博物館を開いた。そしてその成熟の期に達する準備をなした。その成熟は無論希臘本國にあつたやうに華々しくはなかつたが、なほ相應の美觀を有し、また或る程度までは注目に値するものであつた。アレキサンドリアの全盛は少くとも哲學上見逃がすべからざる一時期であつたのである。

それで暫くの間はベルガモスとアレキサンドリアとの間に競争があつた。又ローデス(Rhodes)の學派とタルサス(Tarsus)の學派との間にも競争があつた。君主のトレミー・フィラデルファスはその宮殿の近くなるブルキウム(Bruchium)と云ふ都の一部に大きな圖書館を建立した。これが圖書館の初めであつた。これを裝飾し美しくするには如何なる費用をも吝むと云ふことなく、又珍書と云ふ珍書は世界の各方面からそれを蒐めたもので、それが爲めには外國から捕へられて來た數

多の捕虜を自ら財を出して自由にして遣り、それ等を使つて書物の蒐集をやつた。此トレミー・フィラデルファスは猶太の學者六十二人を二箇月半の間王侯のやうにして養つて置いて、なほそれに立派な餞別を與へたことがある。王はそれでもなほ彼等がなした仕事に對して輕少な禮であると考へて居た位である。その仕事と云ふのは即ちモーゼの法律をヘブリウ語から希臘語に翻譯することであつたが、それが即ち今日まで名高い聖書の七十人譯と云ふ物になつたのである。フィラデルファスと共にベルガモスの王ユーマネス(Timenes)もその都を飾るに思想の寶庫を以てしやうと考へ、博物館を建立しやうとした。ユーマネスはその富に於てはフィラデルファスに劣つて居たが、その建立した圖書館や博物館の壯大な點に於ては、決してかれに劣つて居なかつた。或は貴重なる原書を貸め、或は書寫をなすと云ふことに於ては全力を盡して居た。アレキサンドリアでも(即ちフィラデルファスの圖書館)人々はこの圖書館は自分の方を負かしてはしないかと心配し始め、これが爲め王はパピラス(Papyrus)紙の輸出を禁じた位であつた。紙の輸入がなかつたのでユーマネスは羊皮を用ひることを發明したので、その文書は迅

速なる勢を以て増加した。併しこれ等の文書は後年に及んでアレキサンドリアに送られる運命を有つて居たのである。後年アントニーがユーメネスの圖書館をベルガモスから持つて来てクレオパトラに献じたことがある。かのブルキウム(Brichium)の圖書館はジュリアス・シーザーがその都を圍んだ時、偶然にかまた故意にか解からぬが焼失されたので、この一事はアレキサンドリアに取つて非常な慰藉であつた。

埃及王は又小鳥でも飼ふやうに詩人や學者を聚めて居たが、斯くの如く蒐めた書物はこれ等の詩人や學者により更に寫し取られ、茲に新研究新學問と云ふ者が起つた。物理學數學はエラトステネス(Eratosthenes)と云ふ人により非常なる發達をなした。此人は第二のプレトローと呼ばれた人である。文法や言語學を昌んに研究され、ゼノドタス(Zenodotus)と其弟子サモス・エヌ(Samothrace)のアリスタルカス(Aristarchus)等が諸書の原文を説明し、言語の方式を定め、文學を愛好するの念を極端に、併しながらよく獎勵した。セントブーゲの言によると今日吾人がホーマーを手にし得るのは全くアリスタルカスの功に頼ると云ふ程である。

當時のアレキサンドリアは斯くの如く批評の世界、乾燥した學問の時代であつたが、猶且つ藝術上の製作がないではなかつた。神話を語るやうに最も愛讀でまた最も朦朧なるリコフロン(Licophon)と云ふ作家がある。これは頗る晦澁で大抵な難解な詩でもこれと較べると明快だと云はれる程である。またパッカスの祭典や饗筵に用ひられた澤山の戯曲もあるが、それは先づ數の中に入らないとして、猶吾人はカリマカス(Callimachus)の挽歌や、セオクリタスの牧歌を當時に於て有つて居る。前者の詩は吾人の趣味に従つて云ふと、寧ろ學者的で感興に乗つて書いた物でないこと云はれる。後者の詩に至つては、今もなほ詩文の社會で愛讀せられて居る。ガダラのメレアンセル(Melanger of Gadara)はアナクレオン派から出た技巧的詩人の詩集を初めて編輯した人であるが、この詩人はこれから二世紀後になつて漸く顯はれるのである。パウル・ド・サン・ヴィクトルは云つて居る。希臘の美はメレアンセルに於てその最後の微笑を洩らしたと。即ち當時詩の方面はそれ程昌んではなかつた事を證明するに足る。

セオクリタスは牧歌に於ける唯一の詩人である。今まで神話によつて蔽はれた

色彩を剥ぎ取り、自然の美に對する感じを其儘直截に顯はしたのは此詩人である。當時アポロニアスといふ詩人もあつたが、それは想像力よりは寧ろ優美なる文辭の調和を以て古の詩歌を祖述したのに過ぎなかつた。然るにセオクリタスは自分の周圍を研究し探賞して味つて居た。其水晶の如き詩の中に神話中の水の女神や、森の女神の助を藉らすして空や海邊の景色を叙した。彼は今日の詩人が都會を避けて清閑な田舎に行くやうに紅塵喧噪の大都會を避け、安息を與へる森蔭や、湧き出づる泉に遊び、又は微風に吹かれながら平野の濶々とした處を樂んだ。或は樹蔭に坐し、或は若樹の間に立ち、或はまた流の涯を漫ろ歩いて羊飼の歌を覺え非常に優しい優美な光景を描出したのである。天地山川の姿を描くことに於てセオクリタスは千古の模範と云ふべきである。

セオクリタスに次いで來たる者は教訓的作家で、シリシアのアラタス(Aratas)の如き人であるが、これが後のヴァーシルやオヴッドの先驅をなしたものであると云ふ。實際かれは斯かる大家の前驅として愧づかしからぬものである。さてこれ等が希臘思想の最後の響で、希臘思想は其邦土が羅馬の有となる以前に特に其

收め得る限りの收穫を收めて了つたのである。

八

斯くの如くにして希臘の思想は去り、希臘の邦土も羅馬に合併されて了つた。そしてこの兩人種の合同から新しき活力が起つて來た。これがまた人類進歩の一大道標となつたのである。

併しながらこれより以前に一度も希臘の思想と羅馬の思想とは交渉することはなかつたらうが、元より極く古くより兩者の間に多少の交渉はあつた。羅馬の基礎が立つてから百年經つか経たぬ中に、希臘はコリンシアのデマラタス(Demaratas)と云ふ者がその都の貴族の壓制の爲めに逐はれて羅馬の地に徙り、タルクニニ(Tarquinius)に定住し、其處に美術家の殖民地をつくり、ラチアム(即ち拉丁)の田舎の民に陶器に繪を畫くことを教へ、且つその長子タルキンを立派な人物に仕立てることに準備をして居た。これが抑、兩人種の自覺した第一の交渉であつたらうが、ピタゴラスも伊太利に住んで居た。そしてクロトナと云ふところにその哲學的神秘的また政治的組合の基礎を定めた。併しこの外にも希臘の諸府から

特に發展せんとする羅馬の中心に向つて、或る思想が斷えず注入されて居たらしくなる。それは勿論明瞭に見える程のものではなかつたらうが、長い月日の間には種々の事情から何等かの形となつて顯はれたのである。凡そ思想に於て兩國民が互に交渉するやうになるには歴史上、政治上の關係があつてのことである。

さて羅馬と希臘は種々のとで、般んに近接し遂に淺小ならざる關係に及んだ。即ち羅馬建國の五百五十年頃羅馬の君主は大計畫を立て、マセドンのフィリップに對して自ら希臘の保護者である、と宣言するに至つた。斯くて羅馬の軍は希臘に入つてこれを征服し、初めは希臘は在來の自由を國民に許したのであるが、終には保護の名の下にこれを自國の版圖に收めてしまつたのである。即ち紀元前一四六年に至つてマムミウス(Mummius)は諸國民の名簿の中から希臘國民と云ふ名を削つて了つた。この時希臘は最早兵力を以て羅馬に抗することは出来なくなつた。併しながら國家は失せても不朽不滅の勝利は希臘にあつた。それは兵力も權力も及ばぬ天地で、即ち藝術の天地がその勝利の地である。捕はれたる希臘は

倒さまに拉丁の地を侵し、藝術とそれに伴ふ幾多の勢力とを以て伊太利の地を支配したのである。

第五章

希臘拉丁の混交以前——兩文字協合の初——古き拉丁詩歌——ビュニク
 文化の廢墟——シラノ時代——オーカスタス時代——文化の全事業——偉
 大と衰亡——哲學的研究の復興。

—

有史以後の羅馬は先づその五六百年間に全力を費し、勝利の渴望を満足させんとして居た。由來羅馬人は默想的の趣味を欠き、審美的感覺は一向に發達して居なかつた。人種で、偶、詩人がその間に生れても、輕蔑されるのであつた。言ふまでもなく羅馬にも人望を得て居た辯士もあつた。演壇に於ける戰闘者とも謂ふべき人もあつた。併しそれはたゞ政治の範圍に限るので、此雄辯も要するに政談演説の雄辯で、氣品のある辯舌や哲學嗜好は何等の進歩もせぬと云ふよりは、寧ろ全くなかつたと云ふ方が適當な位であつた。そしてその初めて美辭的辯舌若く

は哲學的思索の起つたのは希臘の最後の守衛者即ち希臘廢滅の時まで其國を守つて居た教育ある人々が、遂に分散して伊太利の地に來てからのことである。それ等の人々の數は少くとも千を以て數へる程であつた。彼等は何れも其自國を救ふとが出来ないのみならず、亡國の民として新しい國家に對しても政政治上の力を盡すとの出来ないことを知り、各、それ／＼の都に別かれて、纔に文藝の道を修めて其處を隠れ家とし、それを慰藉として居た。活氣に富んだ文人で、メガロポリスのポリビウス(Polybius)の如きは其一人である。此人は其大作の材料を伊太利で蒐め始め、それを故國の希臘に歸つて完成する積で居た。彼は歴史上の各事蹟を觀察して其原因結果の推理を立つる特殊の才を有つて居たので、在來の作物には見得べからざる政治的並に理論的な異彩を其歴史に添へて居る。兎角して居る中に斯かる人々の實行的先例や、その論議が模範となり、羅馬人の間にもさう云ふ思想上に力を致さんとする者を生ずるに至つた。これまで才氣も少くなく愛國とか政治的戰爭的の實際の事件に接觸しながらも、なほ多少内省的な思想上の事にも考を及ぼし得た人々は、争つてさう云ふ方面即ち思想上

の方面に力を致し初め、比年ならずしてアゼンスに於ける羅馬の代官カルネアデス(Carneades)クリトラウス(Critolous)ディオゼニス(Diogenes)杯の雄辯が人々の注意を惹くやうになつた。カルチアデスの人を魅するやうな聲その優揚としてしかも急速な發言を聴く爲め、幾多の青年は青年特有の快樂を棄て、その競技杯を放棄して相ひ集まり哲學上の思索を逞しくするやうになつた。

かのケトー(Cato)は其傾向に反對し、終日聲を勵まして外國人(即ち希臘人)のすることに信頼するの不可なることを説いて、其心と眼とを閉ぢて希臘の事物即ちその教化并に文藝的思索を嘲つて居た。併しその天罰として遂には自分も希臘語を學ばざるを得ざるやうになつた。併しケトーの如くその大勢に反抗した者はなほ他に少なくはない。種々の制裁を拵へて、其文藝的若くは思索的傾向を止めやうとした元老院は、斯かる大勢が一國の勇氣を薄弱ならしむるものであるとして、それを制限する特殊の法律を制定した。然しそれ等人爲的制禦は何等の効なく、一度び與へられたる其衝動は到底止める事は出来なかつたのである。恐らく當時の人々は藝術若くは科學を以て劣等なるものとし、殊に兵士の精神

を薄弱ならしむるものと考へたらしい。併し大勢一度び傾けば習俗は自らなるもので、希臘學風の起ると共に世間の風もそれに傾いて來た。羅馬の著明な人々は希臘の名を自分の名に用ひるやうになつた。フィロ(Philo)とかソフォス(Sophos)とかヒブレオス(Hybreos)とかいふ名が、即ちそれで羅馬人がさういふ名を自らつけるやうになつたのである。かくて拉丁の思想は其征服した人民から訓練して貰うやうになり、一度び希臘の趣味を解してからは、二度びそれを棄てることは出来なくなつた次第である。

ヴァニアス(Fanius)とかストラボ(Strabo)とかマルカス(Marcus)とかヴァレリアス(Valerius)とか、メッサラ(Messala)などの政權を執つて居た時、法令を出して希臘との交渉を妨げた事があつたが、それでもなほスシピオ・エミリアス(Scipio Aemilius)の如き人のポリビウス(Polybius)とか、パチチウス(Pauctius)等希臘的人達と親交を結ぶ事を禁ずることは出来ず、また羅馬の寺院にあつた醜い冷かな古い拉丁の神々を捨て、優美なるアゼンスの神々を迎へることを禁ずることも出来なかつた。これは元より自然のことで、希臘の神々が羅馬の神々に勝つて居たと同様

に文學も其通りで羅馬は劣つて居たのであるから、希臘の勢力に侵されるのは已むを得ぬ事であつた。形も定まらぬ品位のない古いエトラスカン、サピン、イタリアの文學(即ちラテン在來の文學)が如何に燦爛として且つ堂々たる希臘文學の力に對抗することが出来やうか(譯者曰く羅馬民族の希臘文學に教化される點は、頗る今日のわが思想界のことに似て居る。この歴史上の證言は吾人の善く味ふべき處である。即ち羅馬の希臘文學に對した處は、頗るわが現代の西歐文學に對する處に當る)。

二

拉丁文學の出生は容易ではなかつたが、しかし一度び發生してからのその發展は速かだ且つ健全であつた。第一回のピニク戦争(カルタゴに對する戰)と、その第三及び第四の戰との間に立派な文人が可なりに出て居る。例へば羅馬の文學上の用語の制定者とも謂ふべきリヴィウス・アンドロニカス(Livius Andronicus)古く詩形を改めてアイアンビグを用ひたキネアス・ネウイウス(Cneius Naevius)ホーマーの再來とまで云はれたキンタス・エンニウス(Quintus Ennius)等が出て居る。このエ

ンニウスは恰もホーマーのトロイの落城を歌つたやうに、コリンスと同じ風に、落城したカーセージの敗滅を歌つて居る。このエンニウスはまたシセロからもヴァーギルからも大に稱讃されて居る。かれはホーマーの才に加ふるにオスカン(Oscan)及び希臘の影響を受けて、ユーリピデスやメナンデルの喜劇や悲劇を模擬し、また翻譯し、その日記の十八卷を以て叙事詩人の名を博し、更に諷刺詩にも妙を得て居る。後のルシリアス(Lucius)の前驅となつて居る。エンニウスは幾多の詩人の源をなして居る人で、悲哀の歌に秀れた詩人バクヴァス(Pacuvius)人口に膾炙したプラウタス(Plautus)羅馬のメナンデルとまで云はれたアフラニアス(Afranius)テレンスの前驅とも云はれたるセシリアス(Ceclius)並にテレンス(Terence)自らもみなこのエンニウスの足跡を踏むで居た者である。それよりして拉丁の良好な主義が生れたと云つてもよい程で、爾來彼等拉丁人は古の詩人の粗野なのに自ら赤面するやうになつたと云ふことである。

斯の如く文藝に對する愛好の念は著しく進み、つまり文學を以て平和の仕事としてこれを嫌つた羅馬の政策は敗亡したのである。併しながら何故斯の如き思

想上のことに互る羅馬の趣味が名高いカーセージに依つて影響されなかつたか。即ちカーセージの亡びた日にもつと廣くもつと深く、羅馬の人心にその勢力が植え付けられなかつたのであるか。蓋し當時の勝利者(即ち臘馬の征討將軍)にして、今少し教化と云ふことに眼が着いて居たならば、斯くまで著名なカーセージの文明をこれ程劇しく何等の遺物も残らぬやうに打壊はしてはしまはなかつたであらう。若し征討者にして少しく心があつたならば、カーセージはたゞその興亡を記した注意すべき歴史が残らなかつたにした處で、斯かる無殘な有様にはならなかつたであらう。カーセージに就いては一物も残らず、今その跡を追はんとすれば、たゞ一二の塔のこはれや墳墓の断片や、海邊の砂に混じれる大理石片のある外、たゞカーセージと云ふ名の遺つて居るに過ぎぬ(カーセージの斯く遺物を残さぬと云ふことに就いてはアラビア人が大分關係があると云ふ。何となればアラビア人がその地を占有してからはその古い建築杯を自分等の建物にしやうとしたので、カーセージの古い物は盡く取除けて了つたのだと云ふ。第十三世紀にアラビアの歴史家エドリシー(Edrisi)と云ふ人がカーセージの

遺物を取り去つたのは永く忘るべからざる兇暴なことだと云つて居る。一八九年には師父デラート(Delate)と云ふ人がカーセージに就いて一種の發見をして居る(Le musée Lavignerie de Carthage, Paris, 1900. 参照)またパウル・ゴークラー(Paul Gaueker)の指揮の下に行はれた探索は、この海國にカーセージがその敵の爲めに全然破壊される以前の藝術及び文化に關して意外なる發見をなして居るといふ。

抑、カーセージは亞弗利加の北海岸にあつてイタリア、ゴール、スペインに向ひ、海國として當時雄視して居たもので、その艦隊は數に於ても武装に於ても當時それに比すべきものはない位であつた。殊にその占めて居た位置が好いので、西方の首都となつて居たほゞで、近傍の諸國は羨望して居たのである。羅馬とは言語も風俗も人種もその起原も全く異つて居た。即ちカーセージはフェニシアに似て居たが、フェニシアはまた猶太に似て居た。商業に於ける天才があり、風俗は一面富有贅澤であると共に、一面には野蠻の風があつた。その宗教は寧ろ迷信の方で、貪慾の神である、モロク(Moloch)難行苦行を重んずるタニット(Tanit)等の象徴を崇拜

し、それに奇々怪々な昔の神様の考を交へて居たのである。併し是等の跡を尋ねべきものはみななくなつて了つた。若しそれ等の宗教に關する遺物でも遺つて居たならば後の教育の爲め、學問の爲め、歴史研究の爲め、如何程利益があつた事であらうか。又それにより東洋の思想が如何ばかり窺はれたであらうか。然るに惜しいことには總てこれが湮滅して了つたのである。蓋し希臘の文化が獨り遺つてたゞそののみが後の羅馬を開發するやうな運命が定つて居たのであらうか。カーセージは遂に何等羅馬の文化の上に寄與する處はなかつたのである。然るに希臘の文化は益々昌んになつた。否、盛んな羅馬に紹介された。哲學者は諸方から呼び集められ羅馬の子弟を教育し、また羅馬の市民に助言を與へるやうにされた。この市民は即ち民選によつて市の工事に干與しなければならなかつたので、勢ひ學識ある希臘の哲學者を顧問としなければならなかつたものと考へられる。それで人々は競つて學問を勵み、また辯舌に優ぐれやうと努め、みな古へのリシ阿斯 (Lysias) や、ヘンリデス (Hyperides) や、或はデモステネス (Demosthenes) を學んだ。クラッサス (Crassus) や、アントニー (Anthony) はその雄辯をコッタ (Cotta) 並にホル

テンシヌス (Ortensius) に傳へた。ホルテンシヌスの表情術に巧みなるは當時の俳優が彼の下に来て、その身振やその發言の工合を親しく學んだと云ふのでも解かる。また一方にスケツオラス (Scævola) 一家の如きは民法を完全にした。またシセロはもとより驚くべき文學的精神の鼓吹者と云はれて居る。その年齒の未だ少なかつた時やつたことは實に勇敢にしてまた華々しくあつた。例へば彼は人々の恐れて手に汗を握るが如き場合にあつたにも拘はらず、猛然として壓抑せられて居たロシヌス (Roscius) なるものの爲めに直ちにその辯護を試み、滿場をして水を打ちたるが如く肅然たらしめ、それが爲め益々自分の辯護を人々の心に徹底せしめることが出來た。それは弱冠の時の事であつたが、彼の一身は幾多の羅馬市の大事件と伴つて居り、何時も其主動となつて居たが、併し彼が世界に於て第一の位置を占めて居たのは、智識の世界に於てである。彼は其作の數に於ても、種類に於ても、其重んずべき度に於ても、其質に於ても、拉丁文學の君主である。優しい情緒、細やかな心、宗教的莊嚴并に熱情等總てそれ等は驚くべき程にシセロの一身に集まつて居る。シセロ獨特の才能は人に與へる印象の極めて速く移り行く

點にある。即ち心の或る状態から他の状態に移る處が頗る急速で、それが人々の心に種々な感銘を與へる。これが他人の及び難き處である。シセロはたゞの文人でない。非常に多くの公務を有つて居る。時には戦場にも臨まなければならぬ。併しそれでもなほ精神上の熱誠は冷却しなかつた。

シセロの後にサラ(Sallustius)が居る。追想記二十八卷を書き、またアペリコン(Apellicon)の圖書館を羅馬にもつて來たが、之が學藝の進歩の上に多大の貢獻となつて居る。彼は一方に於て多くの文人の敵であつたが、また學問の獎勵をしたことも少くない。サラに次いでルキュラス(Lucullus)が居る。ルキュラスは光榮ある政治の舞臺を退いたが、さてその暇を如何に費すべきか、其方向を求めて智識の世界に入り、其眼界を博くしやうと考へた。そして先づ大きな建築を起し、それを以て書物を納める宮殿とし、なほ凡ての人々をして此處に出入することを許した。而かもその周圍に通ずるに日蔭涼しき樹下の道路杯を以てし、人々をして快よく學藝の道に携はるるを許したので、ローマ在住の希臘人は熱心に此處に集まり、浮世の塵を離れて喜んで學問に耽つた。ルキュラスはまたその學者と議論を上下し、彼

等の主張を助けることをした。また彼は彼の友シセロの新しい哲學を愛好し、其方の便宜を圖つたに反し、明かに哲學に關しては古の學派を好むことを腹藏なく述べた。斯くの如くにしてルキュラスは戦争にも堪能であると共に藝術にも優れて居た。かれは嘗て歴史を編纂する計畫を立てたが、それを希臘語で書くか、拉丁語で書くか、抑、また散文で書くか、韻文で書くか、それを定める爲め籤を抽いたと云ふことさある。以てその如何に多才多能行く處として可ならざるはなしと云ふことを窺ふことが出来る。

併し斯くの如く文藝は盛大で如何にも和氣が洋々として居るやうであるが、實はこれはたゞ表面の現象に過ぎなかつたのである。人々はたゞ藝術の點から希臘を摸擬すると云ふより以外に他の野心を以て居た。即ち當時は朋黨政争の世でまた道德腐敗の時代であつた。元より立派な人々にして其位置や財産を作り上げた者で世間を退き全然學藝を楽しむと云ふ人々もないではなかつたが、多數の羅馬人はさうではなかつた。彼等は争うてその進路を開き朋黨軋轢のみ甚しき中に立つて其頭角を露さうと欲して居たのであつた。其間に立つてアッチカ

ス(Athicus)の如き人は稀有の例で、この人の如きは特筆する價值がある。即ちこの人は何人とも相容れ、シーザー、ポンペー兩人の信任者なるバルパス(Ballus)並にセオフネス(Theophanes)とも親しく、クロードアス(Clodius)とも交り、同時にシセロの親友でもあつた。併しかくの如きは例外で、多數の人は互に相排し相争つて居たのであつた。青年の考には主義も主張もなく、疾くから腐敗の淵に沈んで居た。同時に文學も斯かる人の手に弄ばれて、その神聖を瀆すこともあつた。共和政治の晩年にはかのエビキラス學派がローマに紹介されて來て、凡て何事も自己を中心として、自己の利害から何事も考へるやうになつたので、自然に精神上道徳上の墮落を伴ふて來た。即ち一體が道徳上思想上無政府の有様であつた。羅馬の歴史はシセロの執政から帝國建立前の内亂に至る間全くその平和を失つて居た。そしてその轉變と云ふものは目の廻はるやうで、その短時日の間に於て一人のシセロはカチリン(Catiline)と權力の競争をし、クロードアス(Clodius)の犠牲となり、またシーザーの臣下ともなつた。軍隊は四方に派遣され世界を征服し地方を略奪して居たに拘はらず、内には羅馬府の墻壁内に於てすらその主權を握

らんとする争が行はれて居た。即ち羅馬の主君達は其權力を振はんと欲して人民を抑へつけて居た。併し羅馬の市民は最も伶俐なまた最も強力な人の手に落つべき運命を有つて居た。其人とは即ちシーザーの事である。

茲に羅馬史上には一大事件があつた。大混亂があつた。即ち共和の一轉して帝政となる次第である。それ故時代の主なる文學も大にその影響を受けた。例へばサラスト(Sallust)の如きは其代表で、實際に於ては苛酷なる人であつたが、その書いた物に於ては常に人に徳義節制を教へると云ふ人物であつた。またルクレチアス(Lucretius)もその一人で、彼は言葉に詐なく、その説く處必らず行ふと云ふ處がある。ルクレチアスはエビキラスの弟子であつたが、親しく羅馬共和政府の苦惱を視、政治道徳の亂脈の状態を視て、世の實相の斯くの如く淺ましきかを感じ、遂に自分の心を獨立させ高潔に保つて行くには自身の心の世界に退き希望も持たず恐れをも抱かず靜かに世を過すより他に道なしと諦め、茲に其 De Rerum Natura (自然界)と云ふ哲學的の詩を書いた。彼の創意的思想懷疑主義(羅馬の神々や占術に對する)並に賣女に對する敵意等は羅馬の世界を覆へすに有力なもの

であつた史家モゼンは斯う云つて居る。今の倫敦に北米ニューオレアンから來た奴隸の一群が住み、その警察制度はコンスタンチノールのそのやうで、そしてその殖産興業が近來のローマのやうであつたと想像し、且つ政治上の状態は一八四八年に於ける巴里のやうであつたと考へて見れば恐らく讀者は羅馬共和政治の最後の有様が察せられやう、とさう云つて居る。今や實際自由といふ語はカシヤスの如き、またブルータスの如き人の口の上つて意味のない言葉となつてしまつた。

その道徳的墮落は國家全班に渡つて居た。國家は無政府の状態に陥り、高位を得んと欲する者が金力によつてこれを獲取するのはまだじもの事で、遂には暴力を以てそれを奪略するに至つた。國會の會議はたゞ喧騒を恣にするのみで、競争と云へば殆ど虐殺同様で、それが所謂選舉の度ごとに行はれた(シセロがこの種の競争のことを書いて居るのを、タイパー河は數萬の屍を以て滿され、下水も同様の状態で、人々は海綿を持つて、フォーラムに流れた血を拭取ると云ふ程であつた、とさう云つて居る)。斯かる有様であれば心から政治に注意して居る者

は反つてその面を避けると云ふ風であつた。それと共に多くの人々は斯かる状態に慣れて來て、その間に處して宜しく遣つて行くこと云ふやうになつた。かくてエビキユラスの説を以て最も賢明なる道となした。即ちエビキユラスの説から云へば、人は早く公職を去つてその煩を免れる方が可いと云ふのである。斯くの如くにして賢明なる人は嘗つてその輕蔑した内部生命に重を置くやうになり、朋黨政争の事に携はらず、自ら安逸を求むるやうになつた。それ故に最も賢明にして最も才能ある者は文學の修養を身に任かせ、斯くて國家の不幸に對して自らを慰めるやうになつた。

此際に立つた者がオーガスタスで、かれは斯かる間に秩序を定めた。つまり壓制を以て押へ付けたのである。彼はこれにより平和を與へ、またその平和によつて才能の發達を容易ならしめた。彼は大膽に勇敢に孤疑逡巡することなく、凡て無慈悲なる酷薄を以て事を處し、同時に事物の真相を觀破し、それによりて主權者の位置に立ち、一度び主權者の位置に立つや、その方針を改め文藝に對しても少なからず好意を表して其大をなした。

三

こゝに於て政派朋黨の争、并にその結果たる無政府の状態も最早ローマ府を煩はす事はなくなり、帝國の名の下に凡ての秩序と統一とが保たれるやうになつた。また内部の争亂は終りを告げたので、伊太利も先づ平穩になり、文化の及ぶ限りの地はその利福を享有するやうになつた。かくの如くなれば科學も藝術も進歩しなければならぬ筈である。ケトールとシセロとは哲學を以てローマ人の學ぶべきものとした。共和政體の仆れたので特にその地歩を占めたのはこの哲學である。何となればこの時は政治上道德上に、今や變化が起り在來の傳説の如きものはその威力を失ひ、新しい秩序が立ち、新しい思想が行はれる時であつた。ルクレシヤスの所謂人々が生命の道に向ふやうになつたときであつた。即ちその點が哲學の乘する點で、哲學はその改新された思想なり事物なりに道理を與へるものであつたのである。シーザーがその權力を以て人民の眼を眩惑せしめて居た時、すでに世間には一向知れない奴隸なるエビクタテスはそのシーザーの赫々たる勝利の空しき事、その權力なるものも賢者の眼には一向用のなきも

のである事を示さんと力めて居た。これは恰もペリクレンスの時代がその光榮と富との絶頂に達せんとした時、大儒派の先領とも目すべきアンチスセネス(Antisthenes)が當時アピンスの誇りとして居た榮耀を嘲つたと同じ趣である。

この哲學的思想は單に默想的學者の頭をのみ支配したのではない。公務にたつさはつて居た凡ての人々の頭をも支配したのである。第一にオーガスタスが哲學の研究を奨励する書物を書いた。歴史家も詩人も法律家も藝術の士もみなこれを研究した。ラベオ(Labeo)はこれに依りその深遠なる法律上の智識を強固にし、またその人格の力を得た。ポリオ、チタス、リッポ、(Pollio, Titus, Livy)の如き人々のこれを要したのは勿論であると共に、ヴィトルヴイウス (Vitruvius)の如き人もまたこれを究めなければならなかつた。哲學は殆ど凡ての人の職業のやうになつて來た。かれ等はその子弟を訓育するに秩序ある教育を以てし、その思想と行爲の上、に於ける道德的指導をなすに心を勞して居た。則ち哲學上から人々はその子弟に最高の美を教へんとして居たのである。従つてまた哲學的の雄辯が發達した。パピリウス・ファビウス(Papirius Fabianus)の如きはその美しき辯を以て高遠の

眞理を説き、聴者をして酔ふ如くならしめたものである。政治上に於ける雄辯といふものは未開の地を必要とする。言をかへて云へば、ただ秩序のつかず世間が混沌たる状態にあるを要する。むやみに混乱しやかまじければ却て其處で人の心をひく事の出来るものである。然るに哲學的の事をのべて人々に感化を與へるにはそんな時勢では困る。後者には落ち附いた世の中が必要である。處で當時のローマは前の混乱が治まつて全く靜穩になつた時なのであるから、哲學思想の發達に便利であつたと共に、哲學的雄辯を振ふにも適して居たのである。

これと共に詩も亦安逸なる時代を要するのであるが、これが亦當時に好く適じたので華々しき發達をなして居る。今左に其概況を述べて見やう。

第一に擧ぐべき詩人はヴァージルである。ヴァージルは田園の勞働とその快樂を歌つたので、その私淑したのはかのセオクリタスやヘシオット並に前記のルクレシアス等であつたが、かれは一躍それ等を超えてホーマーの壘を磨じ不朽なる叙事詩をローマの文藝に與へて居る。叙事詩とは即ちそのエニード (Eneid) である。

ヴァージルに次ではホーレース (Horace) が居る。これはラテン思想若くはその精神の光輝と才氣とを示し、諷刺に富んで居るが、その諷刺は徒に毒舌を弄したやうな下品なものではない。またその趣味に至つても極めて上品な類である。その上かれの作はそれを一貫するに哲學を以てして居る。その誠實なる精神と自由なる心に依り、ホーレースは今日に至るまでその詩風に於て、またその右に出る詩人を見ない程である。

次にヴァージルの友人で、文學の保護者で熱情のある想像に富んだ詩人がある。コルネリアス・ガラス (Cornelius Gallus) が即ちそれである。更らに詩人を擧げると、それに次いで感情深きティバラス (Tibullus) が居る。これは婦人の空間のことなどを悲歌として歌つて居る。またカタラスの後継者とも云ふべきプロヘルチウス (Propertius) がある。これは熱火の焰えるやうな調子で、あまりその歎息の聲の内に神話を多く織り込んで居るが、心情と感能の煩を歌つて居る。次に最も著名なものはオヴイットであらう。これは遙かに前のチブラスに勝つて樂しき逸遊の趣を歌つて居る。併し道德的思想があまり緩いといふ非難を受けて居る。彼はその爲め

に國外に逐はれた事もあるのである。
 轉じて散文の方面に於てはチタヌとリヴィーとが (Titus, Livy) これを完成の域に
 すゝめて居る。リヴィーは勿論歴史家であるがその記述が頗る人の心を惹くもの
 で(或は歴史的批評の上から云へば非難を免かれぬかも知れぬが)その功績は到
 底これを滅すべからざる大歴史家である。其文體は時に冗長に過ぎるとの難も
 ありはするが牛乳の河と言はれる位穩健なるものである。斯くの如きは即ち當
 時の美文韻文の世界であつた。

四

凡そ物の秩序といふものは時日を経て出来上り、而かも其續くのは實に束の間
 であるといふが文學上の製作に於てもさういふ赴きがある。文學の成熟はほん
 の瞬時の事である。言語は滅び、心は消耗し、道義は腐敗して行く。今當時の事を見
 ると政治上の事情がラテン文學の墮落を急がして居る趣がある。
 即ち前段述べた平和は永續しなかつた。結局それは矢張一時の事であつた。國家
 は幸運に向ひ、光榮と繁盛の勝利と見えたとのも束の間であつた。このラテン文學

の忽ち衰へた事並にその原因に就て書かれたのは少くはないが、その事情を大
 畧言ふと次のやうな事である。さて帝國は建立されたのであるが、オーガスタス
 の後繼者は恐るべき暴政を揮ひ、且つ租税の上に甚しい秕政があつたり、人民の
 道徳が甚しく墮落したりなどしたので帝國も自らその盛大を致す事が出来な
 くなつた。オーガスタスの巨手が鎮めた内亂は再びその芽を出し始めた。
 外國との戦は多く休戦に終つた。斯かる状態に於ては文學もまたその影響を受
 けずには居ない。神經過敏ともいふべきカリギラ (Caligula) 帝は凡ての光榮を嫉
 んで詩人を排斥した。學識はあつたが手腕のないクロードアス (Claudius) 帝は只
 宦官を伴とし、かけ事などに目を過した。獨りネロ帝は其好みから、寧ろ虚榮心か
 らラテン詩人の光榮を回復しやうと考へた。如何にもネロ帝の時には、浴場や公
 會堂その他に詩人の聲が音楽と共に聞えた。宮廷の男女共詩人を歓迎した。従つ
 て立派な詩が出来ないでもなかつた。併しそれ等の詩は前のヴァーギル等の作と
 比べれば實に天地の相違がある。その中にたゞ一人頭角をあらはして居るのは
 リューカン (Lucan) である。これはその活力に於て、鮮明なる色彩に於て、思想と文體

とに於て、遙かに一流に立つて居る。然るにその若冠なるに作詩上に華々しき行動があつたので、それがネロ帝の嫉妬を招いた。かれは一面に於て詩に於ける帝の競争者であつた。それ故その成功の著しくあつた爲め、帝から緘黙を守るやうに嚴命された。それから伯父の不都合な所行に坐して、政治上に陰謀を企てたと認定せられて終に殺された。斯くてリウカンは二十七才を以て文藝史の舞臺から去つてしまつた。さてその後に残つたものはスタチアス(Statius)や、シリアス、イタリカス(Silius Italicus)である。スタチアスは微妙な心琴にふれるやうな温かな感情を言ひ顯はす事に長じ、またその巧みな言ひまわしを得意として居たが、それがため往々細工的となつた。その傑作は *Sylve* といふのであるが、かれこそはラテン文學衰頹期(デカデント)の代表作家として良い。

當時は演劇の方面も頗る荒廢の姿であつた。セネカがその悲劇を舞臺に上せたといふのは事實で、その作は今日まで傳つて居る。併し果して其作がセネカ一人のものか或は大勢の合作であるか、その邊は解らぬが、その内には折々ギリシア文化の面影が見える。併しその調子は拮据で流暢を缺き、重くるこくして徒らに誇

張の辯を弄するに過ぎぬ様である。その後文藝的趣味はだん／＼舞臺に見えなくなつた。人々が舞臺に望む處は只立派な衣裳や光景のみであつたが、これはたゞ／＼その人々が趣味を缺き、野生を帯びて居る遊惰の民である事を示すに過ぎぬ。それ故に演劇のない代りに觀せ物類に至つては非常に盛んで前代未聞な位であつた。曲馬場は朝から開かれ、仕合の類は夜に至るまで行はれる。殊に極端に人々の耽つたのは競馬で、これが都人士の主なる慰みであつた。事情かくの如く人々の好みが下つて居たから、演劇的の事は一向人の心に向かなかつた。喜劇でも悲劇でも芝居は人をひく力は持つて居ない。その行はれた演劇と云ふのは下劣猥褻なものゝみであつたが、またそれと共に當時の人心に投じたのは血腥き光景であつた。人々は獅子と虎とを闘かはし、猪と猪と、人と人とを闘はせるのを見て喜こんで居た。こんな場合に詩を作つたり、戯曲を書いたりする事の出來ぬのは言ふまでもない事である。辯論は只表情術や暗記術になつてしまひ、一方には只言辭を弄する詭辯が全盛であつた。思想は斥けられて只言辭のみ重んぜられ物事の結論は只三段論法の型をとるのみになつた。

故に修辭學は研究心に富んだ有望な青年の志す處となつた。併しその眼界の狭いため、それはたゞ／＼屁理屈を言ふ機關に過ぎなくなり、終には只言葉を意味もなくならべるものとなつてしまつた。ヴェスパシアン帝のときに修辭學の教科はクインチリアン (Quintilian) なる人が國命に依つて教へることになり、これに依つて善良なる趣味を回復するといふことになつた。かの少ブリニーはクインチリアンの高弟であつたが、これに依つても文學が如何なる位置にあつたかは解らう。

斯くの如く文法家が勢を得て、思想の元氣を失はしむる影響は到る處に感せられた。堂々言論をたゞかはすフォーラムはなくなつた。人道の爲めにたゞかふやうな立派な訴訟事件もなくなつた。雄辯なるものは重んぜられない。立派な演劇は行はれない。人々は少なき法廷で半は眠つて居る少數の判事の前で、庭のさかひやら溝の位置に關しての争ひといふやうなつまらぬ事件に就て辯論するのみであつた。辯士と名のつくべき人はなくなつてしまつたのである。

哲學的思索は科學的方面に用ひられて驚くべき結果を出して居る。たとへばギ

ロシアではエムペドクレス (Empedocles) やデモクリタス (Democritus) やアリストートル (Aristotle) やピタゴラス (Pythagorus) などはいふ方面に力を用ひた人であつたが、當時のローマではさういふこともなかつた。老ブリニーは該博なる智識を以て居たに拘はらず、その Natural History の爲めに物語や、想像談や、迷信等を集めたが、それは智識は積極的に進めたと言ふよりも寧ろ退歩させたといふ趣がある。

斯んな有様で其弱點若くは缺點なるものは、多くは社會一般の状態から起つたものであつたが、その間に一種の文學のみは必らずしも其發達を阻害されなかつた。即ち文藝の歴史はかゝる際にペトロニアス (Petronius) が記述詩の上に示した功績を没する事は出来ぬ。かれは在來の神々や偉人を歌ふ代りに、當代ローマ人の日常見る色々な人々を詩の内に顯はして居る。またそれと共に暗々裡に詩に於ける哲學的思想も流れて居た事を忘れてはならぬ。

五

なほこゝに注意すべきはストア派の哲學である。當代の人はカリギュラ帝の世に

生れ、クラウテアス帝の世に教育を受け、ネロ帝の世に大人になつたので、如何にも香ばしからざる時代に遭遇したものであるが、その代償として當代にストア派の哲學の新たに盛になるのを見ることが出来た。それは古の言辭に捕はれる乾燥無味のストア學派ではなく、人の心を惹くべく力のある、又人を慰の納得させるに足るストア學派である。この學派はローマ帝の恐るべき壓制の下に當然發達すべきものであつた。何となればストア學派なるのは人に行動の自由を與へない代りに、人の靈魂に忍耐といふ事の非常に有力である事を教ふるものであるから、壓制時代には當然起るべく、また至極適當な哲學であつたのである。即ちローマの市民の内に、政治上の自由とか、或は門地の誇りとかであつたとすれば、抑また道德の上とか人々の良心とかに關し、獨立の念とか威嚴の感とかであつたとすれば、それ等の自由とか誇りとか、獨立の念威嚴の感とかはこの哲學の内に收められて居る。その證明は之を觀念としてはセネカの場合に見るべく、また實地の上にはミニニアス・ルーファス(Musonius Rufus)とか、スラセアス(Shraseas)とか、ラテラヌス(Lateranus)等の場合に見る事が出来るのである。

447596

セネカはこの學派の最も有名な代表者であつた。かれは修辭學と哲學との中間に育つたが、少壯の時のかれはパピリアス・ファビウス(Papirius Fabianus)の説く道德の教を聴き、またピタゴラス派のソシオン(Sotion)の説に喜んで耳を傾けた。またストア派のアッタラス(Attalus)の下に一番に馳せつけたのはかれであつた。そして他の人々が去つても、かれ一人は後に残つてその師に伴ひ進んで深くその教を受けた。これはセネカの書簡に見えて居る——Gaston BoissierのLa Philosophie Romaine, p. Augste and Antonins参照。それでかれはかれの能ふ限りの智識をあさつて、凡て當代の人々並に諸教師よりは勝つてしまつた。人心に對しては深い經驗からの智識を有し、獨得の道德的活眼を備へ、さらに新たにストア學派に對する熱情を持つて居たので、かれの働いたその力といふものは非常であつた。かれはまた人間の遭遇すべき色々な運命の變化に身を置いた。斯くてかれの書物は凡て實踐哲學を重する人々の坐右を離さざる有用な書物となつた。

近代の見解から言へば、セネカの價值や威力は大に減する事であらう。かれが期して居た通りにかれの書物を以て良心の指揮者と考へてこれを讀むに、かれは

己に對じまた周圍のものに對する人間の義務に就いて盛んに論じて居るが、その間にわれ／＼はかれがシーザーの師であつた事、アグリッパの愛人であつた事、帝國を左右せんと熱望した事を自から思ひ起すので、従つてその論の力を感銘する事が薄くなる。そしてかれが野心に富んで居たといふ點を想ひ起しては、その道徳家たる點の價値を感ずる事多く、政治家であつたといふ爲めに、その思想家であつたといふ點が軽く考へられるのである。尤も考へやうに依つては、哲學を以てこれを政治に應用して世を支配するといふ事は、必らずしも悲しむべき事ではないが、その教をよむ時にはその實際の方面並にその性行等が想ひ起されて幾分かその價を減じるやうにさせる。トラージアン帝(Emper.)はセネカがネロ帝の宰相であつた五年間を以てローマ帝國の尤も幸福な時代の一であつたと言つて居るが、そんな工合でセネカは實際自らを欺き、また人をも欺いて居る。ストアの美徳を説て自らはその規に従はず、徒らに言辭を弄して眞實を缺いて居る。が併しそれにも拘はらず、セネカはセネカである。文人である。思想家である。かれが一度美文に手を染めればそれは絶好の作をなす。而かもかれは屢々美文に手

を染めて居るのである。セネカと同時代で、また同學派に屬する人で、アウラス・ペルシウス・フラッカス(Aulus persius Flaccus)といふのがある。その思想の高遠なる點に於ては、オーガスチン時代の詩人の何人もこの若冠詩人に比肩すべきものはない。其詩は頗る晦澁で亂れたる蜘蛛の巢の如くであるが、また恰も嵐の空の雲の稲妻の光りに照らされた様な趣もある。併し晦澁であるに拘らず、二千年の今日その光はなほ明瞭で、その詩のうちにはペルシウスの姿が清らかに自負自重の態度をなして、ローマ帝國の血に染んだ歴史の背景を後にして、立つて居るのが明らかに見へるのである。

第六章

ラテン文學の白銀時代——トラージャン帝の風貌——權力の頂點に達せる
 ローマ——トラージャン帝時代に知られたる世界の概況——急速なる衰頹
 ——ギリシア及びローマ文學の末期——東方の首都なるアレキサンドリア
 ——アレキサンドリアの哲學者——アレキサンドリア學派と基督教の
 併行並に競争——更新せる異教の努力——ジュリアン帝第四世紀。

前章に記述した通りローマの理想は智的で、これが今やギリシア人の理想であつた形式なるものに代つたのである。そしてローマの文學は各ギリシア風から分離して行つた。それはこの時代に顯れた著作に於て見られる感情の強烈な力ある點に依つても知る事が出来る。このローマの特點の發達したといふ事が、即ちトラージャン帝の治世に於てローマの偉大になつたといふ事實と恰も一致して居るのである。

トラージャン帝は僅かに十四歳にして戦に出た位の人であるが、學者ではなかつた。併しその虚榮心から文學に注意し又それを獎勵した。かれは自らその演説の草案を作ることはしなかつたが、その判断は明晰で智力を備へ、充分深い政略に従つたものであつた。トラージャン帝の後繼者であるハドリアン帝の如きは屢々藝術のごとに餘計な干渉を試みたものであるが、トラージャン帝はそんなことはしなかつた。併し自分にも相應の趣味はあつたので、凡て智識上の事その他彫刻とか建築とかの藝術上の事に對してそれを常に示して居た。それで帝の治世にはそれ等の藝術や智的の事物が充分な發達を遂げて居る。トラージャン帝はその大建築をなすために建築者のアポロドラス (Apollodorus) といふ者を雇入れたが、後のハドリアンはこの人を殺してしまつた事である。

人の判断は様々である、また後世の古人に對する批評も色々であるが、批難を受けた君主はそれと共にまた大に長所を備へて居た人であることを忘れてはならぬ。特にその意味に於てトラージャン帝の如きは立派な人で人間の心意を自由ならしめた功績のある人である。それがために文學は多大な利益を得た、そして

人の心意が自由なる解放を得た爲め、これまでの抑壓に對し諷刺若くは復讐的の作物が多く出るやうになつた。

かくてローマは永き抑壓の眠りから覺め、その抑壓者である帝王に仇を報ひやうとして、先づこれまで曲筆を以て書かされた列代帝王の歴史を改訂し始め、タイベリアス帝からドミシアン帝に至る八十五年間に於ける諸帝王のもろくの罪惡を列擧した。この檢擧をまぬがれ得た帝王は一人もなく、みなその法庭に引き出されて判決を受けたのである。たとへばフアンニウス(C. Fannius)ネロ帝の犠牲は(Victims of Nero)といふ本を書いて居る。スエトニウス(Suetonius)は公平無私の態度をもつてタイベリアス、カリギュラ、ネロ(Tiberius, Caligula, Nero)諸帝の亂行暴政に對し痛烈なる攻撃をなし、ジュヴェナール(Juvenal)もまたその胸底にひそめて居た熱罵怒號をなして居る。これはかの輕薄な詩人マルシヤル(Martial)が極力諛辭を呈したドミシアンの暴戾に對しての發憤であつた。ジュヴェナールをして諷刺家たらしめ、王政の腐敗を暴戾の矯正者たらしめたのは實にこの公憤に依るのである。次にはタシタス(Tacitus)が出て、歴史の門に不滅の文字を印刻した。いまタシタスの

經歷を見るに、第一にヴェスパシアン帝の下に身を起し、テシタス帝に依つて重用ひられ、次でドミシアン帝に依つて宰相に次ぐ高地位にまで擧げられ、こゝに初めて當代の政治的・社会的並に文學的社會と接觸するを得、従つてそれ等の社會を描寫し得たのである。ドミシアン帝の治世の最後の三年には、恐怖すべき悲劇があつたが、かれはそれを目撃し、後に至つてもその事を憶ひ出しては戰慄して居た。それからドミシアン帝の死後、政治上の辯士たると共に自ら目撃した事件を世に知らせ、その事件に對し人々の良心を覺醒しやうと試みた。

タシタスに就ては格別珍らしい事もない。世間の定説通りかれは歴史家の模範で、深遠で巧妙で、正々堂々として而かも情あり、公平無私で而かも冷淡でなく、嚴然として熱情に驅られる事なく、哲學者で道徳家でもまた思索家である。これより以上何の言ふべき事があらうか。其肅然として且つ明確なるは、これに依つて事件の原因を分析せしむる事が出来、其勇氣に富んだ自由の念は筆を以て帝王の非行を叱咤せしむるに足り、又其判断の落付いて而かも強烈な力のある處は、かれをして幾世紀間賞讃を受けしめた一派の學派の基を開くを得せしめた。か

れの考は即ち一種の發見の如き價がある。かれは人間の思想の品位を高めたといふ點に於て凡て他の歴史家に勝つて居るのである(タシタスの公平無私といふことには疑を挿むものがある。それは獨逸の學派から出たのでなくして佛蘭西に起つたものである。第一にタシタスの誠實を疑つたものはヴォルテアで、かれはタシタスを目して機智を以て輝いて居る半狂人と云つて居る。十八世紀の佛蘭西學派の中で尤も學識ある思想家のラングエ(Lingner)はタイペリアスを擧げてタシタスを貶して居る。ナポレオンは勿論虐政家に反對したタシタスを好まなかつた筈ではあるが、かれを以て人道の破壊者と言つて居る獨逸の學派にもこの最大なる歴史家とされて居るタシタスの價値を疑ふものがないでもない——(タシタスの政治上の意見に就いてはモムゼンの説ボアシエ(Boissier)のタシタス論第三章を見よ。)

さて斯くの如く歴史と諷刺とが盛んに行はれたと共に、哲學もまた發達した。しかし帝國の初めにあたつては随分迫害を受け、ヴェスパシアン帝はヘルヴィデウス(Helvidius)を殺し、後にはまたティタス(Titus)を殺した。ドミシアン帝はローマから

大儒派の哲學者を逐つた。思ふに當時哲學は從來の如くに必要なるものでなくなつたのであらうか。當時は凱旋を祝する馬鹿さはぎの如きものを要したので、嚴肅なる哲學は輕んぜられたのであらう。然るに道德的概念はやうやく廣がり、フラビアン帝の時に至つては家族關係の念から、それが一段の進歩をなした。特にエバフロディタス(Epaphroditus)の開放のときから道德的觀念が著しく進んだ。エピクラテスは、乞食若くは奴隸でありながら哲學者であつたが、其考はセネカの人道主義に勝つて居た。エピクタテスは奴隸であつたと云ふ處から其著作は幾多の勞働者若くは奴隸の讀む處となつた。斯くの如く哲學的道德のやうやく廣がつて行つた際にディオニソストム(Dion Chrysostom)なる異教徒に對する傳導者であつた人が、其教即ちキリスト教を素朴な平民に傳へた。彼は甲の部から乙の部へと道を傳へ、ローマ、アゼンヌ、ローツ、エデプト、アジア等を遍歴してその教を廣めたのである。

エピクタテスとディオニソストムとブルターク此著名なる三人が一時にギリシア語を以て學派を異にして居るに拘はらず協力して、ネロ帝及びトレイジャ

ン帝の治世に教を傳へたといふことは、即ち哲學と威力との妥協を示す驚くべき象徴である。此三人の内プルターク (Plutarch) の事に就て一言しなければならぬが、プルタークはストア學派に對し好意を持つて居たに拘はらず、反對者であつて其學說の矛盾を指摘した人であるが、古の思想家の内では尤も近代的觀念に近い考を持つて居た人である (Stern) のプルタークに關する小篇參照。

二

この緊要な一時期はローマの政治道德史に於ける嚴肅なる休息期であつた。即ち當時ローマは其權力の頂點に達して居た、ギリシアの進歩文明を受け繼ぎ其利益を帝國の威力の下に服従したる諸國民族に分與した。今やローマの都にはアフリカ人あり、アジア人あり、ゴール人あり、セルマン人あり、恰もそれが宇宙を一都府の内に縮めたやうな有様であつた。

ローマは東西を結合した。スペイン、ブリタン、ゴール、ギリシア、エヂプト、アジア、シリア等はローマと運命をともにする様になり、最後まで抵抗したセミチック人も遂にその撃滅する處となつた。即ちカーセージとユダアとがそれであるが、ロー

マは斯くの如く、多數の國民をして好むも好まざるも共に一樣の言語を用ひ、一樣の法律に服従し、等しき宗教を尊奉する様に強いた。紀元第一世紀に於てストラポーンがすでに言つて居る。ビシニア人も、ミシア人も、フリジア人も、リディア人も (Bithyrians, Mysians, Phrygians, Lydians) みな自國語の事を全く忘れてしまい、エヂプト人はその碑銘の文字を読む事が出来なくなり、ゴール人はローマ化し、アフリカ人はラテン化した。第一世紀に於てすでに斯くの如くであれば、人々はローマが諸國民諸民族の中點であり、永遠の都もあると信じたのも、強ち無理のない事である。

これこそ歴史に前後比類のない盛な時代である。この盛大なる時期は紀元第二世紀までつづいた。その第二世紀といふのは、トレイジャン帝の活氣ある力を以て始まり、マーカス・オーレリアスの死後直ちに閉ぢられたので、凡そ平和や光榮の時期はすべて短いものである通り、この盛大なる時期も東の間の様に感じられるのである。吾人はローマ文學の古典時代は、トレイジャン帝の下に終りを告げて居ると考へる。その後は *Novae* や帝王にして哲學者なるマーカス・オーレリアス帝

やアントニヌス等が道徳上思索上の純潔を保ち、人々の思想を高くし想像力を鼓吹せんと力めたが効力はなかつた。マルカス・オレリアスはローマ帝の一人として同時に著名な哲學者であつて、通例心の平衡を得た立派な模範的人格とされて居る。併しかれも、かれの後繼者も、一般の騷亂を鎮め、文學上の思想を回復し、また帝國の崩解を止めることは出来なかつた。ローマの運命はその鼻祖である狼の子をして良く天下を統治せしむるやうに見えたが、終に永續する事は出来なかつた。マルカス・オレリアスはその心に於てはストイックで、覺醒した人であるが、外面は敬神的の風を持つて居り、ただ人世の空なる事の外、世間に於ける何物をも確實と見る事をしなかつた。かれが至善とか徳義とか名譽等の規矩を定めたのは人事盡く空であるといふ、その考から割り出されたのである。マルカス・オレリアスは又四海同胞とか社交的關係とか又それから來る義務とかに關する二三の論文を残して居る。が併しその行爲道徳は必らずしもその所説と一致しては居なかつた事を言はなければならぬ。そして近代の人がこの大帝を以て最も賢明な、最も高貴な、また最も有徳な人となすのは、必らずしも帝がそれほど

立派な人であつた爲めではなくて、やゝ他に勝れた處があるのが、時勢の一般に墮落して居るのに反映して立派に見へた爲めである。

ローマが斯く世界の大都會となり、宇宙を併呑する勢のあつたに付ては色々の反抗が自から起つて來た。東方の諸國やクリスチャンやその他の野蠻人が反抗した。ローマはこれ等を統一せんとして、却つて其種族の多いのに苦んだ。斯くて自から他の諸國民のねたみを受け、その間に自然崩解の糸口が出来るやうになつたのである。

三

野蠻人の國境を超えて侵入する遙か以前に於てローマはすでに屢その征服した諸民族の影響を受けて居た。第一に尤もローマに影響を與へたのはギリシアであるが、それは別としてこれに次ではアレキサンドリアに集中して居た東方の勢力が最も有力であつた。アレキサンドリアの勢力と云へば其一半はギリシアから來て居るが、その勢力なるものは實は更にエヂプトを通じて印度に其起原を求むべきものである。アレキサンドリアは二つの海と二つの大陸との間に

頗る形勝の地を占めて居るので交通の中心となり、従つてまた各種思想の中心となつた。それ故この都がアジア及び歐洲兩大陸の信仰並に哲學を育成する床となり、哲學的思想はこゝに廣くなると共に深くなつた。ローマはギリシアの各種の思想を繼承したが、何れもその發達を見る事は出来なかつた。其間に信仰は失はれ、人心は腐敗し、感情は涸渇し、一班懷疑の内に陥つてしまつたが、其處で人心は自からその哲學に向ひ、こゝに其慰藉を求め、やうになつたのである。そしてその哲學はアレキサンドリアに尤も良く發達したのである。前章ローマに於て哲學思想の發達を述べたが、それも此氣運に關係があるのであるが、それは充分なる効果を收むる能はず、その結局は終に以下に述べるやうな新哲學を起すに至つたのである。

幾多の聖賢はその教の極致として最高なる一個の存在者を假定するやうになつた。アレキサンドリアの學派は即ち此最高の存在物即ち一神といふ考を捕へ、その考を發達せしめ、助長せしめて、後來幾世紀間も續く澤山の教義をつくり上げた。この一神の教義は東方の神秘的思想とギリシア思想の極めて漠然とした

概念とを結合したやうなものである。此東西同一の傾向に依り文化歴史及び道徳などは古の學風をすて、こゝに全く基督教的の特色を帯び、凡てのものを一に歸せしめるやうになつて來たのである。

第 六 章 (115)

言ふまでもなく在來のアレキサンドリアの思想は舊思想の代表であるので、その新しい時代に於て掃蕩され打仆されるのを恐れたのであるから、その最も強い要素、即ちギリシア思想に固着して居た。然るにこゝにギリシアの思想に反對なる他の勢力が起り、破竹の勢を以て發展して來た。これは即ちパレスティンから起つた道徳的革新の教義である。所謂前驅者と呼ばれた洗禮のヨハネなるものが此革新の聲を上げてユダヤ人に教へ始めた。次でナザレのイエスなる人が自分は一人の婦人と聖靈の力で生れたと稱し、また自ら平和の勝利者であり弱者貧者の友であると宣言し、且つ此教義の證明者となつた。凡そ偉大なる宗教的運動には必ず世の騷亂が伴ふものであるが、この時にもそれがあつた。然るに此新らしい宗教は其主張する處に依ると地に平和を來たすものであるといふ。そして凡て人間の信仰に深い根柢を得んと欲するものは、みなさうするのである。

が偉大にしてまた立派なる希望を語つて居た靈魂不滅の概念の如きは、舊約書中箴言の如きものに依つてユダア教の内すでに説かれて居たのであるが、今やわれ等は何の爲に徳を行ふべきやと言ふものに對し、この新しい宗教は明らかかなその答を與へた。即ち救世主が降臨するといふ教(メシヤの教)直截に言へば新らしく起つたエスの教の言ふところに依るとこの世で徳を行つてなほ不幸に沈み、その窮乏を訴ふることの出来ぬ場合には、天が其償ひをしてくれるといふのである。これ即ち靈魂不滅をいよく明かにした教へである。舊約書にはたとへばイナク (Enoch) の書の如き痛痕を語つて居るものもあるが、新らしき教キリスト教にてはこれが福音書の限りなき希望の書と代へられて居る。神の王國を永久にわがものとする事、主人も奴隸も強者も弱者も富者も貧者も公平に取り扱はれるといふ事、並に無限の幸福の豫期される事、これ等の事は新らしい宗教の説いた處であるが、これ等はみな人の心を動かさし、人をしてこれを憧憬せしむるに足るものである。殊に人智の未だ進まずして神祕の事がなく、未來の事がなくては何事も信じられない時代の人々の心を惹くには、斯くの如き思想が

最も適當して居たのである。斯くの如く東方の兩勢力、即ち一方アレキサンドリアに依つて代表せられる哲學的一神主義と、ユダアに依つて代表せられる一神教なる宗教とが、一致してローマ帝國の精神上の進歩を助ける事になつた。

ユダアといふ國はアジアとアフリカとの間に、紅海とヘルシア灣とにはさまれた大きな半島の中心にあつて、タイヤとかサイドン(聖書中にはツロ、シドンとなつて居る)といふ都並に、フィリスチア及びサマリアを通じて地中海に接觸するのみならず、各方面の文明とも直接することの出来る地位にある。即ち印度の文明とはカルデアに依り、エジプトの文明とはアラビアの荒地とフェニシアとに依り、歐洲の文明とは地中海に依り、小亞細亞の文明とはシリヤの方面より相接する事が出来るので、アレキサンドリアとともに、ユダアは頗る形勝の地位にあつた。それ故かの新宗教の傳へる救世主が來て大王國を建立するといふ觀念を諸方に傳播し、且つ其効果を收むるには尤も好地位に居たのである。

此時までユダア思想とギリシア、ラテン交錯の思想界とは二個の別種な社會であつて相對立した反對の二勢力であつた。然るに此二つが今此大時期なるロー

マ帝國の回機點で會合し、爾來相互に深大なる影響を與へ合ふ事になつた。さて先づローマの地にこの新しい宗教の種を下したのはユダア人であつた。新宗教の教祖がヤンが死するや間もなく人々はその説教を集め、アラメイック(Aramaic)語でそれを書き且つその驚くべき行跡を記述した。この教祖ヤンの一代記は當初の門弟の言に依つて成り、後にはマシュー、マーク、ジョン(聖書にはマタイ、マカ、ルカ、ヨハネといふ)等に依り所謂福音書といふものになつて居る。これは即ちヤンの思想や、教義を世界に布引せしむるため、適當な言語を以て説き示したものである。今日の文明國中最近百年間に於ける聖書に關する歴史的、批評的の事業を知らぬものは只獨りロシアあるのみで、これは全く言論拘束の御蔭である。それであるからロシアは今でもマタイ、マカ、ルカの福音書は、初めから今日見る如く個々別々に作られ、且つ全體としては所謂上記の記者に依つて書かれたものと確信して居るとはトルストイの言葉である。

かくは言ふものゝこれ等福音書の中にある記事には、其始めに當つては時日の一致を欠いて居たといふのは、彼等福音の宣傳者の間にはその考が不確實で色

々な意見の異同があつたためである。なほ委しく言へばヤンの弟子等も昔から傳へられた救世主の全くの精神的なものである事を了解して居なかつた爲めである。バイブルに傳つて居る説に依つても亦それを説明するものも、救世主なるものを以てこの現實の世の救主であるとなし、列國を征服し、終にはユダア人の制縛を解いて自由にしてくれる人である。と左う解して居たのである。従つて初代のヤン教會の組織を見るに、その主宰はヤンの兄弟ジエームス(ヤコブ)であつて、その形もユダア教の會堂を擬したもので、またヤコブの後繼者としてエルサレムの監督となつたものはシメオン、ジュスタス、サツケウス、トピウス、ジョン、レヴィ、エフ、レーム、ヨセフ、ユダ(Simeon, Justus, Zachaeus, Tobias, John, Levi, Ephraim, Joseph, Judah)等であつて、その名が即ち明らかにイスラエル(すなはちユダア)の十二族を想ひ起させるものであつた。儀式や信仰はともに簡單なもので、神學上の想像説などはまた加はらず、その複雑な色々な所説を以て亂される様な事はなかつた。そして當時のこの新宗教の象徴即ち儀式はヤン自身の告白とヤンの洗禮に依つて聖められる事とこの二つに過ぎなかつた。しかし永く斯かる簡單な事で續いて

は行かなかつた。先づエビオナイト派 (Ephonites) と純正派との争があり、更に改宗したヘブリー人 (即ちユダア人) に對する舊信仰を維持して居たユダア人の壓迫があり、またヤンの弟子の間に競争が起つた。この競争は信徒の増加し各邦國に擴がるに従つて強大になつたものであるが、これ等の關係から初代ユダア的キリスト教の事業は停止した。東方のマジ教 (ヘルシアの宗教) にその根柢を置いた^{ノスチック} 智的キリスト教が其代に盛んになつて來た。吾人はアレキサンドリアのフィロの説に於てこのノスチック教の跡を認める事が出来る。フィロは凡てユダアの傳説を固守して居たと共に、プレトール學者であり、またストア派逍遙學派でもあつた。かれは斯くの如く廣く相反對した學説を一身に綜合して、それをうまくモーゼスの書いた舊約書並にイスラエルの話説を一致させたのである。即ちかれは當時東方に活動して居た運動の代表者であり、また當代宗教の代表者であつた。併しながらの數多の宗派の源となり、幾多の争論を惹起し、シリア及びエヂプトの初代の教會の中心に無用な争論を澤山に起さした。この^{ノスチック} 智的キリスト教の發達は、シモン・マガス (Simon Magus) の紀元第一世紀に於けるその弟子並にメナンドル、

コリンヌ、デシシユース (Menander, Colinh, Desiheus) 等の前には求められなかつたといふ事を言はなければならぬ (第二世紀に至つてはヘルシアに純粹なマジ教が再現した爲め、この^{ノスチック} 智的キリスト教はその進歩をさぶめられた)。しかし何れにしてもエスキリストに依つて示されつづいてセント・パウロに依つて傳へられた一神教で、その改宗者が神の選民であるといふことを、初めは一地方に後には世界の諸方に傳播した。パウロといふ人は頑固なユダア人であつたが、一朝新宗教の感化を受けてからは、たちまち其熱心な宣傳者となり、みづから異教徒に對する傳教者であると信じ、異郷の民の救済を思ひ立つてユダアの地から海路をギリシアの地に向つた。そしてフィリッピ、アムフィポリス、セサロニカ、アゼンス、コリンヌ (Philippi, Amphipolis, Thessalonica, Athens, Corinth) を順歴し、所謂ギリシアの塑形美術には目もむけず、美術の大作などは一言のもとに偶像として罵り去つて、現世こそは快樂の賤しむべき事を説き、未來の天國に於ける幸福と比べればこの世の事は顧みるに足らずと主張し、貧しきもの苦めるもの等に對しては、神の王國の來らんとして居る事、また人々は此王國を待ち望んで居る事を教へて慰を與へた。

これは恰も適當な時であつた。ギリシア思想は其根柢に於て動いて自から滅亡せんとして居た時であつた。何となく疑念が人々の心にあつて、その疑念が特に現在に不滿な何物をか求めんとして居た人の心を衝いた。此時パウロの教が宣傳されたのであるから、ギリシアの神座のオリムパスは震動した。パキソス(Paxos)は不可思議の聲をあげて、やがて大パンの神は死せりと絶叫した。多神教は腐敗と懷疑と魔術との中に死にかゝつて居た。さらにローマの方を見るにケトリーの時代には知られて居なかつた幾多の神々がローマに侵入して来て、在來のギリシャ・ラテン神話を浸してしまつた。マールカス・オーレリアスが異つた教を以てローマを滿たしたといふものも此時のことである。アールカス・オーレリアス自からは懷疑的で、それ等異つた教をして勝手に人の心を支配させた。オーレリアスの後繼者に至つても、彼等は凡ての教を包括せんとする主義は執らなかつたが、なほ信仰に至つては益々複雑に亂れて行つた。

思想界に於ては詩的な心並に創意的な力も其倦怠を除去し終る事は出来なかつた。凡て人々の心には宗教上の事に何か變化の來らんとする感があつた。この

向上の念は近頃に起つたものではない。またその向上の念があつた爲めにキリスト教が成功したといふ譯ではない。キリスト教の成功には他に政治上並に社會上の深い原因があつたのである。それはざつと次のやうな次第である。

ローマ帝國の威嚴の薄弱になり、諸國民並に個人の墮落と共にローマの衰亡は速かに來らんとして居た。愛國の念、市民たるの感並に家族の關係及び宗教等は不正な壓抑と無殘な壓制の爲めにその跡をなくなして行つた。これが爲めに人の希望も打ち壞されてしまつた。今や人々の樂しみ得る唯一の自由は只夢の世界にある計りであつた。世間にはこれを統一し秩序を立つべき約束がなかつたので、人々は倦厭の念を起し、その結果この世を侮蔑して居た。即ち人々の幸福は只漠然たる超自然の世界を夢想するのみであつた。此時テレーヌの言葉を籍りて言へば東方から不思議な人を醉せる様な風が吹いて來た。ペルシア、インド、エチオピア等からこの刺激物が疫病の様にやつて來た。奇蹟とか奇術とかいふ話は凡ての人の口の端に上つた。この頃になつてまた預言者がユダヤに再現した。シモン・マガス及びトシシユースの後繼者が出る。異端のキリストといふ名

を得たチアナの奇術者アポロニウス(Apollonius)は死者を生かすといふ評判があつて、人々のよく記憶する處であつた異教徒の間には此アポロニウスをエスキリストに對して兩教祖とするものもある。殊に婦人は東方の迷信を喜んで信じた。婦人は神秘的な事並に外形の榮爛たる光景を熱望するもので、シリアのイシス(Isis)を以て凡ての潔めを與へる神となし、またこれを祭壇上の神となし、かれ等の信仰心を披瀝する象徴とし對象となしたのである。

キリスト教はその成立するや否や直ちに宗派が分裂した。一寸は了解し難い様な些細な意味の一點やら、思想の影の様なことに關して無限の争を起して居る。ノスタックやヴァレンチニアンやオフナイトやエッセネや、カルボクラシアン等(Valentinians, Ophites, Essenes, Carpocratians)等の各派はその夢幻的な不思議な觀念を互に交へて居た。第三世紀に於ける一辨證家のヒッポリタスは(Hippolytus)ローマ曆の聖ヒッポリタスの事は三十四種以上の異端を排撃して居る。その數の多いこと、實に驚嘆に値ひするではないか。

斯かる状態でローマの帝國の當時に於ては、古の禮拜の遺物である天然崇拜神

秘思想深遠な汎神教、聖書の本文、アポクリフの福音(耶蘇教經典中新舊約書に次ぐべきもの)哲學者の獨斷象徴の解釋、星辰に對する空想、これ等のことは互に交はりまた離れ、混沌たる騷亂のうちに入り亂れ、神性も野生も、物質も靈も超自然も自然も、明暗のうちに挿きまはされて居たのであつた(Schulze, Geschichte des Untergangs des Griechisch-römischen Heidentums; Gaston Boissier, Fin du Paganisme 2 vols 參照)。

四

今や勢力を失はんとして居る多神教は専心に學者の説に依つて其存在を維持しやうと試みた。併し昔の神々の面影を現出する事は到底出來ない。オリムプスの神託は最早其聲を潜めて居る。ギリシア思想晩年の詩人ルシアンは其性格に於ても思想に於ても恰もヴァルテアに似て居るが、この詩人が多神教を嘲弄の内に沈めてしまつた。

斯かる折に際してアレキサンドリアの學者は其求めて居た神と外形即ち實在界とを一致せしめ、想像力を以て生み出した様な思ひ切つた前提からその(神と實在界との)一致に關する學説を打ち立てた。その間に詭辨學派も奇蹟を行つ

た。即ちかれ等のやつた古來の爭論が言語の上で再び行はれるやうになつた。アゼンス當時でも文學藝術の都と呼ばれる事を欲して居たので、その昔の名聲はなくすまいと思つてヨーロッパアジアの若い篤學の士を引きよせ、またこれ等の若い人達は學問と眞理との驚くべき事を求めてこの都に集まり、議論を以て都を満たした。さらにアレキサンドリアを見るに、その學派の三部合體の説は(Triad)はキリスト教の三位一體説に近似し、ホルフリーヤムブリカス(Porphiry Yamblichus)の所謂一神なるものは、キリスト教の一天普遍の神に似通ひ、神話説の説明は聖書の默示に似て居た(ホルフリー等の神祕説はあまりに極端に走り、その弟子の手に渡つてからは殆ど無稽の説のやうになつてしまつた。そしてこれ等大哲學者の説は全く解らなくなり、只魔法や秘術を教へるやうなものとなつてしまつた)。

斯かる有様であつたからキリスト教會は異教徒の寺と並んで立ち、後年には互に反對すべき宗教の門徒等が互に熱心に同じ様な教を説て一致して居た。廣く且つ清い信仰を以て居たブレト一派の最後の學者はアカデミーの庭でキリス

トの弟子と會合した。キリスト教徒はヤソの教を傳播する事に熱心して色々な方法をとり、最後には王公の威力をかりるまでに漕ぎ着けた。即ちコンスタンチン帝の政略なるものに依つた事である。斯くてキリスト教は國教として其位置を安全にする事が出来た(Burkhardtの Die Zeit Constantinus 参照)。

五

それから數年経つてバシル(Basil)とナシアンゼン(Nazianzen)のグレゴリー(Gregory)がアゼンスの學校でローマ先帝の兄弟ジュリアン(ジュリアンがまだ帝位に即かない時のことである)に會つた。この二人は世間の所謂學問なるものに精通し、それをキリスト教の爲めに利用したといふので全ギリシアに亙つて有名になつた人達である。ジュリアンはまだガラス(Gallus)なるものと共にその一家の虐殺を逃れてアゼンスに來たのであるが、王公の位にありながら哲學者でまた兼て神學者であつた。そして洗禮といふ象徴の下にその愛好するギリシア思想(ヘレニズム)を鼓吹しやうといふ希望を抱いて居た。將にニコメディアに於ける殉教者の墳墓に詣でんとし、またセザリアの教會に於て人民の前に福音書を読み上

げんとした時、先づ神々を祭る神殿の火を再び燃し、犠牲からけむりを立てさせ、そのけむりを以て空気を清淨にしやうと試みた。一方はヤソ教的であり、一面はギリシア思想を慕つて居たことを示す。これに依つてもジュリアンの心の内にはキリスト教の形の奥にギリシア思想が根ざして居たと考へなければならぬ。素よりジュリアンはヒメリオスやリバナオス(Himerios, Libanios)の修辭を以て空音と外聞かず、マキシム(Maxim)の巫術もその理性を満足させる事は出来なかつた。さりごとてポルフィリー派の純理もあまりに乾燥しまた甚だ複雑に過ぎて居り、ヤソの教と雖其意には満たなかつた。ヤソの道德觀の極めて融通の利かぬのが彼の好まぬ處であつたのである。その嚴格に過ぎる處がかれの勇氣を沮喪せしめ、想像力を凍らすからである。それでかれは叫んだ。人生と光明と幸福とに榮えを歸する歌なれかしと。

願みればギリシアの神々の最後まであつた御堂の柱は倒れてその柱名のみとなり、破壊は秩序を立て、働らきアフロディテやディアナ其他ギリシアの男女の神々の美しい立像はなげ仆された。ジュリアンは内心これを怨んだ。かれ思へらく

遠からずして大理石の一片も日光に浴するものはなきに至るならん。此時にはキリスト教と修辭學者並にギリシアの哲學者の深い學識に依つて復活されたギリシア思想との争、即ち古の美の教と近代的象徴主義の教との争は盛んになつて來た。この際に當つてジュリアンの思想は、かれとこれとの間に躊躇して、不定の有様であつた。丁度活動の生活を取るべきか、靜思の生活を選ぶべきかに迷つたやうであつたが、併しかれは終に哲學者の側に定め、ギリシア思想を選んで其方に心血を濺ぎ始めた。

ジュリアンはその青年の時を桑門の衣の下に過したが、願望は到底その内に禁壓されて黙しては居なかつた。そのギリシアの藝術に對する熱情はほとぼさる流れのやうであつた。やがてかれはローマに戻つて帝位に即き世界の領主になつた。即ち今やその假面を脱去する時が來た。今までキリスト教主義の制裁の下に居たかれは猛然としてその本領をあらはし、哲學的道理の名を以て、また人性の自然といふ名を以て、キリスト教に對し復讐を始め、これと呼んで中途半端な情緒と稱した。そしてローマ帝國の諸市にはこれを論議する講座を設けた。かれは

神々に對する祭壇をも立て、形式及び五感に觸れる物の美を崇め、又純美の禮拜といふ事を定め、それを帝國最高の國法とした吾人は死せる木石金屬に禮拜するにあらず、全き人間美のモデルにある生きたる美の精靈を崇むるのみとジュリアンは言つて居る。ドミトリ・メレジコフスキー (Dmitry Merejковский) の神々の死 (Death of Gods) 第十二章參照]

或る文學者の説に依るとジュリアンは一旦帝位に即くや、狂へる獅子の如く己をキリスト教に結びたる制縛を破つたといふ。ある程度までは公平寛容に對する自分の理想をさへ打すて、すでに時代後れとなつたキリスト教に對する迫害にも遠い程の事を演じ、キリスト教徒の公務に干與するを禁じ、並に學校に入ることをさへ禁じ、智的道德的の壓制を試みた。ジュリアンはまた自から筆を執つた。そのギリシア文は頗る醉なるもので、今日殘つて居るものゝ内には第一 *Miso-Poizon* 即ち *Enemy of the Beard* といふのがある。——これはアンチオークの住民に對して與へた諷刺である。——また *Cæsars* 即ち *Banquet* ——これはローマ諸帝の善徳悪行及び弱點を書いたもの。——といふのがある。何れも光彩陸離優美にし

てクラシックの趣味に富める立派な文字である。併しながらジュリアンの斯くの如き行動に依つてもギリシアやラテンに於けるキリスト教の教師は動かされなかつた。教會もまた自からを守つて決して人心を指導することを怠らなかつた。暴風雨に向つて立つては堅固なる協同團體が必要であつた。凡てのものが仆れ破れてしまつても、なほ且つその戰に打勝つて行くには益、團體を固くする必要がある。當時のキリスト教會は丁度さういふ團體で、恰もかゝる戰に於て勝利を博し得るほどに堅固なものとなつて居たのである。

併しながらかゝる勝利を博する爲めには外形を莊麗にし、燦爛たる宗教上の儀式をいれてその力をかりた。宗教上の主張を貫徹する爲めには儀式や典例の有方なるをさとり、こゝに教會は異教徒の儀式や典例をやゝ形をかへて採用し、其教義の素朴にして峻烈であつた處に色彩を施した。古の犠牲のけむりと同しく香のけむりが古のとは異つてヤソの姿の前に立ちのぼつた。燈明も上げられ音楽も響き、嚴肅な式も出來、或は視官に訴へ或は聽官に訴へ以て純粹な觀念即ち

一種の象徴であるヤソの教を説明した。勿論偶像と宗教とは兩立すべからざるものであると言つたものもあつた。これは頗る至當な意見であつたが何人もこれに耳をかすものはなかつた。無形の神様を形にあらはすこのキリスト教の新しい併しながら矛盾したやり方は單純なる人の心に受けられ、これに依つて自から宗教の奥義に入る戸が開かれる事になつたのである。

キリスト教のかく異教的の色彩を採つた事は一面に偶像の儀式や祭典に依つて、その教の奥義を人々の目に明かにしたと共に、また一面には人心を收攬する特種の方法を得るといふ結果になつた。特種の方法とは即ち婦人の事である。ヤソの新宗教は其起りの劈頭から婦人の動きやすく燃えやすい想像力をその手の中に收め、同時にその精神と感謝の念とを博し得た。舊世界の法律を改め萬物の道理を明らかにし、人間の情緒を清らかにした。此教は、それ等の事から婦人に對してもその勢力その働きを廣くなし得るやうにその世界を擴張してやつた。先づ第一に婦人はクラシックの文人に依つては輕蔑され嘲罵せられ、また絶えず攻撃されて居たのであるが、新宗教はかゝる状態から婦人を助け出した。詩人も哲

學者も識者も殆ど異口同音に婦人をもつて罪惡に陥りやすい真正の情愛のない、惡事をなす才のある下等なものと認定して居た。然るに新宗教の師父などは乙女マリヤの姿を理想化し、これに依つて女性といふものに威嚴を與へた。かれ等は人間の精神上に於ける蘇生といふ事には婦人の力が偉大であると云つて婦人の高尚なる天命を認め、斯くて婦人の働きは生活若くはその他自然の必要に依つて制限せられなくなり、極めて神聖なものとされた。

斯くの如くして此新宗教のこの觀念は四方にひろがり、天下に普遍し、且つ萬能の力をもつやうになつた。さてこんな状態で、これからそれが一轉して禁慾主義僧侶生活主義並びに貞操を貴ぶ時代に入るのである。

六

文學的見地から言へば、温情と生命とはキリスト教徒の中に集中してしまつて、この教以外の語る處はたゞ意味なく空しき音聲を聞くに過ぎなくなつた。當時の修辭學者であり、尤も幸運に生れ、また尤も宮廷で愛された詩人であつたアウソニウス (Ausonius) また有名なその競争者なるクラウディウス・クラウディアナス

(Claudius Claudianus)などは死せる文學を復興せしめんと欲したが、効力はなかつた。古代の文學は最早死灰となつて、再び生命を得る事は出来なかつたのである。然らば何故に生命を回復する事は出来なかつたか。所謂藝術の爲めの藝術なる古文學の教、即ち單に形式の光輝を重んずる教は何故に充分強大な源泉を當時の人に供給しなかつたのであらうか。

詩は當時最早なくなつてしまつた。勿論アムブロースやブルーデンシウス(Ambrose Prudentius)の宗教上の讚美の歌の内には、創意的な純粹な詩の分子があつた事を拒むのではない。ブルーデンシウス、くはしく言へばアウレリアス・ブルデンシウス・クレメント(Aurelius Prudentius Clement)は第四世紀に居たスペイン人で、當代の缺點を熟知し自分の才氣を以てその缺點を贖つた。即ちかれはその性優美なると共に嚴肅で、その感情は温く、その想像は自から湧き出て、恰も地から永久の美の世界に立ちのぼるやうであつた(要するにこの人の詩情は當代の缺點を贖ふものであるといふのである)。併しながら事實の上の詩は只新舊兩思想の互に鏘をけつたその光景に於て見るべきである。この兩派の一つは凡て過去の權

力と勢力とを包容し、他は其内に狂瀾の起るべき將來を包藏して居るものであつた。そして後者は孤立獨力で、政事家の檢束と戦ひ、若くは學者の詭辯と争ひ、或はシムマカス(Symmachus)の如き愛國説に對し抑、また多數民人の嫌惡に對し戦をなして而かも勝利を得んとして居たのである。シムマカスといふのは非キリスト教的ローマの最後の辯士で、兩帝國に於ける多神教の辯護者であつた。その辯舌は華かにしてまた學殖があり、今でも人々の賞讃する處であるが、その雄辯を以てグレシアン帝并にウァレンチニアン二世の面前に古の神々の爲めに辨じたことがある。この人に對する重なる敵手はミランの監督聖アムブロース(Saint Ambrose)で、此人にはシムマカスも敗をとつたのである。

この時から下つてアサネシアス(Athanasius)からオーガスチン(Augustine)に至るまでは教會の内に勝利を博し、世を改宗させやうといふ非常な苦心があつた事と察しられる。ローマの帝國はやうやく衰亡に傾いて、其滅落のなかに孤立し凡て周圍のものゝ衰へると反對に教會丈けは益々その勢を得て行つたのである。教會の勇士は將に死なんとして居る古の思想に對しなほ戦をつづけ、同時にその

内部に於てなほ勢力を有し熱心に力めて居た異端とも苦戦した。それで彼等の教會は四方に散在して居たが絶えず文書を交換してその消息を聴合ひ互にその思想を交えて居た。アムブロシウス、ジローム、オーガスタチン、クリソストム、シネシウス (Ambrose, Jerome, Augustine, Chrysostom, Synesius) などの高僧達は書簡に依り若くは論文を草して、其新説或は教義を遠近に傳へた。また彼等の間には此文通に依つて親しき交友が保たれて居た。歴史家は澤山の想像を添へて此時の光景を面白く寫して居る。オーガスタチンやパウリナスやセヴェルスやデルフィナス、アマンダム (Augustine, Paulinus, Severus, Delphinus, Amandus) 等が清き心を以てそれ等の如き敬神の心を語り合ひ、又一方には深く禪定に入り、同時に學問を研究し、互に休息の時を快く過した。それ等の事は當代を寫した歴史家に依つて見るが如くに面白く書き出されて居る。

第七章

藝術の衰運表面上停止の姿をなす——野蠻人の侵入に依り藝術の衰運急進す——多少の殘破——第五世紀より第八世紀に亘る歐洲人の道德的及び社交的狀態——ドイツ人并にスカンデナヴィア人の傳説及び俗語——エッセの起源——古典的舊思想の殘墨——東帝國に於ける文學的努力の實際の休止。

古代に關する智識から來た結果を收めて文藝は一時一般に復興した觀を呈したが、それは主として初代のキリスト教會が與へた刺激から起つたものとすべきである。その復興の劈頭に立つて尤も著しいものはゴールである。立派な文章を殘したといふ點に於てはゴールの一州アギタイン (Aquitaine) 丈でもギリシア、ローマと匹敵する位であつた。このアギタインに勝つて學校の榮えた處は他になかつた。アウソニウス (Ausonius) は其詩の内に著名の大家三十人の名を擧げて居る。その内にはアウソニウスも入つて居るが、その人達はみな秀れた人でポルト

1.の學校に於ける講座を持つて居たのである。されど文藝の衰運は極めて急激に進んで來るが、こゝである程度まで喰ひ止められたやうであつた。これまで一般に知られなかつた思想若くは感情が中流社會に引き渡り、それと共に復活の液を四方に擴げる事になつた。然るに忽ちにして恐ろしい災難がローマの文明の上に降りかかり、一聲の下に此種の新氣運を打壊し萬事を昔の野蠻時代の状態に投げ込んでしまつた。その災難といふのは斯ういふことである。抑、ローマ人は、勝利を渴望して四方に遠征したが、その結果今や東の方はユーフラテスから西北の方はライン河並に大西洋に至るまで廣がつたので自から驕慢の心を生じ、ローマの知つて居る限りの世界は其勝利の名聲を以て鳴り響いて居ると考へた。それは尤な事であるが焉んぞ知らん、アジアの遠き端の方には、またローマの光榮の反響をすら耳にしなかつた處があつて、而かもそれが非常に廣大な土地を持つて居る。また北方には流浪の民若くはそれに類似した民が大群をなしてローマに迫つて居た。其數とか住所とかに就ては、ローマ人は全然無智であつたのである。然るに今やこ

れ等北方の人種の道の開ける日が來た。スキシア人、ドイツ人、ハンズ人 (Germans, Huns) 等は群をなしてローマ帝國の方へ推し寄せて來たのである。これ等の人種は森林の内に假りの宿りをして住んで居たものであるが、それがその永住の地から顯れ出て、全世界から掠奪して來た寶を以て滿されて居るラテン民族即ちローマ帝國中心の都會に侵入して來たのである。かれ等は文化の初步に居た民で、僅かに生活上の必要物をのみ知つて居た位なのであるが、今や一朝此世界の寶庫の中に顯はれたので、手當り次第に此贅澤品をつかみ取り、その蓄へられた富を奪ふ事をした。實際ローマの諸都はこれ等ゴス人、ブルガン人、フランク人 (Goths, Burgundians, Franks) に取つては如何にも絶好な掠奪すべきものを收めた寶庫であつたのである。ローマ人はまた七百年間も自由と光榮とを樂んでその人民を懦弱にしてしまつた爲め、斯かる野蠻人の侵入に對してもこれを一撃するの力を失つて居た。即ちローマは其中心に於て色々の原因から弱められ、道徳上政治上の衰滅に瀕すると共に、外部に於てはこれ等の野蠻人に侵入され、將さに其防禦に苦んで

居たのである。爲めに今まで其手中に術つて居た文化の寶玉は、其斯くの如く弱つた手から落ちんとして居た。

其處に上記の野蠻人の來襲が暴風雨のやうにやつて來たのであるが、その暴風雨の一過した後で帝國の有様如何と見ると、その政治的・道德的状態の破滅はその極に達して居るのであつた。今やベルマン人は主權者として、ゴール、イタリア、スペインを横行した。澤山の異邦人は土着の人民と交り、劍の力をかりて、その敗者なるラテンの民の家に自分等の習慣とか、信仰とか若くは傳説とかいふものを強ひて採用させた。至る處ローマの主長はゴス人若くはベルマン人の首領と代り、後者が判官としても、ローマの行政長官の座つた席を奪つたのである。

西ローマ帝國は斯くの如くして壊崩してしまつたのであるが、東帝國も同様の打撃の爲めにその基礎を弱められ、その根蒂がゆるんで來て、次期の侵掠者の犠牲になるやうになつて居た。即ちゲンセリックの下に率ひられたヴァンダル人、シロクロイスの下に居たベルンシア人並にマホメットの下に指導されたアラビア人の侵す處となつたのである。

二

斯くの如くローマ帝國の跡に色々の人種が入り亂れたが、さて色々の變化があり、勢力の消長もあつて後結局シャイレマン帝の大手腕に依つてそれが統一され、ベルマン帝國といふものが成立する事になつた。この野蠻人の侵入の流れはローマ帝國の藝術や諸制度の遺物をさらに破壊させたが、それにも抱はらずその破片がなほ残つた。併しその残つたものはたゞ、其破壊力の如何に強かつたかを示すものとなつた位である。神の都—City of God—の著者オーガスチンはかのアラリックのローマを蹂躪したるを以て天の罰だと言つたが、この蹂躪が即ち破壊力がこれほど恐ろしいものであるとは夢にも思はなかつたことであらう。併し又兎も角もこれ等諸制度・藝術の破片は大事なものである。之に依つて幸にも傳説は盡く失はれることを免れた。かくて古代の文明並にキリスト教の文化の遺物が野蠻の事物と混和し、それが後年の文化の肥料となり、徐々に新しいものを出すやうになつた次第である。

評家の言に依れば文學史にも亦政治史の如く白紙の箇處があるとか、豊富の時

代の後には貧弱の世が来る。文學は此時代に至るまで連綿と續いて來た。その時日は随分長いものである。併し今やまた永い乾燥した時代に入つた。その長時期の間に於ては只折々遠い間隔を取つては一二の名作に遭遇するのみである。何もそれとても以前の時代に於ける作中の最も劣つたものと比べてなほそれと比肩する事も出来ない位なものである。併し人間の天性は決して全く眠つてしまふ事は出来ない。ラテン民族の暗黒時代に於ける徑路を精しく調べた學者の説に依ると此乾燥した暗黒の時代にも天才ある詩人の一世紀と續いて出なかつた例はなかつたといふ。その上此説は所謂文學に顯はれた技巧上の詩に就て言つたのであらうが、さらにそれよりも深いさらに秘密の泉即ち民謡の抒情詩があつた事を吾人は忘れてはならぬ。その抒情詩の起源はあらまじ次のやうなものである。

ローマ帝國の瓦壞に次でそれに代らんとして集つた民族の多くは、みなそれらの國民が有する傳説を伴つて持つて來た。その内のハンス人、フランス人、ワングル人の如きは野蠻極まつたもので、何等文化の跡を持つて居なかつた。しかし

何れも互に其過去に於ては黄金時代を持つて、た事を誇り、その詩歌に依つて祖先の勇敢な行爲を賞讃したものである。かれ等はみな斯くの如くその野蠻力を發揮して喜んで居た。戰場に於ける荒武者とその戦後の祝宴とを誇りとして居た。従つてそれから一步を進めてそれ等戰士の辭かにやすむべき現實の樂園があるといふ希望をさへ現はして居た。たとへばスカンディナヴィヤ人は其古いルーンと稱する文字の歌のあるのを誇つて居る。スカンディナヴィヤにはスカルド(Skald)といふ行吟歌人が居た。王公の饗宴にあづかりまた勇士から賞讃されて居たものであるが、これが神話的な歌を謠ふ例へば優美なフレイヤ(Freyja)や學識あるヴァル(Vale)とかまた勇猛なるオデン(Odin)の行跡をのべたりそれを賞揚したりする(これは神話中の神々の名である)かれ等歌人はまた普通の人民にその古の神話(即ちこのオデンの話のやうなもの)を歌つて聞かした。この神話のうちにあるもの語りはかのスキシア人の想像力を刺激しまた十一世紀から十三世紀にわたる間に於て有名なエッダス(Eddas)といふ詩となつたものである。それがかれ等は古い神話をかたつて人心を鼓舞したものであつたが、それがゼルマン

語を用ひる人民の間には非常な勢力となつたのである。即ちスカンディナヴィヤのと同じ系統を引いてサクソン人の内にはサガ(Sagas)といふものがあつた。サガとは物語の意で、文體はきはめて粗放であつたが、これが口碑に依つて甲の時代から乙の時代へと傳へられ、それからはじめの近代的の叙事詩といふものが出来た。即ちこれが英語に於ける尤も古い歴史で、また尤も古い物語りで、かの有名なベオルフ(Beowulf)それからバルチック海のオデッセーといはれて居るグトラン(Gudrun)の美しい傳説といふものがこれである。

それと共にまた一方にはセオドリッ王(King Theodoric)の行跡(ニーベルンゲン(Nibelungen)の歌の基となるもの)がゴス人並にフルガント人の勇氣を鼓舞するものとなつた。吾人はこれ等の物語の起源に關しては何等の知識をも有して居らぬ。ワルン(W. Wolf)はキリスト紀元前に出来たものと云つて居るし、シムメルマン(Schimmelmann)は紀元前千五百年前のものだと斷言して居る。ぐらゐで、吾人は全くその凡の見當さへ解らない位である。賢人と言はれたサエムンド・シグフッソン(Saemund Sigfusson the Wise)は十一世紀に、メノルン・メッセルマンン(Shorre stur-

Lesson)は十二世紀に、アイヌラントで、かのルーン(Runic)の文字で書かれた書物が、この物語をかき集め、それを出版しやうとした。即ち前者は韻文で、後者は散文で譯じたのである。それが爲めに、今では第一のエッダ(First Edda, the Second Edda)といふ名が出来た。それで此二種のエッダが今日まで傳はる事になつたのである。

この外、ゲルマン人はなほ歐洲の西部に永く移住して居つたケルト民族をば逐ひ出したが、このケルト人は愛國心と自然に對する愛情の深い精神的な人種であつた。即ちかれ等は其逐はれて去つた跡に其國滅落の悲歌を残して行つた。これを共に同じケルト民族であるブリタニー、ウェールズ(Britanny, Wales)スコットランドの高地、コーンウォール、アイルランド、オプ・マン(Tales of Man)——ブリタニーの外何れもイギリス國內——の住民もみな獨立を失つたが、これ等はなほ其地に住み、その國民獨特の衣服を着、その國民獨有の言語を用ひて居る。かれ等民族の内には澤山の詩人が居た。たとへばタリエン、アチウリン、リリワルチ、ヘン(Taliesin, Aneurin, Llywarch, Hen)などの名はシムリック人種即ちケルト民族の獨立心並に

想像力のあつた事を示すに足る「近世のことであるが、一寸此處では是非注意して置かなければならぬことがある。といふのは一七六二年にマクファーソン(Macpherson)が公刊して非常な騒ぎを起した有名な偽作の事である。——即ち紀元三世紀の作でオシアン(Orishian)の歌だといふて出した詩のことである。處がこの歌といふのは古いスコットランドの山地に行はれた歌で、マクファーソンがそれに想像を加へて拵へ上げたものであつた。併しこの偽作のオシアンは當時本物と認定され、爾來著者はローマンチック派でスコットランドのホーマーとまで呼ばれ、また北方のダンテとも言はれ、ダンテのごとく莊重に偉大でまたダンテ同様に超自然的であり、さらに具象的でまたイリアットの作者よりも人間に直接して居るといふ評到であつた。この贊辭は當代の識者がみな一致して與へたものであつたが、終に斯ういふことが證明された。即ちこのフィンガル(Fingal) (即ちオシアンの歌の中の勇士)の夢のやうな歌は實は十八世紀の作者即ちマクファーソンの作つたものであるといふのが明らかになつた。著者は勿論巧みな才氣に溢れて居る人で古文の形式文體に同化する能力を持つて居たのである。併し力と創意の才とを

欠いて居た。尤もこの一篇の詩にエルス語(Elsu)やケルチック語並にスコットランドの傳説の古い散逸した詩の斷片を織り込み、これを近代と古代との兩思想から取つた觀念に組合せて多少古詩を髣髴させたといふ點は許してやらなければならぬ。ケルト文學の事に就ては今只これだけ添へて置く。さらに又聖徒パトリックがアイルランドの各部に福音を傳へて廻つた時國は野蠻極まる状態に陥つて居たが、それにも抱はらず幾多の詩人に會合する事を得た。且つ其詩人達は押韻の制約をさへ踏んで居たのである。近代のケルト學者はこの古いアイルランド若くはガエリック(Gaelic)傳説なるものは古の野蠻的趣味と迷信とを伴つて居るに抱はらず、頗る貴ぶべきものであり、寫實的の美點をもつて居ると言つて居る。

偕てまたフランク人に至つてはその初めゴールの地に定住した時からすでに抒情詩並に叙事詩を持つて居た。この人種の内にも亦アングロサクソン人種と同じく諸方を遍歴する行吟詩人があつて、それが至る處に自分の窮乏を告げ自分等を庇護する主人を讚美し、また戦争や遊戯の歌などを作つて居たものであ

る。ウイジゴス人やブルグンド人がローマの領地に侵入した時、これ等の行吟詩人も共に其地に入り、其澤山の詩特にかの有名なシグフリード (Sigfried) の詩をゴール人の間に行はれはじめた。

これ等明確なる作詩の外、世に知られない作者若くは好事家などがあつて、それ等が少しづつ色々な詩を世に残して行つた。これが所謂民謡で即ち人民自然の聲であつた。又幾分か變化はして居たが、なほ古の文化の名残を保存して居たのはキリスト教會であつて、これが教師や傳道者を世界に出して居つたが、歐洲は全く智識上暗雲を以て蔽はれて居つた。第五世紀の歴史家に斯ういふことを言つた人がある。文藝上の斯くの如き緘黙間に在つて只聞ゆるものは余の動かし居る筆の音のみであると、巧みな言ひ方であるが、これが即ち當時實際の有様であつた。只この荒寥たる時に當つてギリシア思想の最後の努力を見たのは稍、注意すべきことであらうか。即ち紀元四五〇年に生れたデイシアのプロクラス (Proclus of Dyala) は大文豪であり大詩人であつて此一人に於てホーマーとプロトの思想が再び活氣を帯びて來た。かれは熱心なギリシア的思想の崇拜家

で奇蹟を行ひ魔術にさへ巧みで、詩神と不思議に交ると云はれて居た。其上眞面目にまた固き執心を以てプロトの思想と東方の思想とを融和し、また神話の説と自分の主張した神の攝理の説とを融合せしめやうと考へたのである。一言にして言へばプロクラスはギリシア哲學最後の學派の最も著名なる教師であつた。その哲學的著作は一八二〇年から同二七年までの間にフランスでグロト (Victor Cousin) に依り六巻に分ちて出版された。また獨逸では一八二一年から同二五年に至るまでの間にクロイツェル (Kreizer) に依り五巻に分ちて出版された。此外五世紀六世紀に於てギリシア思想を傳へたるものではノンナス・スミルナのキンタス、ムーザエウス (Nonnus, Quintus of Smyrna, Musaeus) 等がある。併しこれ等の人の名も西方並に北方の人の耳には達しなかつた。それといふものこの西北方の人種は自家の國民的存立の基礎を固くするに急がしくて、隱微な知識上の事に注意する暇がなかつたからである。

紀元第六世紀に於ける世界の光景はたゞ、宗教上の混亂政治上の亂脈、智力上の痲痺を示すに過ぎなかつた。かのアレキサンドリアが文化の中樞でなくな

つたのはすでに餘程以前のことであつた。無學なる併しながら熱誠な皇帝ゼオ
ドシアヌス大帝の下に大僧正セオフィラス (Theophilus) がかのアレキサンドリアな
る天下無双なる圖書館を侵略しこれを分散してしまつたのは、すでに二世紀以
前の事である。セオフィラスは所謂無智文盲な狂暴な連中を引率し、世界に於て最
も秀れた宗教的建築物であるといふこのアレキサンドリアのセラピウム (Serap-
eum) の内に圖書館があるを打壊してしまつた (セラピウムは廣大莊重な建築
で、その柱の如きは珍らしい大理石であつて、内部の壁は金銀銅の板を以て張ら
れて居たといふ。恐らくこれは世界無双の堂宇であるといふ) が、これセオフィラスは
またアレキサンドリア附近の都會カノピウス (Canopus) といふ處のセラピウス神の
寺を破壊した。案するにかれはその破壊的慾望を満足させるに足るものは何物
をも打壊すに躊躇しなかつた。かれに次ではその甥でありまた後繼者であるシ
リル (Cyril) が著名な數學者なるハイパシヤ (Hypatia) を群集盲動の犠牲として虐
殺した。この忘るべからざる罪惡の時日は紀元四一四年で、吾人は此時日を以て
其狂暴と並にギリシア文化の末運を示すものとして永久に記憶するのであ

る。かれ等は斯かる亂暴を敢へて行つたが、その播いた種はかれ等自ら刈らなけ
ればならなかつた。即ち斯く藝術を破壊し去つた爲め、かれ等キリスト教の僧侶
は、その智識の手を束縛する事になつたのである。併しこの破壊の理由としてか
れ等の言ふ處は斯うである。即ちそれ等の美術品が残つて居ると末々までも悪
い教の影響を残す事になるから飽くまでその痕跡のないまでに打ち壊してし
まはなければならぬといふのである。それでこの古のギリシア或はラテン思想
を打破し去つたその跡が空虚になつた。その空虚を満したものがキリスト教會
なる師父等の智識であつた。併しこの師父等は眞理を曲解し、凡そあらゆる正當
なる智識はみな聖典の内のみありといふやうなことを信仰の個條としてこ
れを制定し、爾後幾世紀の間も凡ての進歩といふものを停めてしまつたのであ
る。

東方に於ても恐るべき災難がローマ帝國に降りかゝつた。ワンタル人に對する
アフリカ戦争ゴス人に對する伊太利戦争並に飢饉、疫病等はみなジャスチニア
ン帝の治世にあつたことで、それが爲めに失はれた精靈は幾千萬を以て數ふる

ほどに猛烈なるものであつた——ドレーパー氏(Doraper)の歐洲智力發達史(History of an Intellectual Development of Europe)参照]。アフリカはローマの支配の下に各宗派の戰場となつた。その争闘を静め且つかれ等の敵愾心を満足させる爲め並に各宗派共同の一敵を仆す爲め、ローマの爲政者は野蠻人の力を藉り、其蠻力を擅まよにし、此世界に於ける最も麗はしきアフリカの地をさんたくに蹂躪してしまつた。アフリカの地が如何に文化に進んで居たかは次のことにて明かである。即ち文典學者のサルピシウス・アポリナリス(Sulpicius Apollinaris) 哲學者のアピレニウス(Apuleius) 其他キリスト教徒の學者テルトリアン、サイプリアン、ラクタンシウス、アウガスチン(Tertullian, Cyprian, Lactantius, Augustine) 等はアフリカ及びカトセージの人であり、またマカス・オレリアス及びルシウス・ヴェルス兩帝の師であり且つ友人であつた。一學派の首領フロントー(Fronto)はシルタ(Citha)の人である。ローマの學生等はその議論の間に於て必らずアポナリスとこのフロントーをあげて文體の創始者國語の改新者とした。カトセージはまたローマに大事な處で、これは前記テルトリアンの生れた地であり、またキリスト教がローマと

ビザンチンに其根を据える前の大本營であつた。さらにオーガスチンがドナチスト派の根據をつき、教會歴史上に紀念すべき大事件となつたのもこのカトセージで起した事である。

尤もジャスチニアン帝はこの敗滅の挽回に力を致し、アフリカと伊太利との地を回復して一時平靜の状態を得た。素よりその背後には哲學者や異端の徒や猶太教徒やその他の異教徒並に法皇ヴィシリウス(Vigilius)等が互に相侵し相闘ぎ、名狀し難き教理上の混亂の状態にあつたことはいふまでもない事である。併しジャスチニアン帝は名聲を熱望した。そして大立法家であるといふ名譽を博し得た。ジャスチニアン帝が人民から感謝され得る點は第六世紀の法律を古風の解釋に捕はれる事のない様にし、現代の精神を自由にして、これもまた貴族的異教的の古風に制せられない様にし、この混亂の帝國內に殖産的の發達の道を開いたといふ處にある。併しその短所もある。アデンスに於ける哲學の學校を異教と關係のあるといふ口實の下に閉鎖した如きはそれである。それから五度ローマを取られ、また回復した後ローマ元老院の廢止を宣言した。それが爲めローマ古代

の哲學並に古代の權力の如きは、その記憶にだに殘らぬ程帝の下に絶滅してしまつた。さて「ジャスチニアン帝のこの宣告を出したのは紀元五二九年のことであつたが、その當時はアリストートルの註釋したるシムプリシウス(Simplicius)並にこのアデンスに於ける學校の最後の教僧ダマシウス(Damasius)の名聲がその絶頂に達した時であつた。併しこの宣告の出てから後二人は弟子と共にヘルシア王のもとに走つた——立法者としてのジャスチニアン帝は酷しく非難されて居る。十九世紀の獨逸派の史家は特に帝がトリボニウスとセオドラス(Theophilus)を共同してローマ法を制定したといふ聲名を打破しやうと力めた。併し有名なフランスの法律家トロポン(Troplong)はローマ民法に於けるキリスト教の勢力(De l'Influence du Christianisme sur le droit Civil des Romains)といふ書物で帝の辯護を力めて居る。ジャスチニアン帝の死後四年即ち紀元五六九年にアラビアのメッカに一偉人が生れた。その突貫の聲は空論を闘はして居たキリスト教派中のアリアン派ネストリアン派等を震駭せしめた。偉人とは即ちマホメットである。そのマホメットの劍は當時までもなほ亞細亞とアフリカとをキリスト教

に結合して居た一條の線を切り放したものであつた。以上は東帝國の事であるが、西方に於ても天候は決して靜平ではなかつた。今や荒廢した伊太利は恐るべき危機に際して煩悶を重ねて居た。ダニープの河畔の平地は野蠻の地と化してしまつた。帝國を分割した新しい人民の進歩なるものは極めて不確實なものであつた。かれ等新しい人民は一步を進める毎に再びかれ等がやうやく脱却して來たその暗黒の状態に再び歸らんとするやうに見えた。斯くの如き狂亂の時に際しては智的また道德的進歩の實際に注目すべき要素を見きはめる事はむづかしい。また次の時期の如何なるものであるかを明言する事も出來ないのである。

さて南の方ではマホメットの聲に應じて立つたアラビア人は其領土を廣げ、西の方デブラルタルの海峽から東の方ガンデス河畔にまでに及んで居たと共に、ラテンス人種はゲルマン人の捕捉を免れやうと苦悶して居た。併しその苦悶努力にも拘はらずラテンの勢力範圍は絶えず狭まくなつて行つた。なほまた東のピサンチンに於ても古い思想即ちギリシア思想ヘレニズムは西に於けるラテ

ンの勢力と同じ様に其勢力を失て来たといふのはビサンチンでも神學者が絶えず臆を張つて論争し結婚を賤し、獨身生活を貴み其結果は人間を早く天國に導くといふ口實の下に、地上の人民を滅殺して行くといふ事になつたからである。

衰運は歐洲一般に行き渡つた其極が第七世紀であつた。盛んな學校といふものは僅かに二三ゴールの地にあつたのみである。即ちセント・レオガール(St. Leodegar)の育てられたポアチエ(Poitiers)の學校、この名は詩人フォルチュナタス(Fortunatus)の名を以て特に著れたものである。次にはオーヴェルニュ(Auvergne)地方のイッソア(Issouie)の學校、こゝでは聖プリースト(S. Priest)が修業をしたところ、五世紀の頼才あるゴール人と呼ばれたシドニウス・アポリナリス(Sidonius Apollinaris)もた六世紀にはフランク人中の史家といはれたツールのグレゴリー(Gregory of Tours)が居たところである。ヴェナンシウス・フォルチュナタスはポアチエの有名な監督であつて、その詩は少し士風を帯びては居るが、充分に醇なる感情と優しい心を示して居るものである。シドニウス・アポリナリスの文體はやゝ氣取つた處は

あるが、巧みな比喩に富み、古典派の最後の作家といふべきものである。また其書翰と詩とは五世紀の歴史の史料を與へる源とまで考へられて居る。この人は又ヴェジユスの諸王の爲めに迫害され、終にローマの權威のゴールの手中に落つるを目撃するといふ不幸に際會したといふ人である。——グレゴリーは無智の人であつて奇蹟を行ひ得るといふので、それを濫用した。またその用語は粗雑で誤謬多く、題目の配列の如きは秩序なく混亂して居はしたが、その記述には活氣があり、其對話は巧みに、其寫したる人物は實際生きて居る人物のやうであつた。なほ最後にはクレルモントの學校がある(Clermont)。詭辯學者の尤も秀れたものと呼ばれた聖ボンネット(S. Bonnet)の傳に依ると、文典即ち文學及び古典は第六世の間にクレルモントで教授された事が解る。その他なほ傳道者の力に依つて徐々にとして力を得て來た學校も少しはある。

當時詩と學問との名残が何うなつて居たかその跡を逐ふ事は難しい事で、この二つは散りくになり失はれてしまつた。或はアレキサンドリアやビサンチンの遺訓、何處かの修道院内の内にかくれて居たかも知れぬ。或はカムブリア若く

はアイルランドの寺院にそれが隠れて居たかも知れぬ。此二個所の寺院には思想家が居て三個の古い思想を調和せんと力めて居た。即ちバイブルとホーマーの詩とアイルランド固有のケルト傳説、この三思想を融和せんと計つて居たといふ事である。かゝる中にイギリスのみは最も多くの學識を保存して居つた。そして第八世紀の終りの頃に當つては歐洲の最も開化した國であつた。エグベルト(Egbert)の弟子であるアルキウイン(Alcuin)といふ高僧を送つてシャールマン大帝の野蠻征伐の旗頭をしたのは即ちイギリスである。

第八世紀といへば東方の諸國即ち支那、日本、印度及びスペインを侵略したアラビア人の内には文學が榮えた時である。又獨立した文明が北アメリカに出來て居た時であるが、この北アメリカの文明なるものは世界の何處にも知れては居なかつたものであるが、歐洲はむなく無智の状態に居つたので、たゞ其處此處にちらほらとつまらぬ乾燥無味な年代記があるばかりであつた。また寺院で筆執る人は同様乾燥極まる書き方を以て其事務を記録し、また時に一般世間の興味をひいた事實を記すに過ぎなかつた。當時の人は斯ういふものを以て歴史と

心得て居たのである。それ故傳説を集めたつまらぬ書物や奇蹟でも行ふ様に詩や説教を書いて居た人の作物中に當時の宗教上の運動の事などが載つて居るに過ぎなかつた。これが即ちまた當時の文學の状態であつた。併し此薄暗い中に二三の注意すべき人物も居ないではない。[此内にシリア人なるダマスコのジョンなる人の名をあげなければならぬ。この人はボエシアス(Boethius)に於て明かに見られる煩惱學派の基を開いた人である。紀元六七六年ダマスコに生る。ギリシア人の間にあつては煩瑣的方法モラリツク、メソッドに依つて問題を取り扱ひ、初めて神學の系統を立て、さらにアラビア人の内に往んでその方面にアリストートルの哲學に對する趣味を普及した。この人物のうち最も偉大なるものはかのビード(Bede)である。この人は歐洲の北に居りながら東方及び南方の學藝をば考究した人である。なほ次いでロセシア二世(Lohair II)及びダゴベルト(Dagobert)の會計役をし、野蠻人中のフネロンとまで後に言はれたエロイ(Eloi)といふのがある。この外セヴィール(Seville)の監督で、ツィジユスを改宗させた博識の人と云はれたイシドール(Isidore)傳道者で神學者で詩人で、はじめて大英國の精密な年代記をつくつたコラムバ

(Columba) 暫くして耶蘇と稱したアダルベルト(Adalbert)思ひ切つた合理派でいろ
 いろの點から耶蘇新教の先驅と云はれたクレメント(Clement)等が居る。併しこれ
 以外何人も居なかつたのである(この内ビードの事は英文學史家が呼んで「野蠻
 人中の教師」といふ位であつたがこの人は自分の仕事の効果のない事を深くさ
 とり世界の歴史を六期に分けユダア人のバビロンに捕はれる時からキリスト
 降誕の日までを第五期となし、これを老年期とし、自分の當時を以て第六期の老
 衰期とした。即ち今や如何に働くもその効果のない時であるといふ意を語つた
 ものである。)

第八章

シヤールマン帝の文紀再興——文化に向ふ努力——シヤールマン、アルキ
 イン、ラバナスマウラス——第九世紀の終り第十世紀の初めに於ける亂脈
 ——封建の世界——無智文旨再び歐洲を蔽ふ。

吾人はシヤールマン帝即位の以前のフランスはサクソン人種のイギリスよりも
 遙かに劣り(ノルマン族の入りざりし以前のイギリスをいふ)インドール師の本
 國なるスペインより劣りインドールに就て言ふがこの無智文旨の世に當つて
 神學者にして兼て歴史家であり又百科の學に精通して居たセザールのインド
 ールはギリシア、ローマの文藝的傳説を集めた又その語原學(Etymologies)といふ
 書物を以て中世時代の注意を惹いた一種の學問を制定した。また伊太利にも及
 ばなかつたことを見た。特に伊太利の如きは第六世期に於て古代文化の最後の
 代表としてかねて中世紀の初めての哲學者であるボエシウスとカッシオドラス

(Cassiodorus) を出して居た。この兩者の論文は文藝復興期に至るまで古學の教科書として用ひられた程であつた。斯かる有様で、フランスはその間に介立して文化といふことに關しては歐洲中最も前途のないやうな國になつてしまつて居た。

然るに其處にシャーレマン帝とアルキュインとが顯はれてこの状態に變化を與へた。前者は大皇帝、後者は僧侶で、二人は即ち社會の二大勢力を代表したものであつた。所謂僧侶の二勢力である。シャーレマン帝は教育のあつた君主であつたと共に獨逸人種の勝利者であつたが、平和の藝術にもまた有事の日の戰術にも等しく勝れた天才であつて、眞正の學藝復興を鼓吹した人である。それでシャーレマン帝の招きに應じて集まつた學者は世界の各方面から來た。その有様は恰かも學問と智識とかその一點に集中されたかと思はれるやうであつた。帝はすでに國民歌を集めさせ、ピサのピーター、助祭のパウル並にアクレリアのクレメント等に依頼し、自分の臣下の教育に力めさせた。

これ等臣民の教育を依頼された人達は、傳道でもするやうな心持ちで教育の種

を播いた。屢、暗夜のやうな人心に道理の光を輝かす爲めに奮闘した。然るに人民は甚だ固宰でその無智文盲の状態に甘んじて居り、文學を輕蔑して時間の浪費であると言ひ、學問の如きは其名を聞いたばかりで排斥するといふほどであつた。それ故シャーレマン帝がこれ等の人民を開明の域に導かんとしたその努力は失敗に終つた。併しその効果はこの人民の教育以外に於て收められた。例へば書物の數は増加して來る。人々は再び熱心に神學上の微妙な問題を論ずるやうになつた。宮廷に居つた學問あるその仲間も互に競つてその難かしい問題に對し名論を吐かうとした。シャーレマン帝自からも意見を吐露し、修辭學上の論辯を以てこれを主張した。即ちシセロ、マクローピウス、アビュレーウス、プレトリー、アリストール (Cicero, Macrobius, Apuleius, Plato, Aristotle) 等の所論は帝に材料と證據とを供給するものとなつた。シャーレマン帝はまたアダプシヨニズム派 (Adoptionism) 耶蘇教の一派で、キリストを以て神の子とするその見解に對し、人間として並びに神性として見る二面を主張したものに關する議論にも大事な働きをなした。ユダヤとまだ全然分離せざるキリスト教がそれと分れる最後の活動である。偶

像排斥派 (Iconoclasm) の異端に對しても深く注意をして居た(アダブシヨニズムといふのは素とネストリアス (Nestorius) の説で後七七〇年ごろ再燃し七九四年にはフランクフルトの會議で、また七九九年にはローマで異端として廢棄せられた宗教上の學説である。——偶像排斥派に就いては史家は多くその起原をカリフエジド (Caliph yeid) に歸する。この人は偶像の破壊をば飽くまで主張し、その爲めにユダア派の會議を開かじめレオ帝をすゝめて、偶像の禮拜を禁止させた人である。この神像禮拜はこれまで百二十年の間皇帝と教會との間に蟠つて居つた争論點であつた。そしてそれが爲めにはコンスタンチノーブルに於て恐るべき流血を見、また爲めに東ローマ帝國の基礎を危くしさらに西帝國には重大な政治上の混亂を惹起したのである。

シャーレマン帝に聘せられたアルキエイン (Alcin) は萬能の天才であつた。數學者で詩人で歴史家で論理學者で聖徒傳の解釋者並びに研究者で、行政にかけての天才で政治家で言語學者で、且つ私行に於ては禁慾主義の人であつた。その上古典の傳説にも精通して居た。即ちアルキエインの透明な徹やかなことを洞察する

頭腦は古のギリシアその他の美風に感銘し、その古文を學殖ある少數のものゝ爲めに復活させやうと考へた。尤もこれを一般の人々に教へ知らせることは欲しなかつたのであるが、兎に角古文學の復興を計つたのである(アルキエインは嘗つて大僧正があまりヴァージルを愛好し過ぎたのを非難し、あまりその方にふける結果は福音書を等閑にすると云つた事がある)。それ故當代の人々はアルキエインを呼んで自由藝術の倉庫と云つたほどである。之を批評的に云へばアングロサクソンの僧侶の書いたものは論文にせよ、註釋にせよ、聖僧傳にせよ、教育に關するものにせよ、何れも冗漫で一向創意的の處がない。然るにアルキエインは自己一流の教授の方法に依り學校を建立し、その勢力に依つてシャーレマン帝の文明的思想を進歩發達させ、非常な成功を博した。かれは西帝國に學問を公開して教へる事を始めた最初の人である。それ故かれの下には弟子が群集した。その弟子がまたそれゝ教育者となつた次第である。

その弟子のうちで最も名高くなつたのはサクソンの神學者でラバナスマウラス (Rabanus Maurus) といふ人であつた。この人はアルキエインに就いて學び、後自分

の故郷で教育に關する完全な系統を公表した(その七種の自由藝術を論じたるものは有名なものであるが、今日残つて居るのはその内の押韻論のみである)。この人は獨逸の中心から野蠻風を放逐し、言語に就てラテン風を採用したといふ。この人に對してアイルランドにジョン・スコタス(John Scotus)といふ人がある。これは寺院に引きこもりアレキサンドリア派の新プラトニズム學派並に汎神的思想主義を復興し、古代世界の學問と近代の信仰との連鎖をつくつた。此二人は丁度同時代の兩偉人として對照されるべき人達である。斯んな風になつて來て今はフランスにも學校が以前ほど少くはなくなつた。至る處小都會にもそれがあるやうになつた。ニューストリア丈けでも幾個かの學校があつて其處から教育の健全な勢力が廣がつて行つた。たゞ不幸にしてそれに迷信的誤想の伴つて行つたのは遺憾の次第である。その幾多の學校の内でも最も名高くあつたのはツールの聖マルチンの學校で(S. Martin of Tours)これはアルキエイン並びにヴァージルの賞讃者であるシグムン(St. Sulpice)の指揮に依つて非常に盛んになつた。學生の數も非常に多數であつたが、それは主としてイギリスド

イツから來たものであつた。學校といへばマホメットの勢力範圍に歸してしまつた。スペイン並にアラビア人の大學も智識に渴く學生の群がる處となり、東方の諸國から態々こゝまで來たものが澤山にある。斯かる有様で人の才能はだん／＼に發達しシャールマン帝の希望した教化は成就されさうになつて來た。文學の燈火は再び點せられた。然るに不幸にして意外な事が政治的革命的形をとつてこの新氣運の芽を枯らす事になつた。第九世から第十世紀に至る變化に際して騒亂が起つた。そしてその騒亂の爲めにシャールマンの大帝國はその基礎から覆されさうになつた。この騒亂の時に際してヒンクマール(Hincmar)といふ人物が大きな働きをして居る(ヒンクマールは第九世紀に於ける最も緊要な政治上の人物である。この人は神學の方にも名はあつたが、その政治上の關係を外にして一向に注意すべき人物ではない。其神學は平凡に批評は皮想的で、論辯はたゞ重くるしく、その書きものに至つては更に劣等であつた。その巧妙なまた人の心を動かす様な天才はフランスの教會ローマ教會との間に於けるかれの苦悶、または法皇と國王との間に於けるかれの

苦心といふやうな事に於て顯はれ、それが當代に永久の印象を残した。ヒンクマールのことは夫れだけであるが、さてシャールマン帝の雄圖と共に顯はてれ来た世の進歩は忽ちこの騷亂の爲めに廢滅に歸してしまつた。それではその騷亂といふものは如何なるものであるかといふに、今やシャールマンの帝國が西カタロニア(スペイン)から東エルベ(ドイツ)に亘つて大版圖になつたのであるが、さてその後繼者の代となつて其處に争が起り、この大帝國の一致が破れた。それで帝國は無解し残つたものは只その名の記憶と各部小王國間の争ひのみであつた。これまではシャールマンの大意志の下に二種の人民が同一されて居たのであるが、これが今や帝の死後別々になつた。即ち一方にはフランス人、一方にはドイツ人となつたのである。斯く一度び別れた以上これ等兩人民は忽ち于戈を以て相見ゆるやうになつた。斯くて帝國とその領土の分裂はまた自然に社會の混亂を起さざるを得ぬ。また實際混亂を起した。即ちこの兩國民の大騷亂と共に各小部分に於ても色々の争鬪が無數に起つた。これが即ち前に云つた政治上の革命として顯はれた意外な騷亂で、この各が制裁なき野心を逞じうする間に全く

智識的の才能また智識的事物は發達する機會を得なかつたのである(吾人は別にイギリスに於けるアルフレッド大王の文化に盡した行動を記さなければならぬ。大王は前世紀に於てドイツ人侵略の爲めに荒された文化を回復し、その發達に力をつくした。その王位に即いた時言はれた處に依ると「ハムパー河(Humber)の此方に居る僧侶でその暗んじて居るラテン語の祈禱の意味を知つて居るものは極めて少い。またラテンの文學を英譯し得るものも同様に極めて少い。ハムパー河の向ふ側に至つては恐らく左ういふ事の出来るものは一人もあるまい。實際余の王位に登つた時テムス河の南に居る僧侶で左ういふ事の出来るものは一人もなかつたと覺えて居る」と言はれる程であつた。

二

當時封建制度がやうやくその形をなして西部歐洲の適當なところには城砦が築かれ始めた。これはその武裝を堅固にして防禦並びに人民抑壓の兩様の爲めに用ひたもので、これからいよく封建政治の世の中が出来て来たのであつた。即ち封建制度は野蠻社會の殘墟から徐々と發達したものであるが、不知不識の

間にこれが將來に影響を與へ、その殺伐な外形のなかに近代社會を組織する原
子を包藏して居たのである。

この時代に於ては人民は暴政に苦んで居た。人々はまた互に掠奪をのみ望んで
争つて居た。諸侯とその臣下と教會と教會を掠める國家とは互に相争ひ、また教
會の内部に於ても監督は有福な謀反氣のある僧侶と争ひ、更に僧侶が法皇と争
ふといふ様な有様であつた。

斯かる状態は素より人の心靈上の事に就て喜ぶべき事ではない。道德上の教化
は封建諸侯の鐵の如き心を柔げる事は出来ない。彼等は絶えず戦をなし、掠奪を
をなし、欺偽をなし、然らずんば試合をなし、只肉身の満足を買つて居たのみであ
つた。僧侶と雖この暗黒の内にまき込まれ、思想上のことを考へる暇はなかつた。
何となれば日々必要に迫まれて居たのは武勇に關する事のみであつて、そん
な精神上の事は何うでも良かつたからである。こゝに於てか文藝上の作物は全
くなくなつた。斯くてまたシャーレマン帝に依つて一時望をかけられた文化の再
興は又再び杜絶されることになつたのである(これは歐洲全體のことである。その頃

スペインの事を書いたものゝ内に次の様な記事があつた。この時國王も侯伯もそ
の他凡ての豪族武士等はみなその乗馬を自分の寐室に置いて居た。これはイザと
いふ時すぐ様乗つて出られる爲めである。以て當時の状態を想像する事が出
来る。

文化の事に就て言へばバイブルの註釋はあつてもそれに創意的の處は少しも
なく、全然前代の師父フザイスの言葉をそのまゝ引用したに過ぎず、説教といへば無作法
な野蠻極まるラテン語で作成せられ、而かもそれが教會の財物を奪ふものに對
じまた一般の悪事に對する悪罵に過ぎなかつた。無論叙事詩若くは諷刺詩はあ
つた。ゼバルト(The Bald)といふ詩の如きは戦勝を歌つたもので彫琢に富んだ併
しながら輕快な傑作である。またポエシアスを賞めたゲルベルド(Gerber)の詩
なども注意すべき作である。併しこれ等も寧ろ作としてよりは古文書として有
名なものである。これ等を外にしてラテン人種は當時その心を導くものを二つ
も持つて居なかつたのである。

吾人は今ゲルベルトといふ名を挙げたが、この人は後に法皇シルヴェスター第二

世(Sylvester II)となる人である。この人のみは薄暗い背景に對して巍然として立つて居る人である。その性格も尋常に異つて居て、兎に角第十五世紀中最も賢明でまた最も著名であり、學者でまた政治家であつて識見もあつた。只或は懷疑主義を抱いて居たかも知れぬ併し當時の人々は斯かる蒙昧の時代に斯かる著しき才能のある人のある事が了解出來ず、かれを魔術師として敬ひ且つ恐れて居たのである。

三

時の進むに従つて暗黒の夜は一層暗黒になつた。併し古の學問はなほ全く忘却されてはしまはなかつた。ゲルヘルトはその文庫の内にシセロ、シーザー、プリー、スエトニウス、スタシウス、デモステネス、マニリウス、クラウディアヌス、ホエシアヌス等の著書を藏して居た(Cicero, Caesar, Pliny, Suetonius, Statius, Demosthenes, Manilius, Claudian, Boethius)。フロドールド (Flodard) はまたその感興をリヴァイ、サラスト、ザマーシ、シーザー、ユートロピウス、エリアヌス(Livy, Sallust, Virgil, Caesar, Eutropius, Aelius)の著書から得、ゴンゾン(Gonzon)は押韻學を講じながらホーマー、プラトーン、アリストー

トル、テレンス、ホーレース、ヴァーギル、スタシウス等の大家から引用をして居る。併し書物は極めて少なく殆ど全く絶滅せんとして居た。ラテンの學問は制限されギリシア語は學ぶものもなく、従つて了解するものもなくなり、學問は全く引潮になり、たと警衛の學問のみが多少残つて居たのみである。

東帝國はその言語を異にしその制度を異にしたまた教會を異にして居る爲めに、西部歐洲の諸國とは交通は多くなかつたが、この東のビサンチン帝國も宗教上の騒ぎや内部の混亂の爲めに支離滅裂の状態になつてしまつた(尤も一言して置かなければならぬ事は古典的傳説がビサンチン文學の内に重んぜられて居た事である。この東帝國ビサンチンの文學はまた充分に研究されて居なかつたが、中世記の文藝には多大な影響をもつて居たもので、すでに第九世紀に於てこの方面に於てはフオチウスの下に希臘思想の復興を見た。それがまた哲學者の君主と言はれたレオ、ニセフォラス、フォーカス、バシル二世(Leo the philosopher, Nicephorus, phocas, Basil II)等に依つて益々奨励された。バシル二世の下にはレオ、ダイオナヌス、ジョージ、セドレノス、ジョン、クシフィリン及びスイダスなどの人が居た(Leo Dia-

conus, George Cedrenos, John Xiphilin, Suidas) またその頃フシウス(Phoebus)の分派は功を奏して、それがやがてキリスト教會を相反した二個の大分裂に到達せしめたが、それと同じくマセドン王統がビサンチンの王位に即いたことはその結果から言つて非常な大事件であつた。フシウスは二度までコンスタンチノーブルの教會から追はれ、ニコラス一世から破門された。然るに紀元八五八年に全キリスト教會の會議を開かじめ、監督等を進めてローマの同盟より脱會させた。其處でこのフシウスの提説を承認したるものは此處に東帝國教會を建立することになつた。

西の方スペインでもまた古典並に宗教上の研究は衰へて、ムーア人の征服の下に消滅した。併しこのムーア人が一種の文化と遙かに進歩した藝術とを持つて來た。キリスト教の監督にカシダ(Kasida)といふアラビアの歌を作る人さへ出來た。コルトヴァ(Cordova)のアルヴァリス(Alvarus)といふ人は國人がキリスト教の學問を棄て、アラビアの學問に走り、自家固有の宗教や言語をも充分に知らずして、マホメット教の文辭の優美な流暢な處を求めるのを非難したが、この大勢

如何ともする事は出來なかつた。

西方の諸國は大抵古代の世界から受け繼いで來たものを失つてしまつた。併し西方の國民と雖これを遺憾として東方の學園にその古代の學問の跡をたづね、その學生となつて野蠻人の侵入に依つて打ち壊された教育を再び得やうとして居たのである。而して當時將に絶えんとして居た一條の知識の流れが全く涸渇してしまはず、だん／＼に流れを増し、清らかなになり、革まつて行くやうになつたのは即ちマホメット教のアラビア文化の名譽に歸さなければならぬ。

第九章

西歐に於ける文化の全滅とアジアに於ける學問の隆盛との對照——極東にてすら然り——第十世紀に於ける支那日本及びクメルの地並にベルシア——第八世紀以後に於けるアラビアの學問——其文明に就いての見解——西歐に於けるアラビア文書の紹介、

紀元第十世紀は其不幸災害並に混亂が恰かも葬式の行列のやうに西方の諸國並に東ローマ帝國に續いて起つたので、歐洲の黒族時代と言はれて居るところが、この歐洲の黒い族の時代が東洋諸國の大部分には文華燦爛たる一時期をなして居る。昔にアラビア人の間にばかりでなく、亞細亞大陸の遠い離隔して居る諸國にも華を咲かしたのである。

支那帝國に就ては常に人の注意が向けられて居るが、丁度唐時代(T'ang)に於て韻文の非常な隆盛を致した。これは季太白(Li Tai pi)といふ沈鬱な夢想家で同

時に智力上かのヘルシアのオーマー・カイヤム(Omar Khayyam)及びハーン(Hafiz)の同類でありまた先驅であつた詩人に負ふ處多いのである。太白は H'ouan-Tseuz 帝治世の裝飾であり地上に追はれたる天上の神といふ名さへ博した位である。次に杜甫(Fou Foh)が居る。杜甫は此國のホーレースといふ處で、青年、春森林、山嶽徳の樂詩の競技逍遙、默想といふ様な事に就いて歌つたものである。此外此兩家につづいて幾多の大詩人が輩出して居るが、さらに次の王統宋の時代になつても文學は著しく隆盛を致したのである。

文藝上の競技といふ事が支那に於ける程重んぜられた處は他になく、又學者がそれほど貴ばれた處もない。此點はあらゆる文學の内にあつて最も興味ある、また最も注意すべき點である。凡そ之までに西歐の文學的影響を受けず、全然孤立して發達した文學はなかつたが、支那文學ほど西歐人種との思想の交錯の跡を示して居ないものはない。然しながらそれと共に人物を明らかに示し、風俗を觀察し日常生活の實際を顯はしたる點に於て、これ位西歐の文學に似て居るものもない。支那文學は實に一大偉觀である。